具視の侍講に擢でられ、また德大寺實則、柳原前光二卿の爲に經史を講じた。後召還せられて藩黌の教授となり、徵士となり、集議院に出仕し、辨事に任せられた。民權の說大に起るに及んで門を杜ぢて英佛の書を讀みバックルの英國文明史を譯し、人心を鼓舞し、後中江兆民等と日本政書出版會社を起し、譯述に從事した。且筆を自由新聞に執り、北辰社長となり、荒川高俊、山川善太郎、新井毫等と關東諸州に遊說して自由を說き元老院に上書して憲法制定國會開設を請ひ、靜岡に東海曉鐘新聞を創立し、岳南自由黨の總理に推され、尋いで後藤板垣二伯及片岡健吉內藤魯一等と提携し民權論を唱へて諸州に演說し、十九年友人內務次官芳川顯正に薦められて三重縣飯高飯野多氣郡長に歷任し、治績大に擧つた。後選ばれて二回衆議院議員となり、晩年東京を去つて伊勢の松坂に居り、悠遊詩酒に自適し、大正七年十二月十一日年七十二で病死した嘗て本居宣長の墓の荒廢してゐるのを慨き山室山の路を拓き約二里の間櫻樹を

植ゑ、名けて新芳野と曰つてゐる。「孟子七篇七珠講義」、「新女大學」「女大學評論」「歐米大家所見集」等數種の著がある。

土居香國　ドイコウコク（詩）

名は通豫、土佐の人、嘗て郵便局に職を奉じ、郡長となつたことがある。夙に詩文に志して森春濤大久保湘南諸家の影響をうけ、更に槐南と交り、隨鷗吟社に入つて其の主幹に推された。主盟槐南の歿後は氏が社務を統轄してゐたが志摩に客死した。佐藤六石その後を繼いで大正六年主幹となつた。

十聲樓咏次二赤星藍城韻一（節三）

滿耳　松聲醉始醒、　颼々　謖々自閒庭、
坐來風捲乾　濤起、　龍氣迫レ人秋燭青、
繞レ簷叢竹玉亭々、　鳳尾拂レ簾湘簟青、
午睡不知天送レ雨、　凉聲　敕々夢中聽、
月夜金尊醉倚レ樓、　義人　一舸水中浮、
數聲柔櫓聞如レ雁、　渺軋遙　從雲際流、

岡崎春石氏は「構思精密にして造語幽秀、筆墨の外別に一種の神味がある」と評してゐるが蓋し適評である。

精養軒奉レ賀二土方東久世佐々木黑田四公榮壽一

四公　仙貌凝　髯霜、　精養　軒敞　耆英堂、
兩公　三杯　六韻好、　兩公　几杖不二尋常一、
伊昔　長鯨撼二地軸一、　百川　橫沛天　昏黃、
信哉　時危二異人出一、　挺レ身戮レ力同勤王、
整二頓乾坤一魁魁匿、　仰瞻　日月輝二雙光一、
一　公老侍　兩王主、　肅　雝　鑾降多二禎祥一、
昇平　人瑞今　四皓、　偉功不　復數綺　黃、
恩　深勳爵各　榮貴、　攀レ龍附レ鳳高翺翔、
霧雲　鬟鬟四海　靜、　群　呼萬歲稱二叢觴一、
後　進感激悟二忠孝一、　李唐　九老　徒壽康、
送二松田學鷗挈レ家之二朝鮮一
次二其留別韻一
不數銀　河博望槎、　飽餐玄　菟好煙霞、
官閒左二右詩書畫一、　世外　東西雪月花、
伊昔神尊臨治レ國、　如今　王土隣　家、
他時　翰苑文星會、　莫レ道於才吾有レ涯、

尙香國詩文集一卷は香國の詩文を知ることが出來るのみならず、土屋鳳洲の序また一讀すべきである。又大正五年發刊の仙壽山房詩文鈔六冊あつてその二冊は文章、四冊は體分けにした詩鈔である。

故東儀鐵笛　トウギテツテキ（劇）

本名は季治、明治六年六月十六日京都中立賣小川に生れ、初めは樂人として立ち、のち頃敎育事業に携はり、最近は新派俳優として藝名をあげてゐた。氏は舊劇に於ける市川團十郎や松本幸四郎ばりの處があつて、一度舞臺に立つて演ずるや、其脚本には多少の缺陷はあつてもこれを勇化し壯化し遂に美化して藝術的の價値を十分發揮せしめると言はれてゐる。氏は文章にも巧みであつて「音樂通解」「日本音樂史」のごとき著書を公にしてゐるが、この方面に於ても立派な藝術的天才のあ

ることが認られる。大正十四年二月四日病死した。
生前の住所　東京市外戸塚町諏訪一〇

東郷青兒　トウゴウセイジ（畫）

名は鐵春。明治三十年四月東京に生れた。東京青山學院を卒業の後、獨學で西洋畫を研究し、大正四年、我國に於て初めて未來派の個人展覽會を開いて知られた。其の展覽會に「コントラパシスト」等を出し、第三回二科會に「パラソルさせる女」第四回に「彼女のすべて」等を出して大いに觀者の注意を惹いた。二科會會友である。
現住所　東京市小石川區茗荷谷町七三

戸川貞雄　トガワサダオ（小）

明治二十七年十二月東京に生れ、明治四十四年靜岡中學校を卒業して、文學に志し、上京して早稲田大學に入り、大正七年七月同校の英文科を卒業し、爾來東京社に入つて「婦人界」の編輯を擔任してゐたが、同じく十年こゝを退社してその後創作に專念して居る。小說「蠢く」「屠牛場の群」「慘めなれども」「呪はれた手紙」「春の憂鬱」等を「早稲田文學」「槲の林」等に發表してゐるが何れも力强い感銘を與へてゐる。
現住所　神奈川縣平塚町新宿馬入松原、平塚農園內

故戸川殘花　トガワザンカ（文）

氏は幕臣の家に生れた。名は安宅・殘花はその號である。夙に操觚に從事し、每日新聞社に執筆したこともあるが後之を辭して著述を業とした。東京一帶の名所舊跡は一木一草の末に至るまで調査してゐるので史蹟物保存會にとつては氏は無くてならぬ人であつた。德川氏に精通して雜誌「舊幕府」を發兌して其主幹をした。著書に「三百諸侯」「幕末小史」等數種ある。大正十三年病歿した。

蝶狂ふ落花の雪や春も夢

生前の住所　東京市牛込區藥王寺前町

戸川秋骨　トガワシユウコツ（論）

本名は明三、明治三年十二月熊本縣玉名郡岩崎村に生れ。明治學院及び東京帝國大學英文選科を卒業し、文筆を事として傍ら教職を勤めた。氏が少時より島崎藤村や上田敏氏等と交りのあつたことは藤村の「春」にも書いてゐる。馬場孤蝶島崎藤村等と「女學雜誌」や「文學界」に活動したのは青年の頃であつた。三十九年より四十年にかけて歐米を漫遊して歸り「三萬三千哩」の著があつた。明治文學の新運動に於ける有力の一人であつたが創作よりも評論の方に力を多く用ひてゐた。「英文學精講」「そのまゝの記」「エマーソン論文集」ユーコオの「哀史」ダントンの「エイルキン」「メレジユコヴスキーの「フオアランナア」ボツカチオの「デカメロン」「文鳥」等著作翻譯がある。明治四十一二年の頃上田敏博士が京都帝國大學の英文科に轉じたので、氏は其のあとを襲ふて東京高等師範學校の教官となつたこともあつたが、今は慶應大學の教授を奉職し、時に隨筆やうのものや外國文學の紹介翻譯等にペンを走らしてゐる。
現住所　東京市外西大久保六六

土岐哀果　トキアイカ（歌）

本名は善麿、明治十八年六月八日東京淺草松淸町に生れ、早稲田大學英文科を卒業して讀賣新聞社に入り、後その社會部長となつた。近年まで雜誌「生活と藝術」を主宰し歌壇に一旗幟を翻してゐた。歌集「黃昏に」「不平なく」「佇みて」「街上不平」「萬物の世界」「はつ戀」「雜音の中より」「綠の地平等の外ローマ字普及宣傳の著書が數多ある。故石川啄木と共に所謂、「生活の歌」の一新體を聞き日常茶飯の生活をもさながらに歌ひ出して一種の趣ある歌を作つてゐる。尙ほ氏はローマ字書き歌集 'Nakiwarai" 等を出して飽くまでローマ字を宣傳してゐるところは熱心なものである。著書には右の外「作者別萬葉全集」を出した。數

年前讀賣新聞社を辭して東京朝日新聞社に入つて有力な地位を占めてゐる。

鍬を持てば其柄にからびし、土の香の淋しくもあるかな、合歡の樹を植う。

妻子を遊びにやりて、庭の樹の五月のひるの風を、眼をとぢて聽く。

消せばふと疲れし腦に、夏の夜の、瓦斯のにほひの流れたるかな

一日の務を終りて、見るものに、アカシヤの葉は淋しくもあるかな。

勞働をよろこぶ心を、ころすなかれ——夏の街路に、口ぶえを吹く。

夏くれば、白き窓かけ、まづ懸けて、街にしたしむさびしき書齋。

わが脂の、わがものとしも感じがたき、六月末の午後の勞れかな。

文字の表現にも句讀、空字、ダシ等を用ゐて普通の和歌とは異つてゐることに氣がつくであらう。

世の人は石川啄木を以て、氏の歌の師と思つてゐるが、そして成るほどその歌風の相似よりさうも思はれるが、土木哀果の石川啄木死後に於ける感想などを書いたものを見るに必ずしも師弟の關係は無くて、友人的關係にありながら其の感化影響を強く受けたのでは無いかと思はれる。

現住所　東京府下目黑八〇四

德田秋聲　トクダシユウセイ（小）

名は末雄。明治四年十二月金澤市横山町に生れた。第四高等學校に入つて學んだが半途で退學して上京し、泉鏡花、小栗風葉、柳川春葉等とともに紅葉の門下生として小說の研究をなし、三十年讀賣新聞に入社して長篇「雲のゆくへ」を揭げて文名をあげた。後自然派勃興の時に際して著しく頭角を現はし、現實味の細かな短篇小說を以て世に聞ゆるやうになつた。短篇集に「秋聲集」「出產」「媒曳」「花束」「絕緣」「犧牲」「殘りの炎」「賣笑婦の話」長篇に「新世帶」「足跡」「黴」「爛」「奔流」「あらくれ」等の作があるが、何れも日本の自然主義文學の頂點をなす頃の名作として重んぜられてゐる。氏は生れながらの自然主義者であつて紅葉山人の門下生ではありながら毫も紅葉一派の硯友社の作風に影響されてゐない。その描くところは平凡人の日常生活で、表現描寫も飽迄じみで唯見たまゝ感じたまゝを正直丁寧に描いてゐるから、何の奇もなく人の目をひく色彩もないが、併し嚙みしめれば嚙みしめるほど盡きない味が出る。津々として盡きない澁味が出る。その後書いたものには時事新報紙上に連載した長篇「路傍の花」や「妹思ひ」などの外に短篇「ある女の花」「爭鬪」「蘇生」「屋に迷ふ」「郊外の聖」の諸作があり、出版したものに「闇の花」「離るゝ心」「何處まで」「呪咀」等がある。大正九年花袋氏と共に誕生五十年を迎へたので多くの文士達から祝賀會を開かれ各雜誌新聞等に其業績を揭載された。兎に角島崎藤村、田山花袋正宗白鳥の諸氏と共に一流の作家として敬せられてゐる。餘技として俳句をもよくする。

山の邊に師亂るゝ雪解かな

舞の袖かへるや夜の風薰る

現住所　東京市本郷區森川町一、南堺裏二一〇

德田隣齋　トクダリンサイ（畫）

名は其太郎。明治十三年十一月京都市に生れ、初め前川文嶺に學び、後四條派の大家竹內栖鳳に就て研究し遂に京都繪畫專門學校の教師となつた。三十六年第十五回內國勸業博覽會に褒狀を得、文展には第一回に「夏山欲雨」第二回に「秋山薄暮」第四回に「入江の夕」第八回に「絕峯催雨」第九回に「稻荷山の新秋」を出して褒狀又は三等賞を得た。

現住所　京都市高倉二條上天守町一八

德富蘇峰　トクトミソホウ（評）

肥後の人、名は猪一郎。蘇峯又は七十二峯生とも號する。文久三年正月當時の碩學にして志士なる

横井小楠の高弟で之も名高い儒者淇水翁の子として生れた。熊本英學校京都同志社に學んで半途退學したが新島襄の感化を受けたことは多大であつた。一青年で論文「將來の日本」一篇を懷にして東上し文名頓にあがり雜誌「國民之友」を創刊し思想評論壇の一大權威となつた。「國民之友」を創刊した時、氏は齢僅かに二十五歳の青年であつた。この雜誌は民主的思想を鼓吹して思想界の新機運に魁し、又春夏二期には文學附錄を添へて當代作家の粹を集め純文學の振興に力を致した。更に「國民新聞」を創刊して熱烈なる平民主義を旗幟として藩閥政府と戰ひ、天下の同情を荷うて青年崇拜の中心となつたが、日清戰後平民主義を拋つて帝國主義に就き、二十九年松隈内閣の勅任參事官となつたので變節者の譏りを得た。その時文家として並びなき蒼勁の筆は政治、宗教、教育、文藝等行くとして可ならざるなしの評がある。操觚者としては誠によく無冠の宰相の稱にそむかない。「吉田松蔭」「國民叢書」「杜甫と彌耳敦」

「大正の青年と帝國の前途」等は何れも洛陽の紙價を高からしめた名著である。國民新聞に連載して後單行本として發行した近世日本國民史は氏が熱血を注いで公平無私の史實を叙述するといふので天下の注意を集めた。氏はこの大著によつて大正十二年我が國最高名譽の學士院賞並に金一千圓を贈與されて其の功績を賞せられた。氏が非常に多忙なる新聞經營の傍らかゝる名著を出すのみならず國民教育の爲に力を盡すことも亦多大である。著書は右の外甚だ多いが何れも多くの讀者をもつてゐる。國民新聞社長、同社主筆、貴族院議員。

五國城

洛蜀諸賢漫鬩爭、　金繒賄ゝ敵果何情、
宣和　御筆雲淵字、　遺憾千秋五國城、

落合東廓は之を評して精神瀟著にして感慨淋漓、その落想は實に耳目の外にあると言つた。

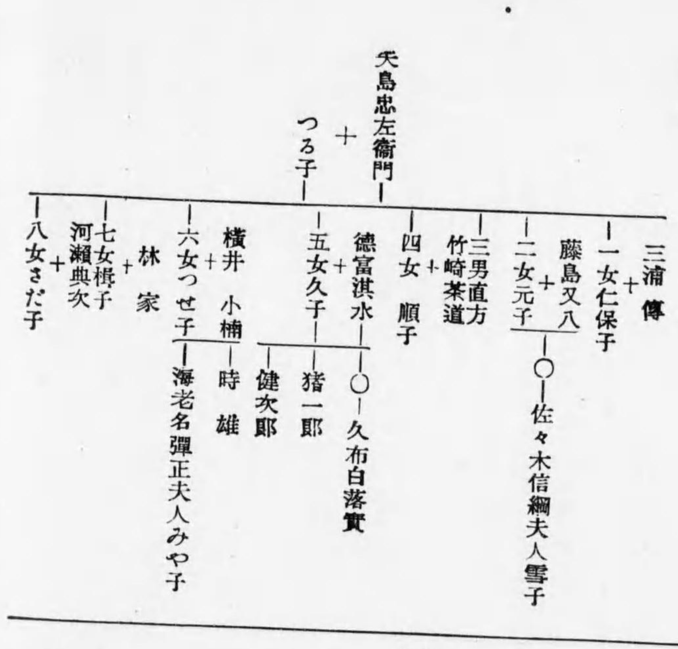
現住所　東京市赤坂區青山南町六丁目三〇

徳富蘆花　トクトミロカ（小）

本名は健次郎、蘇峰の弟、明治元年十月熊本に生れた。京都同志社に入つて學んだが半途退學して上京し、「國民之友」誌上に翻譯隨筆等を公にした。氏は最も自然描寫に長じ「青山白雲」「自然と人生」「青蘆集」等を書いた。「自然と人生は好個の散文詩集として最も廣く愛讀され、同じく民友社にあつて「武藏野」を公にした國木田獨歩と共に民友社の二詩人として謳はれた。後小說「不如歸（ホトトギス）」を國民新聞に連載し、明治三十三年之を一冊として出版するや、稱讃の聲雨の如く蘆花の名之より天下に普くなつた。「不如歸の內容は新舊思想の衝突より起る家庭の悲劇を書いたもので、一讀主人公悲劇の最高潮（クライマックス）に至るや、同情の涙潸然として禁ずることが出來ぬ。原作は既に三百版を重ね、東京高師教授鹽谷榮氏の英譯さへ既に數十版を重ね、活劇に演劇に至る處喝采を博してゐる。つゞいて「思出の記」「黑潮」等を出し文名ますゝ揚つた。氏は熱心なるトルストイアンで、三十九年聖地エルサレムを經て中央露西亞「ヤスナヤポリヤナ」に杜翁を訪ひ、こゝに寓すること十有三日、具さに肝膽を披瀝して歸つた。「順禮紀行」はこの時の紀行文である。後ト翁を學んで肉食を廢し菜食主義を標榜し、府下千歳村にト居して田園生活をなし、氣の向く時に筆を執つてゐる。「寄生木」「みゝずのたはごと」「黑い眼と茶色の眼」「死の蔭に」等何れも洛陽の紙價を高めたものだ。其の後の著「新春」なども發行一兩日の間に三版を重ね、しかも何れも東京の書籍店の手に這入つて地方の書店では容易に一冊も買へなかつたほどである。新著「日本から日本へ」は大正八年一月二十六日愛子夫人と共に露獨漫遊の途に上つた時の紀行文であり、最新著「竹崎順子」は叔母順子の一生を傳したものである。大正十三年七月雜誌「文化生活の基礎」は長論文「日米問題の解決について」といふ長篇の論文を發表したが、氏をこの論文を機として所謂氏が立て籠

つてゐる象牙塔を出ることは實に望ましいことである。

系統



現住所 東京府下北多摩郡千歳村粕谷三五六

故土佐光文 トサミツブミ（畫）

京都の人。土佐派別家光孚の男であるが、宗家光祿に嗣が無いので其の後を繼いだ。從五位下左將監に任ぜられた。明治初年、森寛齋等と後素如雲社を結んで後進を誘掖した。明治十二年十一月九日歿した。年六十八。

戸田玉秀 トダギヨクシユウ（畫）

名は次郎、明治六年八月九日横濱市蓬萊町に生れ夙に川端玉章に師事して圓山派を研究し、殊に花鳥、山水を能くし、爾來川端畫學校、女子大學、三輪田高等女學校等に教鞭を執り、傍ら日本美術協會其他諸種の畫會に出品して銀牌三回、銅牌十五回を受け其他第三回文部省美術展覽會に富士川の圖を出品して御用品となつた。御用品並に御前揮毫の榮を荷ふこと前後二十數回に及んだ。帝國繪畫協會、日本美術協會の會員で美術研精會の特

別會員、日本畫會の評議員、青年繪畫協會の評議員及審査員である。

現住所 東京市牛込區西五軒町五二

都鳥英喜 （附都鳥雪香）トトリエイキ（畫）

號は木雞。明治六年十一月千葉縣佐倉町に生れた。夙に淺井忠について洋畫を學び、後、關西美術院教授となり、又京都高等工藝學校講師に任じた。文展へは第一回に「故郷のたより」第二回に「差潮」第三回に「山村」第四回に「田の上山」「八瀬村」を出し、其他日英博、太平洋畫會、國民美術協會等に風景畫の出品がある。太平洋畫會會員。大正八年三月佛國に遊び十一年の頃歸朝した。夫人雪香女史、名は鈴子と言ひ、明治二年六月に生れ、十四歳の時既に野口小蘋の門に入つて專ら花鳥山水を習ひ、寫生を好み花卉を善くして好評がある。

現住所 京都市上京區椹木町丸太町下ル

戸張孤雁 トバリコガン（彫）

明治十五年二月東京に生れ、三十四年米國に遊び紐育アート・スクール、ナショナル・アカデミー、メカニツク・インスチチユート等にあつて洋畫、彫刻、洋風挿繪等を學び、三十九年歸朝した。文展へは第四回に彫刻「おなご」第七回に「力の弛んだ人」第八回に「犧牲者」第九回に「をんな」を出し、大正六年美術院同人となり、其第三回に「若き男の像」第四回に「曇」等を出した。水彩版畫等の作品もあるが彫刻家として多く知られてゐる。洋畫家で且彫刻家である。

現住所 東京市下谷區谷中七面阪下一一二一

登張竹風 トバリチクフウ（文）

名は信一郎、竹風はその號、登張善一郎の長男で明治六年十月二日廣島縣能美島に生れた。明治三十年七月東大獨逸文學科を卒業し、山口高等學校教授に任ぜられ、同三十二年東京高等師範の教授

に轉じたが、三十九年十月辭職した。大正三年九月第二高等學校教授になつて今日に至つた。硯友社風の傾向を以て一時盛に書き且つ論じたものだがこの頃は一向筆を執らない。天溪氏との論爭以後筆を收めて辭書の編輯に力を盡した。「ニイチェと二詩人」「氣焰錄」「舌筆錄」「あらひ髪」「國奴」「獨和大辭典」並鏡花との共譯「沈鐘」等がある。「あらひ髪」は楊牛も賞讃したほどのよいものであるから、も少し文壇に顏を出してゐたら不朽の大作が殘るであらうにと惜しんでゐる人もある。獨逸語の造詣深くニイチェ研究家としても有名である。大正十二年文部省の在外留學生として歐米に行つたが、氏の洋行のかく遲播となつたのは一時教職を退いて居つたがためである。斗酒尙ほ辭せぬ大酒豪であつて、日本の李白と曰はれてゐる。嘗つて東京高師在職の頃市川に旅行して一ダースのビールを飲んだといふほどである。氏は筆の人と同時に亦雄辯熱辯であつて、其の氣焰容易に當るべからずである。「氣焰錄」や「舌筆錄」の著ある所以である。

現住所 仙臺市片原町五八

故富岡永洗 トミオカエイセン（畫）

信州松代藩士。通稱秀太郎。明治十一年上京して學を修め參謀本部に出仕し、明治十五年頃から小林永濯の門に入り、遂に一家をなし、藻齋又永洗と號した。二十三四年頃から雜誌「風俗畫報」に執筆し、外に小說類の木版色摺口繪を作つて好評を博し、二十六年頃から新聞小說挿繪に自家の新生面を拓いたが、三十八年年四十二歲で病歿した。門下に桐谷洗鱗、井川洗崖等がある。

故富岡鐵齋 トミオカテツサイ（畫）

日本畫家。名は百鍊。字は無倦。鐵齋外史と號す。天保七年十二月京都に生れた。幼より國學漢學を修め後畫をまなび、南北諸派を兼ね、維新の際國事に奔走し、明治以後暫く西八條六孫神社の神官となり、後海內を漫遊して足跡及ばざるなしである。明治九年五月大和石上神宮、和泉大島神社等に奉仕し、彩管を執つたのは明治十五年以來のことである。爾後、居を洛中に構へ京都美術學校講師となり、讀書に耽り、學は王陽明を主とし、畫は餘技のみ。大正十三年十二月卅一日病歿した。

生前住所 京都市室町通中立賣上る

故富田鷗波 トミタオウハ（詩）

名は久稼、字は美鄕、天保七年越前福井に生れ、幼時より穎悟强記であつた。のち藩儒高野眞齋、化木澹齋に從つて詩を學び、二十三歲の時藩學明道館の句讀師と爲つた。旣にして藩命をもつて江戸に赴き大家に就いて經史及び詩文を學び傍ら藩邸學舍の生徒に敎授した。文久の頃父と共に京師に入り藩命をもつて時事を探つた。當時諸藩の志士京師に集つて酒色に耽り、流連するものが多かつたので

戀柳 今宵宿二島原一　弄花 昨夜醉二祇園一
寶刀不レ及二蛾眉斧一　斷二盡男兒 日本魂一

とやつたので、一時人々に膾炙した。歸藩の後明道館の敎授となり、福井藩文學大訓導、足羽縣權大屬の外敦賀縣、大藏省、司法省等に歷任し、十二年福井明新中學校長、十四年史誌編纂職に轉じて十八年より全く官海を去つて、詩酒風流自ら快適を事としてゐたが、四十年四月三十日歿した。年七十二。

富田溪仙 トミタケイセン（畫）

名は鎭五郎。都路華香に學び、文展へは第六回に「鵜船」第七回に「沈竈容膝」を出したが、大正三年日本美術院が再興したる其第一回に「鼎峠行人」第二回に「宇治川の卷」を出して同人となり第三回に「沖繩三題」第四回に「風神雷神」「淀」を出し、「山海經」の著がある。大正十二年大震火災後京都大阪に開催された日本美術展覽會に審査委員となつた。

寒沙四面平、　飛雪千里驚、　風斷遠山樹、
霧失交河城、

現住所 京都市外洛西嵯峨

富田碎花 トミタサイカ（詩）

名は戒治郎、明治二十三年十一月岩手縣盛岡市に生れ、日本大學植民科を出た。詩話會同人中有數の長詩作者として知られてゐる。歌集「悲しき愛」詩集「末日頌」「地の子」「富田碎花詩集」「時代の子」の外、カアペンターの「民主主義の彼方へ」ホイットマンの詩集「草の葉」の譯等がある。大正十三年石狩の原生林にテント生活をなして講習會に出講し、大に詩想を養ふところもあつた。

翳りゆく展望

淀ない展望、
何といふ大觀！
希望の綠に燃えた若い樹々の葉の間から、
快げに瞳をあてもなく放つ……
想のなかの風景。

都會なら都會でいい。

雲に突き入る高い尖塔を中心にして
翼のやうに四方に展がつた大小さまざまの建築物。
またそこを心臓にして
八方に蜘蛛の巣のやうに架け渡す街道、鐵路、電線、

そこに自ら一滴の油が落とされれば
池の水のうへの波紋は次第次第に擴がつて
やがては最も遠い僻陬の
うつかり者にまでも達いてゆく

何といふ大きなマンモスが
搾木にかけられてゐることぞ！
血みどろになつた巨獸の呻きの
やがては地軸にまでも聞こえやうものを、
そこに醸される騷擾、殺戮、懊惱、苦悶——
そんなものの一切は壓しつけられるだけ壓しつけるがいい、そして、反撥の力のどれだけ恐しいかを「權力」の陶醉者に知らせてやるがいいのだ。

現住所 兵庫縣武庫郡芦屋茶屋芦屋

富取芳河士 トミトリホウカシ（俳）

名は壽鹿、明治二十三年四月十六日新潟縣地藏堂町に生れ、十六歳の頃より句作を始め、十八歳の時俳諧雜誌「初雁」を發行したが、後發賣禁止の厄に遭ひ更に廢刊の止むなきに至つた。四十年前後鹿語と同居の頃は最も多作したもので、大正四年に「骨」といふ雜誌を發行したけれども家業繁忙のため同八年二月限り廢刊した。著書に「明治新題句集」「明治選者句集」（鼠骨と共編）

門二つ一つ朧ろに閉しけり
塔の上に光る時雨の鴉かな
柳散るや網場餌蒔は妻がしつ

現住所 新潟縣地藏堂町

富取風堂 トミトリフウドウ（畫）

名は次郎。明治二十五年十月東京日本橋紅葉河岸に生れ三十七八年頃松本楓湖の門に入り、大正四年今村紫紅、速見御舟、中村岳陵、牛田雞村、小茂田青樹、小山大月、黒田古鄕、岡田壺中等と赤躍會を起し、院展第二回に「河口の朝」第七回に「鷄」第八回に「北國の冬」第九回に「芍藥」第十回に「漁村早春」「山邑首夏」等を出した。現に日本美術院院友となつてゐるが、氏は小畫面をまとめることが特に巧みであると言はれてゐる。

現住所 靜岡縣沼津町濱通東方寺內

富本憲吉 トミモトケンキチ

圖案家。明治十九年奈良縣生駒郡安堵村に生れ、洋畫を岡田三郎肋に、建築を大澤三之助、岡田信一郎に、圖案をルイス・デーに學び、後東京美術學校に入つて圖案科を卒業した。又先年歐洲及印度に遊學して大に得る所があり、美術工藝の作品が多い。氏の陶器は氣品に於て立派であるから近時藝術愛好家に好評を得てゐる。

現住所 奈良縣生駒郡安堵村九一

富安風生　トミヤスフウセイ（俳）

本名は謙次、明治十八年四月十七日愛知縣八名郡金澤村に生れ、同縣立第四中學、第一高等學校を經て明治四十三年東京帝國大學獨法科を卒業し直ちに遞信省に入つたが、一度病氣退職して大正五年再び同省貯金局に勤めて今日に至つた。氏は大正七年より八年まで福岡貯金支局長として勤務中吉岡禪寺洞、高崎烏城の兩氏より俳句を教へられ引續き作句に熱中して大正十年頃より「ホトヽギス」「破魔弓」其の他の俳諧雜誌に寄稿をしてゐる。從つて其の經歷の日は尚淺いけれども、教養深き人のことゝて進歩著しく、今日では有數の俳人となつた。大正十二年渡歐のことが「ホトヽギス」誌に見えたから歸來一層見るべきものがあるであらう。

夜櫻や遠ざかり來てかへり見る
雪嶺をかへり見立てり渡舟中
法師蟬かたみになける二つかな

現住所　東京市外千駄ケ谷町原宿三〇三

故外山、山　トヤマチユザン（詩）

名は正一、靜岡藩士族忠兵衞拙翁の子、嘉永元年九月小石川柳町の邸に生れ、幼より聰敏で人を驚かした。初め專ら武藝を修めたが大に時勢に考へる所があつて、蕃書調所に入つて學術に心を潛め次いで贄を箕作麟祥の門に執つて英語を修めた。二年句讀教授となり、三年教授手傳並に出役に轉じ、遂に開成所教授方に進められた。時に年僅かに十六歳であつた。慶應元年拔擢されて中村敬宇箕作圭吾、市川盛三郎、林董、菊池大麓等と十四人英國に留學した。明治元年六月歸朝して靜岡學校教授となり英學部長を兼ねた。外務省辨務書記を經て外務權大錄となり、米國ミシガン大學に入つて哲學理學を研究し歸來大學教授を經て同總長となり、三十一年四月伊藤內閣に入つて文部大臣となつた。吾國哲學社會學等の進歩及び進化主義の普及に大に與つて力あつた。明治十四五年頃漢字廢止羅馬字採用の論を立て「漢字破」を著し、又矢田部尙今、井上哲次郎、上田萬年、中村秋香の諸氏と新體詩を詠出して古來の和歌に代らしめんとした。其の詠中「拔刀隊」「忘れがたみ」等は尤も人口に膾炙してゐる。三十三年八月病のために薨じた。

拔刀隊

我は官軍我敵は
天地容れざる朝敵ぞ。
敵の大將たるものは
古今無雙の英雄で、
之に從ふつはものは
共に慓悍決死の士。
鬼神に恥ぢぬ勇あるも、
天の許さぬ叛逆を
起しし者はむかしより、
榮えし例あらざるぞ。
敵の亡ぶるそれまでは、
進めや進め、諸共に、
玉ちる劍拔き連れて、
死ぬる覺悟で進むべし。

皇國の風と武士の
其の身を護るたましひの
維新このかた廢れたる
日本刀の今更に、
又世に出づる身の譽。
敵も身方も諸共に、
刃の下に死ぬべきぞ。
大和魂ある者の
死ぬべき時は今なるぞ。
人に後れて恥かくな。
敵の亡ぶるそれまでは、
進めや進め、諸共に、
玉ちる劍拔き連れて、
死ぬる覺悟で進むべし。

前を望めば劍なり、

右も左も皆つるぎ、
劍の山に登らんは
未來の事と聞きつるに、
此の世に於てまのあたり
我身のなせる罪業を
滅すためにあらずして、
賊を征伐するがため。
劍の山はなんのその、
敵の亡ぶるそれまでは
進めや進め、諸共に、
玉ちる劍拔きつれて、
死ぬる覺悟で進むべし。

（後略）

豐島與志雄　トヨシマヨシオ（小）

明治二十三年十一月二十七日福岡縣朝倉郡福田村小隈に生れ、大正四年東京帝國大學文科大學の佛文科を卒業して後、陸軍士官學校に奉職し、その餘暇を以て盛に創作や翻譯を試みた。「弱者」「冷却」「無能力者」「生あらば」「微笑」「理想の女」「蘇生」の著いつれも人間心理の隱微を捕へたもので靜謐な觀照敏盛の神經誠に得易からぬ天才肌である。白樺派の同人。「微笑」は傑作叢書の第二編で何れも氏一流の黑い光つた眼に映する鋭い心理描寫が表はれてゐるし、「蘇生」には短篇「蘇生」の外總て十一篇を收めてあるが、各篇皆とりぐに特色あるうちにも全體を通じて人生に就いての高雅なる觀察と深き同情とは著者の嚴肅な態度と相待つて作品に一種の位をつけてゐるとの評がある。翻譯にユーゴーの「レミゼラブル」ロマン・ローランの「ジャンクリストフ」の全譯があり、近く發表したものに小說「特殊部落の犯罪」「白血球」「幻の彼方」『人間繁榮」童話「彗星の話」等の作がある。現に東京帝國大學文科大學佛文科の講師を勤めてゐる。

現住所　東京本郷區千駄木町四九

故豐原國周　トヨハラクニチカ（畫）

一鶯齋、花蝶樓とも號し、役者の似顏繪を描いて巧であつた。大歌舞伎興行毎に新狂言を描いた外「團洲百種」「梅幸百種」等を殘してゐる。明治三十三年七月年八十八の高齡で病歿した。門下に楊洲周延がある。何れも鮮やかな似顏繪を殘してゐる。

豐道春海　トヨミチシユンカイ（書）

名は慶中、春海の外に龍溪谷門道人等の號がある。明治十一年九月栃木縣那須郡に生れた。本姓は、川上氏であるが二十三年出でゝ豐道氏を嗣いだ。同年八月上野東叡山故輪王寺門跡大僧正篠原守慶師を拜して得度し、天臺宗黌に學び三十三年淺草須賀町華德院の住職となつた。氏は幼時茨城縣妙行寺神奈川縣金藏寺等に於て宗餘乘を修め、十四歲の時故西川春洞翁の門に入り書道を研鑽した。大正博の際病を冒して三體千字文を出品して全國に於ける三受賞者の一人として最高賞銀牌を受與せられ、平和博の時は特に審査官を命ぜられた。常に書道を緣として以て布敎の途を圖り、專ら書禪一意を主唱し同志と共に明治書道會瑞雲書道會警視廳自警會日比谷支部辛酉書道會等の爲め努力して精神修養に資し、雜誌自警には每月其講話を寄稿し平素多數門生の養成に勉め、又天臺宗校に敎鞭を執つてゐる。大正十三年野村男其他と共に書道の帝展割込運動に盡すところがあつた。

現住所　東京市外大崎町桐谷字谷戸

故鳥居清貞　トリイキヨサダ（畫）

鳥居派畫家。五代目清滿の門下で、其子に四世清忠がある。明治三十四年二月歿した。年五十八。

鳥居清忠　トリイキヨタダ（畫）

鳥居流の日本畫家南陵と號す。明治八年東京に生れ、土佐派を川邊御楯に學び、家流を鳥居清貞に受けた。流祖鳥居清信より七世、代々芝居看板、番附の揮毫をしてゐる。

現住所　東京市日本橋區蠣殼町一丁目四

故鳥居清滿　トリイキヨミツ（畫）

名は清峯。鳥居派三代清滿の孫で、名人清長に學び、後、鳥居派五代を繼いで三世清滿と改めた。明治元年十一月二十一日八十二歳の高齡で病歿した。其の次子に清滿があり、初め清房と稱し、後鳥居派六代を繼いで明治二十五年八月歿した。年六十一。

鳥居雪田　トリイセツデン（詩）

名は簡、有名なる東京の詩人であつて隨鷗吟社補助擔當客員として詩壇の爲に盡すところが少く無い。其の詩は「大正詩文」「隨鷗集」「太陽」等に發表して來た。

訪二原田饒庵一用二陳其年韵一率賦

菲才豈擬度蘭成、　筆動江關晚博名、
一劍蹉跎憐二意氣一、　七年蕭瑟過二平生一、
詩壇時有二盛衰運一、　交道不レ滕翻覆情、
同聽錦城今夕雨、　依稀琴筑繞レ檐聲、

相逢忍復說二沈浮一、　曾作二乘レ風破浪游一、
別後交朋多落拓、　眼中滄海尚橫流、
鮫人珠淚盈盤耀、　蕃部弓衣繡句收、
十二年餘重二剪燭一、　鬢邊吹雪夜梅愁、

訪二米溪隱士一用二其近作韵一賦呈

十一年前滄海情、　回頭身世似二萍輕一、
普陀山寺遠鐘度、　鼓浪洞天明月生、
嗤我當時甘二落魄一、　欽君此處遁二浮名一、
醉來盤礴蒼崖頂、　洗耳松濤謖々聲、

落合東廓氏は雪田の詩を評して、「曲折周匝、鍛鍊益工、其用意于章法、極爲縝密」云々と以て其の作風態度を知ることが出來る。

ナの部

内藤濯　ナイトウアラウ（評）

明治十六年七月熊本市に生れた。東京帝國大學文科大學に入つて佛文科を卒業して後陸軍教授となつた。

新聞の投書家時代には夕波と號して拔群の評論をしたものだ。佛蘭西文學會委員の一人で嘗つて傳統主義文學について長篇の論文を發表したことがある。

評論集「生の更改と新藝術」「ロマンローランの思想と藝術」等の著がある。最近文部省より派遣されて歐米に留學し殊に佛蘭西に長く滯在してその國の文學藝術を研究した。

現住所　東京市本郷區菊坂町八六

内藤湖南　ナイトウコナン（漢）

名は虎次郎、秋田縣士族内藤調一の二男で慶應二年五月二十七日に生れた。明治十八年七月秋田縣師範學校を卒業し爾來川名庸謹内藤成緒米人スミス英人サンマース米人イーストレーキに就き英語を學んだ。後三河新聞、日本及日本人、大阪朝日新聞臺灣日報萬朝報等の編輯に從事した。同三十八年六月外務省の囑託により韓國及滿洲を視察して歸朝し四十年十月東京帝國大學文科大學講師となり四十二年九月京都帝國大學文科大學教授に任じ四十三年七月清國に差遣され四十三年十月文學博士の學位を授けられた。氏は海内第一の物識りと言はれて凡て漢學と名のつくもので通ぜぬものはなく「四庫全書」の化身では無いかと思はれる。助教授今西龍博士が朝鮮研究で學位論文を請求した時に今西氏の未だ知らない史料を湖南博士は擧げたので其の博覽と强記とには一般に驚いてあつた。大正十三年七月歐米に於ける支那學研究の狀態並に對支文化事業調査の爲、官命を帶びて令息乾法學士及支那學專攻の石濱文學士と共に渡歐した。

丁巳感懷次二西村子俊之韵一

七國猶二龍戰一、　念二灰燐閣名一、　難レ追二鼎掌故一、
聊伍二杜田生一、　守レ缺尋レ微誼、　起レ衰仍細評、
時艱荒外裏、　抽レ筆志二虞衡一、

現住所　京都市上京區吉田町字和泉殿

內藤鋠策　ナイトウシンサク（歌）

明治二十二年八月新潟縣長岡市に生れた。「抒情詩社」を經營して作歌に從事してゐる。歌集「旅愁」「邂逅」の著がある。以前に晨露と號した事がある。

氏の歌は形式の極めて自由な感じの柔かい新しい匂ひのするものであつて而も着想も技巧も頗る奇警である。どつしりした力に乏しいが一種の魅力があると言はれてゐる。

品物よりも正しく作られし女の性のたふとかりけり

汝の指尖のミシンの上に動くとき瓦斯の火の前に開くいちはつ

待ちわぶる秋の旅館のうすやみに石油のにほひうすらはかなし

枯草のうすらあかりに蜻蛉のとぶはさびしやひとつの蜻蛉

ひとすぢの川のみ黑く流れたる寂しき雪のふるさとを出づ

ひとつぶの眞珠の如くなつかしくさびしく汝をおもひ浮べぬ

氏は尙ほ國語整理會役員として歌道以外に於ける國語運動に從事してゐる。

現住所　東京市小石川區白山御殿町三三

內藤辰雄　ナイトウタツオ（小）

明治二十六年二月岡山縣淺口郡河內村大字西阿知に生れ、岡山縣立商業學校に這入つたが中途で退學した。のち上京して勞働生活の體驗を試みて作家となつた。その經路は宮地嘉六などによく似てゐる。氏は上京後所謂立ちん坊、仕事師手傳、土工、石工手傳、瓦屋職人手傳、水揚人夫、職工、新聞記者、新聞配達、車力、小說家といふ順で今日に至り、長篇小說「空に指して語る」の著の外短篇小說の作が多くある。尙近く書いたものに小說「或種」「わり堀で」「屋根裏の男」評論「傍流から」「無反省の辨」「感覺相違論」「むちやうがんの吠聲」「現文壇を批判す」感想「藤井眞澄に與ふ」隨筆「私のこと」等「新潮」「熱風」「文章倶樂部」「新興文學」「東京朝日」「二六」「報知」「東京朝日」等の新聞雜誌に寄稿し頻りに其多作を能示してゐる。「屋根裏の男」などを見てもわかるやうに題材を階級問題に取つて主人公に、勞働階級に居ながら、一日もはやくそこを拔け出でよう、〻刻もはやくこんな奴等と一緒にゐることを止めよう、自分は浮び上れる人間だぞと言つた氣持をもたせてゐる。そして其の描寫の手法に於てもブルジョアの臭味を脫するに腐心し努力してゐる。この態度は筆だけでは無く口の方でも同樣である。いつか文學世界社のプロ講演會をやつた時講演者は左傾右傾の精銳を網羅した。氏はその壇上に立つて菊池寬の兒分となつた由來を說明し「俺は原稿を書いて生活してゐる。だから今はもうプロレタリアで無く、ブルジョア生活者だ！不足のあるやつは、どしどしやつつけてくれ！」といふ調子であるから、文學青年達は大に喜ばせられた。

現住所　栃木縣芳賀郡茂木町字小井戸

內藤伸　ナイトウノブル（彫）

號は雨鄕。明治十五年十月島根縣吉田町に生れ、夙に彫刻を斯界の大家高村光雲翁に學び又、東京美術學校に入つて三十七年その彫刻科を卒業した。文展へは第二回に「安住と迷想」第四回に「湯あがり」第六回に「藤原時代の女兒」第七回に「牛刀」等を出して褒狀を得たが大正三年美術院に入りてその同人となり、第二回に「山上」「壺」第三回に「若葉の頃」第四回に「沼の乙女」「獅子」等を出した。大正七年美術院を脫退し十二年度大震火災後大阪每日新聞主催の日本美術展覽會の審査員となり、同年帝國美術院展覽會審査員候補者に擬せられ、十三年遂に委員になつた。

現住所　東京府下戸塚町字諏訪二三〇

內藤鳴雪　ナイトウメイセツ（俳）

名は素行、南塘又鳴雪と號し、累世舊松山藩士で

弘化四年四月十五日江戸三田一丁目同藩邸に生れ十一歳の時藩地伊豫國松山に歸住し、藩校明教館に入り漢學を修め、明治元年京都に遊學し、翌二年東京に移り再興の昌平學校に入つた。三年藩地に歸り松山權少參事となつたが、四年藩廢して再び東京に遊學し五年歸鄉した。時に學制の頒布あり乃ち石鐵縣の學區取締となり各小學校の設置に從事し、八年愛媛縣官となり學務課に勤務し、十三年文部省に轉任、二十四年文部省參事官であつた時腦病を以て官海を辭した。此頃より舊藩主久松伯爵家の囑托を受けて同鄉書生の常盤會寄宿舍を監督し、四十三年監督を辭した。又久しく久松伯爵家を代表して史談會員に列し、其幹事となつた。尚久松伯爵家家事諮問員たる事は明治二十二年に囑托せられてより今日に至つてゐる。幼年より讀書を好み長じては劍術其他の武藝を修め、後專ら漢學に從事し傍ら詩を作つたが明治維新後は官務に奔走せしため殆ど學事を廢した。然し暇あれば廣く書を讀み倫理道德と社會國家の問題乃至哲學宗教の方面に研究を試み、獨得の說をもつてゐる。俳句は四十六歳の時同鄉の正岡子規が元祿天明の復興を唱へし時に始めて指を染め、漢詩の嗜好を換へて今日に至つた。俳風は務めて穩なる調子を尙びその指導に當り自今從事する所の都下の新聞三雜誌二十四ある。著書は「鳴雪句集」、「鳴雪俳句鈔」「鳴雪俳話」「俳句作法」「俳句獨習」「俳句問答」「俳句の近道」「老梅居雜著」其他評釋物を併せて十餘種ある。嘗つて散步を好むところから徒步主義會の先達に推選せられしことがある。長男健行氏が獸醫士、三男和行氏は醫學士、長女順は愛媛縣師範學校長山路一遊の妻となり、次女靜は陸軍少將小崎正滿の妻となり、多くの外孫と外曾孫を有せる子福者である。氏の鳴雪と號したのは世事凡てナリユキ（鳴雪）に任すべしといふ意味から出來たのであるさうだが、かくいふ氏はなか〳〵の論客で記憶がよくて到底ナリユキに世事を任せられる性質の人とは思はれぬ。それは蕪村句集輪講當時の論議に見ても、大正八年より同十二年まで續いた俳談會の熱辯に徵してもよく古典古實を請誦してゐて若輩にグングンぶつついて行くところはなか〳〵の元氣である。氏が常に正宗の三オンヽ疊を懷にして時に之を嘗めつゝ得意の談論を高ぬるところは慥かに俳壇の一異彩である。

元日や一系の天子富士の山
若鮎のそれ程水ははやからず
流れ木のだぶり〳〵と春の川
春雨に杉苗そだつ小山かな
煤掃や我が梅の軒月の窓
朝寒や通夜から戻る二人づれ
書初や難波津のよし惡しくとも
とらまへて衣賣る店の柳かな
朝露や矢文を拾ふ草の中

現住所　東京市麻布區笄町一七五

故長井雲坪　ナガイウンペイ（畫）

名は元四郎、雲坪の外瑞岩、王蘭堂、蘭華山人、瓢々子等の號がある。天保四年二月二日越後國沼垂に生れ、十六の時長崎に出て鐵翁の門に入り、後木下逸雲に就く事二十年逸雲歿後慶應三年安田老山等と共に支那に遊び徐雨亭、王道子、陸應祥等と交遊し歸朝後長崎に留り、明治二年上京して麴町に居り、後諸國を遍歷し主に信州飛驒に留つた。殊に戸隱を愛し藏月仙窟を結んで五年間此地に過した。明治三十二年六月二十九日肝藏病のために年六十七で逝いた。戸隱在住の頃同門大倉雨村彼を訪ねて金一封を贈り出京飛躍を勸めたが佛然色を爲して應じなかつた。畫は山水を得意とし墨蘭又雅致がある。作品は信州左治木東雲、宮澤長治、東京菊池惺堂氏等に多く藏せられてゐる。又雲坪終焉の家屋は長野縣上水內郡三輪村字和合の大正果樹園內に移轉保存されてゐる。信州に於ては兒玉果亭と相並ぶ南宗畫の大家であつた。

故永井禾原　ナガイカゲン（詩）

名は久一郎、實業家で兼詩人である。尾張愛知郡

鳴尾村素封家に生れて幼より氣慨があつて區々たる一家の產を顧ぐを屑としない。家督を弟に讓つて飄然鄕里を去り名古屋に出て藩儒鷲津宣老の門に入つて漢學を修め、傍ら森春濤に就いて詩を學んだ。後洋學を修めようとして明治二年東京に遊び、英語を箕麟祥に學び、三年慶應義塾に轉じ、四年七月大學南校貢進生に擧げられ、四年藩命を受けて米國に留學し、歸朝の後工學寮二等少師となり、尋いて文部省九等出仕、東京圖書館長を歷て、內務書記官と爲つて、衞生の事を掌り、十七年倫敦萬國衞生博覽會に事務官として出張し、猶丁抹萬國衞生會議の委員となり、十九年帝國大學書記官に轉じ、又文部大臣秘書官と爲つて四大臣に歷事し芳川顯正の大臣たるときに教育勅語の起草に參した。二十四年文部省會計課長に進み參事官を兼ねた。後感ずる所あつて官を辭し、三十年日本郵船會社に入つて上海支店長となり、後橫濱支店長に轉じ、別に橫濱商業會議所特別會員となつ

た。氏の詩に於ける造詣は甚深く一々誦すべきもの少くない。上梓したものに「西遊詩、「雪炎百日吟稿、」「觀光私記」等がある。氏は吾に一卷の詩があるから我が生涯を傳へることが出來ようと云つた大正二年一月二十九日病んで卒した。年六十三。卒するに先きたち正四位に叙せられ、雜司ケ谷墓域に葬つた。弟の坂本彭風も詩人であり子の荷風も亦最も有名な文章家である。

墨水酒樓分韵

奈二此新寒悽惻一何、　微燈紅落小簾波、
柳邊暮色隔二哀笛一　鏡裡秋痕留二影娥一
一別人歸桃葉渡、　相思夢惹雪兒歌、〃
可レ堪重把二青衫一檢、　淚暈多二於酒暈多一

放舟

放レ舟新暑日、稱賞晚晴天、　驚鳥掠レ人去、
衆山當面妍、溪流深幾尺、　樹影暗如レ煙、
無數香魚上、肥二於昨雨前一、

永井荷風　ナガイカフウ（小）

名は壯吉明治十二年十二月東京小石川に生れた。幼より文藝を好み二十歲の時外國語學校支那語科に入つたが半途退學して諸種の藝術を學んだ。講談師三遊亭夢樂松林伯知等の弟子となり、尺八は名人荒木古童の門に入つて免許を得た。後廣津柳浪の門に入り「地獄の花」「夢の女」等を公にして名を成した。これらの作は佛國ゾラの自然主義の影響から生れたもので氏は小杉天外氏と共に日本文壇に自然主義を輸入した最初の一人である。のち正金銀行員として米國に行き佛蘭西に遊び、歸朝後「あめりか物語」「ふらんす物語」等をあらはしその淸新な情緖と芳烈な藝術味は傳統にのみ安んじてゐた舊式の文壇を駭かした。續いて「冷笑」「牡丹の客」「すみだ川」「新橋夜話」「日和下駄」「紅茶の後」「秋のわかれ」「永井荷風全集」等の作がある。三田文學を主宰して唯美派享樂派の宗と崇められた。三田文學を辭してよりは文明を創刊して文壇の一隅に高踏しつゝ江戸趣味の生活を實行してゐる。

相馬御風氏は「荷風は追懷的情調の作をなす云々」と言つてゐる。

父は有名な詩人永井禾原である。「花月」誌上に連載した「久しぶり」（これは有名な「おかめ笹」の續篇）を見ると氏獨得の皮肉や諷刺は決して作者自身が作中の人物に代つて黑幕の臭から口の利くのではない。一編の纏りが作中の諸人物のドラマチツク、アクションが自然に皮肉になつてゐるのである。そして描かれたる事は頗明晰である。技巧老熟全く他の追隨を許さない傑作である。一年に一篇、それも氣が向かなければ筆を手にすることなく、常に古書を繙き浮世繪を鑑賞して「我已に初老に近し今更に何をかせんや」などと嘯いてゐるが改造所載の「花火」の如きは世間作家には到底眞似も出來ぬ「味」を持つてゐる。「寢顏の如きも靜かなまとまりのある作でかみしめればかみしめる程うまみの出てくる藝術品で天衣無縫とも言ふべき技巧の方面から見ても一字一句のぬきさしのならぬ渾然としたものである。

寫實主義が極端に進んで理想に一致したといふやうな作品である。

（略系）

- 永井匡威
  - 永井禾原　文部省書記官、横濱郵船會社長、詩人、森春濤門人
    - 荷風　小説家
  - 永井松右工門　鳴尾農郡會議員
    - 松三　外務省電信課長
  - 阪本蘋園　詩人、日本赤十字社副社長、貴族院議員
  - 大島久滿次　元臺灣民政長官、元横濱市長

現住所　東京市麻布區市兵衛町一ノ六

長井金風　ナガイキンプウ（詩）

名は洈、秋田藩出身の儒者詩人であつて、大正の初年秋田藩志編修に總裁として盡すところあつた。東京小石川に帷を下し、又朝鮮に行いて居る中一時神經衰弱の結果精神に異狀を呈したと傳へられてあつた。詩に巧みであるばかりで無く、多方面に研究の深い人である。大正四年金風會を設けて講筵を張つた。

南山行

鷲鳥黑色巢二南山一、　猛貪其性就以擊、
南山虐曠食應レ歉、　初余疑レ之理難レ覈、
凱旋將軍馬死レ壓、　棄時恩已非二伏櫪一、
奴卒侯服慳二敝帷一、　豺狼狐狸利震歷、
誰復驅除辨二梟鸞一、　南山以南盡飽喫、
官忽遐境埋藏多、　腐屍膏羶同二鼎鬲一、
最小黃雀羅、　南山從レ古千仞壁、

奉レ別二閑院親王一恭賦、

石瀨淺淺雨如レ煙、　雲旗此日飛翩翩、
躋桂文章世皆仰、　屏京維服於赫然、
陪厠烏得德晉忘、　要眇歸來美宜宣、
善馬昔聞毛人國、　下女今逢杜若眞、
夢中仙闕不レ知レ路、　余佩欲遺方雅步、

現住所　東京市小石川區關口臺町二六

故中井敬所　ナカイケイショ（篆）

名は兼之、字は資同、幼字は資三郎、江戸の人森江兼行の第三子、天保二年に生れ幕府の御飾師棟梁中井由路の嗣となり、王政維新の時准藩士となつて靜岡に徙つた。のち東京下谷茅町の舊廬に歸り菡萏居と號した。廬は不忍池に面し、夏秋の交芙蓉香を送る。菡萏の號はこれよりとつたものである。氏幼とり篆刻を好み、外戚濱村藏六に從つて刀法を學び、更に益田遇所に從つて刻苦精勵のため、年齡未だ二十歳ならぬに聲名都下に鳴つた。尙この間經學を朝川善庵に詩を大沼枕山に學び、又佐藤一齋、小島成齋の門に入つて研學怠らず、次いで明の蘇嘯民の篆法を慕ひ、其の篆法を見るため曝書の補手となつたこともある。又蘇氏の漢印より出てゐることを悟り更に漢印の研究に入り、又一轉して明淸大家の筆意篆法を習得して一機軸を出した。嘗て幕府の命によつて國璽を刻し、又內旨を奉じて晶玉の御璽三顆を刻し每に賞賜を蒙り名聲四方に馳せ、印を索めるもの門に滿ちた。曾て瀨古堂印人傳の謄本を校讐して印行し

清朝印人傳を編し、二十三年內國勸業博覽會審査官となり、二十五年米國博覽會開催の時帝國博物館の命を受けて水晶印三顆を刻して之を出した。又金石畫書の鑒識に精しいので臨時全國寶物取調局の鑑査掛に補せられて地方を巡回審査した。三十九年帝室技藝員に補せられ、四十年東京勸業博覽會審査官を拜し、四十一年東宮の內旨を奉じて水晶印三顆を刻したが翌年九月三十日病の爲逝いた。年七十九。著書に「日本古印大成」「皇朝印典」「日本印人傳」「印譜考略續集」等ある。氏の印譜は門人の集つて作るところであつて菊苔居印粹と言つて世に行はれてゐる。

永井潛 ナガイヒソム （文）

備後國の名家永井敬介の二男、明治九年十一月十四日生れた。三十五年十二月東京帝國大學醫科大學を卒業して同大學助手となり三十六年二月生理學研究のため獨佛米に留學を命ぜられ三十九年歸朝して東大醫科の助教授に任ぜられ四十四年二月醫學博士の學位を受けた。大正四年一月同教授に進み現に其の職に在る。氏の父敬介和歌をよくするが氏も其感化によつて詩的趣味を解するばかりでなく藝術宗教哲學等に對する研究も積み見識も高いので氏の著書は何れも藝術味哲學味があつて謹嚴で整然たる論理の中にも豐かな藝術味ある表現をなしてゐる。生命論や生理遺傳の諸論文は博士の說の一を窺ふのに足ることが出來る。史料編輯官文學博士和田英松氏は從弟である。

現住所 東京市本鄕區駒込動坂町一〇四

永井柳太郎 ナガイリユウタロウ （文）

石川縣士族永井登の長男で明治十四年四月十六日生れた。夙に東京專門學校を卒業し歐米に留學すること數年、歸朝後早稻田大學教授に任ぜられて殖民政策を講じた。大正六年之を辭して日本國產株式會社取締役を兼ねてゐる。憲政黨より推されて衆議院議員となつたが政友會內閣に對する氏の彈劾的外交演說は實に堂々たるものであつて議政壇上に於ける處女演說としては成功したものである。嘗て樋口龍峽氏と共に大隈侯の傘下に新日本を主宰して筆戰を試みたこともあるが兎に角氏の如きは筆に口に未來有望の青年政治家である。

現住所 東京府豐多摩郡戸塚町下戸塚一五〇

中內蝶二 ナカウチチヨウジ （文）

高知縣の人、帝國大學國文科を出て、大町桂月、鹽井雨江諸氏に續いて文壇に活動し、いろ〳〵の作品を發表したが中心勢力とはならぬ。氏の「おとめ十種」と大町桂月の「山水五則」と題せる小品を集めたる「少女と山水」はよく讀まれたものである。萬朝報記者として文藝欄に在つて劇評を最も得意とする。

現住所 東京市牛込區藥王寺二〇

長尾雨山 ナガオウザン （詩）

名は甲、讃岐の人、もと文部省の編輯に從事し、後故あつて官を退き、上海に渡り、今は京都に住んでゐる。近來は僅かに「斯文」に發表する位のもので、隨鷗吟社や雅文會等にも關係がないやうであるのは惜しいことである。畫も巧なれども書に至つては全く和臭を脫して其堂に入り關西第一を以て稱せられてゐる。

大正乙卯七月初三日開二同窓會一於東臺
華壇一敬祝二名取學兄七十一

聯レ牀夜啓一鏗心、　感舊 那勝老 更 深、
閱レ世積レ愁成二白髮一、　對 尊故 態抵二青衿一、
文 章小 技早先 擲、　道德 微言 晚尙 尋、
同 學君 尤稱二長者一、　傳 經劉 向重二儒林一、

現住所 京都市西洞院丸太町上

永尾宗芹 ナガオソウキン （俳）

名は北三郎、明治二十一年八月十六日大阪市東區大川町に生れ、大阪商業學校を出て商事會社に勤め、大阪商工新報主筆、關西日報記者、探勝新聞記者等になり尼崎市立通俗圖書館の計畫事務に努力した。氏は三十二年日本派俳句に興趣を感じて

青木月斗、島道素石、山中北渚、荒木荒井蛙、水落露石、松村鬼史、梅澤墨水等の諸家と往復して句作に熱中した。四十年俳句雜誌「轉り」を發行したることもあるが、今は「カラタチ」の編輯に從事してゐる。氏は初の號を秀峰と言ひ、次に芋法師白花蛇等と改め遂に今の宗芹とした。餘技として俳畫を描いてゐる。

現住所　兵庫縣尼崎市大物町

長尾　豐　ナガオユタカ（畫）

明治二十二年東京淺草に生れ中學半途退學の後雜誌記者となり蓄音器及活動寫眞等に關係し目下童話劇及童話等の作に從つて、譚海、金の船、少女號、課外學習等は氏の寄稿雜誌である。又沼波瓊音に俳諧を學んで雜誌「俳諧」の編輯に從ひ又小山内薫に師事して劇を學んで舊有樂座子供日の脚本を書いた外こゝ數年間諸方の學生劇等を作つてゐる。沼波瓊音氏と共著「評註俳句選」「要二郎小咄集」「茶目草紙」等を出してゐる。素枝、マコモ生、要二郎、張慶亭等は何れも氏の別號である。

現住所　東京市外中野一六七五

中川紀元　ナカガワキゲン（畫）

舊姓は有賀といひ、信濃國諏訪の人である。第二回二科會に「清水先生の顏」「自畫像」第三回に「青五氏の肖像」第四回に「煙草を吸ふ女」を出し、大正八年巴里に留學した。洋畫壇の新人として知られてゐる。

現住所　巴里

故中川四明　ナカガワシメイ（俳）

名は重麗一に霞城と號した。京都の人であつて、獨逸語を善くしたので學校の教師となつたが、俳句に興味を感じ遂に日本派の大家正岡子規居士に就いて研究し宗匠となつた。四明の外に小自在庵霞城、草川居等の號がある。大正六年五月十六日六十八歳で歿した。墓は京都綾小路大宮西の光林寺にある。氏の句として有名なものを擧げれば

春風や祇園清水孔雀茶屋
皮むけば煮れば少く庵の蕗
祇園會の稚兒並び行く朱傘かな
人中の鮟鱇と我を罵りつ
大矢數ゆがけのまゝに粥の杓
蚊遣火や甘茶花咲く藪の蔭
行く年の髭いたづらに長き哉
節分や籌に明かき神樂岡

故中川八郎　ナカガワハチロウ（畫）

明治十年十二月愛媛縣喜多郡に生れ、松原三五郎及び小山正太郎の不同舍に入つて學び三十二年及び三十六年の兩度に亙つて前後五年間歐米に遊學した。四十年東京勸業博覽會に出品して二等賞を得、文展へは第一回に「夏の光」第二回に「北國の冬」第三回に「瀨戸内海」を出して何れも三等賞を得第四回に「巖壁」を出して遂に二等賞を受け、第五回以後洋畫部審査員に擧げられた。第五回に「高原の花」「造船場」「ポプラ」第六回に「夏の朝」「磯打つ浪」第七回に「夕立前」「夕風」「穩かな朝」第八回に「最上川」「杏花の村」「日本アルプス」第九回に「高山の夏三題」第十回に「上高地の夏」「青島の夕」「春」第十一回に「大同江畔」「阿波の鳴門」等を出し出品毎に注目された。專門は風景であり、太平洋畫會理事であつたが病卒した。

仲木貞一　ナカギテイイチ（劇）

明治十九年二月一日石川縣金澤市愛宕町に生れ、早稲田大學英文科を卒業し、新聞雜誌記者、鐵道現業員、學校教師等を經て座付作者及舞臺監督等を爲してゐる。戯曲「世の終り」「曙」「櫻散る頃」小說「戀の地獄」「光明の扉」「弱き者」等の著作がある。近くは「小劇場運動の理論と實際」について早稲田演劇研究會に於て講演をした。

現住所　東京府下下目黒二九一

中桐確太郎　ナカギリカクタロウ（文）

氏は早稲田大學教授、哲學者、倫理學者として名高く、かつその崇高な人格は多くの青年を渇仰せしめてゐる。それは中桐教授がゐるので早稲田に行かうとかいふ話を屢々耳にするのをもつてもわかる。氏は一燈園の創立當初よりその精神的外護者として、かのパスカルがポールロワイヤール尼僧院に於けるが如き位置にある人である。氏の生活はあくまで一燈園流の質素恬淡なものであつて、口には園の宣傳をなしつゝ實際は奉自生活をやつてゐるといふのとは大變違ふ。一燈園の宣光社の經營、ことにその發行にかゝる雜誌「お光」といふのは、氏の力に待つことが大である。「お光」の中にあるあの有名な行持暫定の如きは全く氏の深い體驗の生んだ産物である。西田天香氏の「懺悔の生活」が初めて世に出た時、その實行と相比例して天下の毀譽喧しく、一燈園の前途に暗い蔭を投げること屢であつた。氏は光と道とはこの種の暗翳で滅盡すべきものでは無いといふ處から「光明祈願にそへて」の一書を近く公にして群疑を排し惑念を正した。蓋し一燈園生活の理論的説明であり「懺悔の生活」の姉妹的名著である。本間久雄氏が婦人雜誌や翻譯其他によつてエレン・ケイの戀愛説結婚論を紹介し、世間またこの種の新思想に共鳴し或は拒抗して論議の盛んなる間に厨川白村氏は氏獨得の見地より「近代の戀愛觀」の一書を出して戀愛問題は益々盛になり且つ眞面目に研究されるやうになつた。中桐氏は幾多名士の戀愛論が出で世間の人が戀愛問題結婚問題について迷つてゐる時に當り、「予の戀愛觀」の一書を著した。氏は「方今大に亂れつゝある戀愛に關する思想の整理に資することが出來よう」と言つてゐるのを見ても、氏の抱負と自信とは想像が出來よう。

現住所　東京市牛込區原町三ノ五三

永坂石埭　ナガサカセキタイ（書）

弘化二年九月尾張國名古屋に生れた。家世々醫を業として東京に開業した。名は周字は周二石埭は其號である。嘗て大學醫學部教授をした。漢詩に長じて隨鷗吟社客員であつた。又書も一家をなして石埭流ともいふべき一種雅致ある體を以て評判が高かつた。家は神田御玉ケ池に在るので其居を稱して玉池仙館と言つた。晩年東京を去つて名古屋に歸臥してよりは醫業は全く罷めて文墨の間に悠々餘生を送る筈。翁が四十餘年間住み馴れた神田の住宅には支那趣味を凝らして造つた祭詩龕、星舫、寄傲室の三書齋があるが全部日本橋區瀬戸物町鰹節問屋イの親戚高津六平氏が讓り受けて永久に保存することゝなつた。又名古屋市西區長者町三ノ一二にある今の住宅は伊藤松坂屋所有の家屋だがこゝには殘月の間といふ豐公の桃山の茶室に模した茶屋がある。

浮島秋月

樓臺渾似半空浮、　一帶涼烟籠暮洲、
何處霓裳奏將畢、　月明如夢遇中秋、

新年雪

天邊淑氣白玲瓏、　遠岳新迎仙藻雄、
三十六宮春忽曙、　日華浮動雪華中、

槐南博士はこの詩莊嚴偉麗よく沈宋應制の律詩を壓倒すとまで激賞してゐる。

己酉九月念六、弔竹會日、過二種竹山人谷中故居一、用二虞道園子昂墨竹韻一、賦レ此以志二悽愴一

竹丈作レ詩奪二鬼工一、　長吟一夜雨挾レ風、
字々粘壁枯欲レ死、　飛去不作升高蟲、
墓門篔簹堅二於鐵一、　秋鵑叫煙老竿裂、
孤碣冷賸雙淚痕、　土花蝕碧斑似レ血、
東臺弔レ竹不レ見レ竹、　但酹崖泉一掬玉、
天寒日暮空谷中、　牽蘿無人補二故屋一、
賦得御題寒月照二梅花一
肅々霜威徹、　梅開曉幕風、　角聲月俱凍、

現住所　名古屋市西區長者町三ノ一二

中澤靜雄　ナカザワシズオ（小）

名は靜三郎と言つて、明治十九年十一月群馬縣群馬郡倉賀野町に生れ、小僧、職工、新聞配達、小學校教師、記者等の經驗があり、其間に東京神田三崎町にあつた國語傳習所や國學院に學んだことがある。創作集「一日の糧」「二人の厄介者」「沒落」「幻影」「退院」「夜逃げた男」評論「階級文學と宗教文學」「新秋文壇」「二つの作品について」等の外十數篇ある。

現住所　東京市外高田町雜司ヶ谷四九八

中澤弘光　ナカザワヒロミツ（畫）

明治七年八月東京芝區源助町に生れ、大野幸彦、堀江正章、黑田清輝等に就いて洋畫を學び、三十二年東京美術學校洋畫選科を出た。四十年東京博覽會に出品して一等賞を得、文展には第一回に「夏」第二回に「雄鹿半島の一角」を出して何れも三等賞を得、第三回に「おもひで」を出して二等賞を得た。第四回より第七回まで西洋畫部審査員に擧げられ、第四回に「溫泉」第五回に「奈良の晩春」「暖爐の前」第六回に「岸の丘」「乳の祈願」「鼓」第七回に「水に近く」「海苔とる娘」第八回に「女瀧」「灯」「なかれ」第九回に「三つの思ひ」「ゆく春」「夏の人」第十回に「春日の神子」「青き光」第十一回に朝鮮の歌伎」「歸途」を出した。又大正元年、山本森之助、三宅克己等と光風會を起し、毎回出陳してその天才を示してゐる。大正八年帝展審査員となり今日に至つた。氏は畫の外文章をもよくし、時に旅行を企てゝ其の紀行を公にすることもある。大正十二年日本美術展覽會に舞伎を出して好評を博した。田山花袋との合著に「日本溫泉遊記」其他がある。

現住所　東京府下戸塚町諏訪一八

故中澤臨川　ナカザワリンセン（評）

明治十一年信濃に生れ東京帝國大學に入つて工科を卒業した。曾て詩を以て知られ「鬢華集」の著をなしたが大正元年頃より評論家として文壇の一方に雄視するに至つた。「舊き文明より新しき文明へ」「破壞と建設」「臨川論集」の外「トルストイ」「ベルグソン」「近代思想十六講」等の著がある。トルストイ、ニイチエ、ベルグソン、タゴール等の紹介に當つて最も力を盡した人である。思想の紹介者として傑出せる技倆を有してゐる。論は獨創が乏しいといふ譏りがあるが文章明快で力あり、新思想界に第一の炬火を揚ぐる人として頗る文壇に重きをなした人である。曾て東京電氣會社の技師長であつたが後大阪の電氣化學工業會社に勤め信州松本の工場内にゐた。大正八年四月「ナポレオンの人格と運命」といふ大論文を掲げたがこれ丈奈翁の人格を浮出したのは流石に氏の卒かなく要領を摑み得る聰明な歸納的能力の働きである。又氏の内面的生活が豐富に持つ熱烈な英雄崇拜的傾向も手傳つてゐるのであらう。のち四十五萬圓の資本を有する中澤電氣工業株式會社專務取締となり大正八年十一月大正日日新聞の學藝部長となつたが大正九年病歿した。

中島清　ナカジマキヨシ（小）

明治十六年十月佐賀縣佐賀郡神野村字多布施に生れ、陸軍幼年學校及獨逸語專修學校等に學び、學校教師、會社員等を勤めたこともある。小說「檻樓」「師弟」劇「三國行」翻譯「サーニン」「キルヘルム、マイステル」「ユーテイツト」「セキリオフ」其他の著作がある。

現住所　東京市外目白旭出五一

中島孤島　ナカジマコトウ（譯）

本名は茂一、明治十四年四月東京に生れたが、家は長野縣北佐久郡三井村である。明治三十二年早稲田大學文學部卒業の上同大學出版部編輯員となり、讀賣新聞文藝附錄評論を擔任し、大日本百科辭典の編纂に與つてその英文學を擔任した。「早稲田文學」「新小說」其他に寄稿し、「新民族勃興史」「暗黑時代史」「封建列國史」「民の日本

史」中「鎌倉時代前篇」「グリムお伽噺」「續グリムお伽噺」「新譯西遊記」「生の悅び」「正史上のロマンス」「ギリシヤ神話」「希臘英雄譚」「クリスマスカロル」「變な家鴨」（アンデルゼン童話）等の著譯を公にしてゐる。

現住所　東京市小石川區高田老松町二八

故中島湘煙　ナカジマショウエン（歌）

名は俊子男爵中島信行夫人。萬延元年十二月生れた。本姓は岸田氏、父は元但馬豐岡の人で女史は其の長女である。夙に普通學を修め幼より書を善くし年十二三の頃既に貴紳權門の招待を受けた。十八九歳の頃宮中に奉仕して文事御用を務め、爾來四方を漫遊し全國各地に自由民權男女同權を唱導した。時に明治十五六年の頃であつた。當時自由黨副總理中島信行氏其の才氣を愛し容れて夫人とした。嫁後淑德の譽高く內助の力尠くない。曾て横濱に某女學校監督たる際英人に就いて英學を修めたが、男爵伊太利公使として駐劄中專ら語學を研究した。又家事經濟は其長所であつて蓄材家を以て稱せられた。文筆に長じて其作評は最も好む所である。曩時屢々「自由の燈」に寄稿し後に「太陽」「女學雜誌」に投書した。樋口一葉及代議士島田三郎文學博士三宅雄次郎醫學博士入澤達吉等の諸夫人の外舊公卿の令嬢中に從學する者甚多かつた。「湘煙女史」は女史の詳傳である。

假そめの人の力に出づる火を石にのみとも思ひけるかな。

いつの間に積りし今朝の雪ならん曉までは月も見えしを

和田のはらゆきかふ船にたち昇る煙もしげくなれる御代哉

即事

鍾愛屬レ花々豈知、　封娘教我儘多思、
海棠不レ省ニ朝來雨、　應ニ恨前宵折取時一、

生前の住所　神奈川縣久良岐郡戸太町字太田

中島兎子　ナカジマトシ（俳）

名は理三郎、明治十四年四月尾張國に生れ、明治大學商科を卒業した。三十四年頃前橋中學校內の句會及鄕里の句會に於て句作をなし、三十七年より松根東洋城師の門に入り、明治大學時代は其の句會に於て內藤鳴雪翁の指導を受けた。氏は「國民新聞」「ホトヽギス」「アラレ」等に嘗て投稿したが今は松根東洋城氏の「澁柿」にのみ投句してゐる。「新春夏秋冬」に氏の句は掲載されてゐる。

初冬や硝子戸はめて山遠し
松の蔭砂につめたき小春かな
春の夜を忘れて出さぬ手紙かな

現住所　東京市日本橋區濱町三ノ四

永島直昭　ナガシマナオアキ（翻）

明治二十七年二月二十六日東京四谷區愛住町三五に生れ、一時早稻田大學に入つて學んだが事情あつて退學した。大正七年武者小路實篤氏の「新しき村」を日向國に創立するや、氏は直ちにこれに投じてその機關雜誌「新しき村」を一年間ばかり編輯したことがある。翻譯「老ゴリオ」「夢幻劇」等の著がある。

現住所　神奈川縣茅ヶ崎渡邊別邸內

故中島來章　ナカシマライショウ（畫）

大津の人で京都に住した。字は子慶、鴨江と號し初め渡邊南岳に學び、後圓山應擧の子應瑞の門に學び、安政年間皇居御改築の際、御襖に和歌の浦の圖を畫いた。明治初年京都畫壇に重きをなしたが、四年七月年六十四で逝いた。門下に明治畫壇の大家川端玉章があり、又四條派の大家幸野楳嶺も又一時その門に入つたことがある。

仲小路彰　ナカショウジアキラ（小）

故樞密顧問官仲小路廉氏の息で、聖雄マホメツトを描いた長編戲曲「砂漠の光」は一千枚の長いものであつて、マホメツトの偉大なる神秘性と現實味とを具有するものである。

現住所　東京市麻布區廣尾町二

永代靜雄　ナガシロシズオ（翻）

明治十九年二月兵庫縣美囊郡北谷村に生れ、神戸關西學院、京都同志社、早稻田大學等に學んだが何れも中途で退學した。ルネ・バサンの「都會病」の翻譯、「女皇クレオパトラ」「カイゼル代表演說集」其他の著作がある。又「毎夕新聞」の記者をしたことがある。

現住所　東京市小石川區原町九一

長瀨春風　ナガセシユンプウ（小）

名は金平、明治十八年山形縣東置賜郡糖目村に生れ、早稻田大學に入つて英文科を卒業した。小說「森の中」「最後の日まで」「名金」「二人探偵」「日出づる國」等の著がある。嘗て「冒險世界」の編輯主任をした。

現住所　東京市小石川區音羽町二ノ一六

長瀨守男　ナガセモリオ（小）

明治三十二年十月十二日新潟縣中蒲原郡槿越村大字小松に生れ、新潟中學校を卒業して暫く教鞭を執り、大正十年上京して少年少女雜誌「飛行少年」「少女の國」を編輯して今日に至つた。小說「貧」「諾否」「ある殺人」評論「德田秋聲論」「田山花袋論」の作に童話「切支丹の娘」の著がある。

現住所　東京市本鄕區追分町三一山本方

永瀨義郎　ナガセヨシロウ（小）

明治二十四年一月五日茨城縣西茨城郡北那珂村に生れ、中學校卒業後取立てゝ云ふべき學歷は無いが多くの小說戲曲及び美術評論等を發表しつゝ「詩と版畫」の編輯に從事してゐる。

現住所　東京市外大森新井宿一一〇六

仲田勝之助　ナカダカツノスケ（評）

明治十九年東京市日本橋區平松町に生れ、早稻田大學文科出身。もと讀賣新聞文藝部記者であつたが東京朝日新聞の調査部員になり傍翻譯著作をしてゐる。ツルゲネフの散文詩集「ゼニリア」の譯並に小著「露西亞の革命と文學」等を公にした。

震災前住所　東京深川區西大工町一九

永田青嵐　ナガタセイラン（俳）

名は秀次郎、兵庫縣士族永田實太郎の長男、明治九年七月二十三日生れた。三十二年判檢事登用試驗に及第して司法官試補を命ぜられ同月之を辭して辯護士となつた。三十五年十一月兵庫縣洲本中學校長に任ぜられ同三十七年九月大分縣視學官に轉じ爾來大分石川熊本岩手等各縣事務官を經て四十五年內務書記官に轉じ大正元年十二月福岡縣事務官に任じ同二年六月同縣內務部長に尋いで內務省警保局長に榮轉したが後藤新平子東京市長になるや高級助役にあげられ、大正十二年六月後藤市長がヨツフェ氏と日露協商の事を議するに當つて辭職したので其後をついで市長の要職に就いてあつたが大正十三の暮故あつて辭職した。

葉櫻の枯枝太し山烏
川中の巖の額や葉虎杖
短夜や人追うて山の茶屋
草山に雲散りて歸心動きけり

現住所　東京市小石川區雜司ケ谷八三

中田敬義　ナカダケイギ（詩）

安政五年六月二十二日金澤に生れた。明治四年金澤藩費生として支那語學修業のため東京に派遣せられ九年外務三等書記見習となり北京公使館に在勤して琉球事件に鞅掌し翌年穴戸公使に從ひ歸朝した。十五年朝鮮へ派遣せられた。翌年八月命を奉じて再び朝鮮へ出張し尋いて外務卿秘書官に任ぜられた。十七年書記生に任じ在英國公使館に勤務した。十九年交際官試補となり尋いて公使官書記官に任じ二十三年歸朝し更に外務書記官に任ぜられ、二十四年外務大臣秘書記官に轉じた。二十七年日英條約の成るに及び勳五等に叙し双光旭日

章を賜はつた。二十八年日清媾和事件に關し我全權辨理大臣の書記官として會議に列し媾和條約成るに及んで大本營に於て兩陛下に拜謁を賜はつた。十月外務省政務局長に任じ二十七八年戰役のつて辭職したが條約改正事務に從事した功によつて露、佛、伊、獨、墺、白、西葡瑞典、蘭、暹羅の各國より勳章を贈られた。氏は又詩書をよくし雪莊と號して隨鷗吟社の協贊員となつた。

歳晩書懷

廿載已無冠帶縻、　滄浪水淨洗心脾、
興來幽詠獨搖膝、　醉後笑談時解顧、
散地逍遙聊爾耳、　塵衢馳騖竟何其、
胡爲揚子迷岐路、　終古茲途最坦夷、

琵琶湖舟中作

天杷風光供我儔、　如斯輕艓足夷猶、
蒼波截得疾於箭、　萬古此湖無此遊、

日韓併合歌

虔迎神后在天鑾、　泉下豊公亦合瞑、
八道三韓歸版籍、　國君拜詔作藩屏、

秋海棠十二首戲和夢堂（節錄）

舞袖飄風滴露珠、　原知天上一仙妹、
底緣誤向貧家謫、　補得月前秋興圖、

秋海棠は清艶愛すべきも、古人の題詠甚だ少くて海棠に比して十分の一位のものであらう。この一詠によつて群芳譜の缺を補つてゐるとも言ひたいほどの作である。

現住所　東京市赤坂區青山南町六ノ一三六

永田龍雄　ナガタタツオ（歌）

明治二十三年九月二十日東京府下角筈に生れ、中學を出て外國語學校に入り、卒業の後實業家としが、藝術的氣分の氏は長くその職に在ることを好まず帝國劇場文藝部員となり、劇場に力を盡してゐる傍斜雨莊にあつて詠歌に耽つてゐる。大正十二年渡歐した。

骨身にしみ寒つのる朝をかさなりて木瓣の葉は

滑らに動かす
ゆづり葉の梢は繁る凍てし葉の葉をすぼめ垂れ
日のあがるまつ
なめらけき細枝のさきのほぐれ芽に雫やどりて
雨中に光る
夜風だつ花の梢はたわたわに公園燈の照りに騒げり
誕生日まぢかくなりぬわが乳兒の玩具に遊ぶことも知りつゝ
よその兒のしかも吾が兒とおなじ歳位の乳兒の眼にはつきつも
といふやうな平明調の中に溫情も詩趣も充溢してゐる。

現住所　麴町區飯田町二ノ六

故中谷德太郎　ナカタニトクタロウ（譯）（劇）

明治十九年東京市深川區に生れた。早稲田大學國漢部並英文科の卒業であるが家が裕福であつて道樂半分に讀書や著譯などをやつた人である。

戲曲「墮地獄」「還り行く國」小說「貞操」「孔雀夫人」「男化粧」の外數篇の作がある。

大正十年の頃死亡した。

長田秀雄　ナガタヒデオ（劇）

明治十八年五月十三日東京麴町區富士見町に生れた。中學校卒業後明治大學文科及關西大學等に學んだ。早くより新詩社に入り詩人として知られ後吉井勇等と共に「スバル」を創刊し詩の外に戲曲を作つた。「歡樂の鬼」「琴平丸」「牡丹燈籠」「大佛開眼」「放火」「飢渴」「礫苑」等の外、小說「明け方」「午後二時」「聲」等數篇の作がある。「歡樂の鬼」「礫苑」等は何れも上場されて好評を博した。今は詩を作らずして主に戲曲を試みてゐる。弟幹彥氏の文名に壓せられて一時は阿兄甚振はざるやうなこともあつたが、藝術的の天才は決して弟に遜るものではない。

「大佛開眼」は苦心の作であつてこれが爲態々奈良に來て二週間も滯在の上調査したものである。

又小說「明け方」は島村松井の二氏をモデルにしたものであつて、讀者の興味をひいた。其後の作には戲曲「船中」「嘘」「栗山大膳」小說「遺書」等がある。

現住所　東京市本郷區曙町八、一〇〇ノ二

長田幹彥　ナガタミキヒコ（小）

明治二十年三月東京麴町に生れた。秀雄氏の弟。東京高師附屬中學校を經て早大英文科卒業。早くより「明星」や「スバル」に作品を發表したが四十二年「澪」を公にしてその文才を認められついで中央公論に「零落」の一篇を發表して一躍大家の斑に列した。「澪」も「零落」も共に北海の曠野をさまよふ旅役者の一團を描いた美しい物語である。爾來その流麗にして色彩豐かなる文章とその常識的で委曲を盡した觀察とを以て文壇の花形となり長短兩篇の創作相續いて出で、その多作と人氣とは文壇第一と稱せられてゐる。好んで材を京都と北海道とに取つてゐる。遊蕩文學者として赤木氏より指彈された一人である。著書には前記の外「尼僧」「自殺者の手記」「雲の夜話」「無扇」「紅夢集」「小蔦」「薄命の花」「繪日傘」「露草」「情火」「埋火」「虛榮」「港の唄」「ゆく春」「殘る花」「續金色夜叉」「不知火」「嵐の曲」「白鳥の歌」「闇と光」「青春の夢」「野に咲く花」「永遠の謎」「柳の糸」の主なる作及び「幹彥全集」等がある。

現住所　東京市牛込區中町三一

中塚一碧樓　ナカツカイツペキロウ（俳）

名は直三、明治二十年九月岡山縣淺口郡玉島町に生れ早稻田大學に學んだが中途で退學した。作句は「日本及日本人」「海紅」「東京朝日新聞」等に投句したが氏の句は多く「日本俳句抄」や「海紅句集」等に載つてゐる。句集「はかぐら」「海紅句集」等を著し、俳句雜誌「海紅」の編輯經營に從つてゐる。

師走の一つの島の砂濱

籠の灰草に捨つれば歸雁かな

山に滿つ極樂草や閑古鳥

現住所　東京市外高田村雜司ヶ谷八〇七

故長塚節　ナガツカタカシ（歌）

氏は茨城縣結城郡岡田村の人であつて、夙に文學に志して居たが、のち上京して當時俳家で新派歌人として評判高い正岡子規居士の門に入つて專ら歌道を研究した。後又小說の創作にも筆を染めて其の凡才で無いことを認められたが、大正四年二月年僅かに三十七歲で九州の客舍に病歿した。「長塚節歌集」「炭燒の娘」「土」等の著がある。田園作家として最も確實性を豐かにもつて居た氏に、天もし年を藉してくれたならばと惜しまれてあつた。夏目漱石が「自分の娘に一番先に讀ませたい小說は長塚節の「土」であると言つたさうであるが、娘でも息子でも一讀させたいほどの傑作である。尙ほ氏が子規居士とどの位の程度に接近してゐたかは子規隨筆を一讀したものゝ熟知するところであるからこゝに贅說するのを省略する。「山鳥の渡」は詩人橫瀨夜雨氏が長塚の詩文、消息等を年代順に集めた單行本であつて、氏等一派の自然描寫の態度を知るに都合のよい本である。尙この序文で長塚橫瀨兩氏の關係もわかるので一層興味がある。令弟長塚工學士は特許辨理士である。氏の歌を次に一二擧げて置く。

單衣きてこゝろぼがらになりにけり夏は必ずわれ死なざらむ

おろそかに蚊帳を透してみえねどもしづく懶く外は雨なりき

たらちねの母が釣りたる靑蚊帳をすがしといねたるみたれども

麥刈ればうねま〳〵に打ちならび菽は生ひたり皆かゞまりて

草莓洗ひもてれば紅とけて皿の底には水たまり居り

幾度か雨にもいでて莓つむ母がをよびは爪紅をせり

蚊帳の外に蚊のこゑきかずなりしときけうとく
我は眠りたるらむ

中戸川吉二　ナカトガワキチジ（小）

明治二十九年五月二十日北海道釧路市に生れ、東京開成中學、逗子開成中學、京北中學等を轉々としてゐる間に文學に趣味を有し、一旦明治大學に入學したが中途で退學した。最初に氏の名を成さしめたものは短篇小說集「イボタの蟲」であつて其後「緣なき衆生」「反情」「青春」「ブチ・ブルジョア」「叔母老ひる」「失策」長篇小說「反射する心」「北村十吉」等がある。氏は氏一流の卒直で單刀直入的なよくキビキビした筆致を以て自由な氣持を表し、描寫なども可なり細かいものであるて上に詩的情緒に富んでゐるので多くの讀者をもつてゐる。

現住所　相模鎌倉

永地秀太　ナガトチヒデタ（畫）

明治六年七月山口縣に生れ、松岡壽に就いて洋畫を研究し後、明治美術會の研究所に入つて學んだ文展へは第一回に「靜物」第二回に「逍遙」第三回に「靜物」第四回に「つれづれ」第六回に「休みのひま」第七回に「しぼり」第九回に「父の部屋」第十回に「畫家にて」を出して褒狀又は三等賞等を得た。大正十二年帝展審査員の候補者に擬せられ十四年遂に審査員となつた。現に陸海士官學校の教官であり、太平洋畫會理事をしてゐる。

現住所　東京市小石川區表町一〇九

中西伊之助　ナカニシイノスケ（小）

明治二十六年二月七日京都府宇治郡宇治村に生れた。別に學歷は無く勞働に從事しつゝ讀書自學したものらしい。勞働運動の闘士として名をあらはしてゐる。嘗つて東京交通勞働組合長當時、電車罷業の主謀者といふので投獄せられた。今はプロレタリヤの爲に筆戰をやつてゐる。長篇小說「赭土にめぐむもの」「農夫喜兵衞の死」「赤道」の外

短篇小說「綠蔭」「不逞鮮人」「死刑囚と其の裁判長」隨筆「留置場裏の人生」「瓢の花咲く家」等の外多くの作を發表して居る。

現住所　東京市外代々木山谷四二五

故中西耕石　ナカニシコウセキ（畫）

京都の人。名は壽、別に竹叟と號した。小田海僊門下の逸足で、日根野對山人と共に京都に盛名を馳せたが、對山人の歿後は獨り其名聲を縱にした氏は最も山水に長じ、氣力橫溢の慨があるが、亦一面に衒氣と覇氣とがあつて、對山には及ばぬといふ評もある。明治十七年一月歿した。年七十二門下に秦金石等がある。

中西悟堂　ナカニシゴドウ（詩）

明治二十七八年の頃金澤市小姓町に生れ、幼より東京に出てゐたので、東京京橋文海小學校、天臺宗中學、曹洞宗中學修了後二三の專門大學に學んだことがある。歌集「唱名」詩集「東京市」等の著がある。現に松江市北田町普門院住職及松陽新聞編輯部記者を勤め、「新詩人」「帆船」「嵐」「日本詩人」「極光」其の他に作詩を發表してゐる。

現住所　東京市西多摩郡多西村菅生藏守院

長沼守敬　ナガヌマモリタカ（彫）

安政四年九月岩手縣一之關町に生れ、明治十四年二十五歲の時伊太利ヴェニス王立美術學校彫刻科に入學し、ルエジ・フェラリー、アントニヨ・ダルソットに學び、十八年優等の成績をもつてこゝを卒業して二十年八月歸朝した。二十八年、第四回內國勸業博覽會に出品して三等賞を得、三十三年佛國巴里萬國博覽會に「老夫」を出して名譽の金賞を得た。文展には第一回から第七回まで彫刻部審査員となつたが、第五回には伊太利萬國博覽會に委員として渡航したので其任に就かなかつた。作品には「老父」の外「長谷川謹介氏肖像」も有名なものである。

現住所　東京市小石川區表町一〇九

故中根香亭　ナカネコウテイ（文）

名は淑、字は君艾、初の名造酒、香亭と號し、曾根直の二子であるが幼時中根氏に養はれ、長じて武枝を好み、後專ら書を讀み、其の學古今に涉り凡そ文學の事和漢雅俗究め盡さないことがない。最も文章に長じ、又書畫を善くする。初め幕府の手に仕へて監曹となり、後陸軍指揮官となり、伏見の役後勝海舟に屬して軍務に參與し、又德川慶喜に從つて駿河に移り、沼津兵學校教授となつた五年陸軍參謀局に出仕して陸軍少佐に任ぜられ、命を奉じて「兵要日本地理小誌」を編纂した。この書一度出でゝ文名一時に高く、天下傳誦して諸學校は教科書に採用した。後文部省編輯官となつたが十九年辭職後意を琴書に縱にして優游自適した。又漫遊を事として足跡天下に遍く晩年興津に僦居して大正二年一月二十日病歿した。自ら鑑して清雅院自覺香亭居士といつた。同地松林の中で燒き殘灰を海中に棄てた。氏は嘗て墓表に代ふる文を爲つて子の彪に授けて骨を留めるなと言つた今其の宿志を遂げたわけである。氏は奇骨稜々而も人に接するに城府を設けない嘗て永年寺に遊んだ時山僧等のために老子を講じた。著書に「兵要日本地理小誌」「日本文典」「香亭雅談」「香亭藏草」等最も著れ、別に香亭遺文一卷ある。新保一村の編纂で隨筆、雜錄、紀行、評釋、歌集、手簡等を輯錄してゐる。

豆州途上懷二故江川坦庵一

豆州地如レ斗、要津正處中、山走連二南北一、
海合控二西東一、往時綠眼客、動輒寄二艨艟一、
廟堂議二方略一、冠蓋起二江公一、君方太平日、
一官守二孤忠一、運籌嘯二明月一、巡農入二芳叢一、
兵書數百卷、慷慨振二士風一、海門從レ報警、
髀肉消二鐵驄一、俊才集二門下一、操銃術加レ工、
豈唯一港口、環海謀禦レ戎、豈唯一火技、
結陣閑二守攻一、惜哉有事日、齎レ志溘焉終、
王霸雖レ異レ道、盡レ國義相同、寄レ言天下士、
莫レ忘先覺功、

故中根半嶺　ナカネハンレイ（書）

名は聞字は公升半嶺は其號である。舊高田藩醫で東京の詩人中根半仙の長子で天保二年二月神田於玉ケ池に生れた。父翁刀圭の餘暇詩文篆隸を善くし大沼枕山卷菱湖を師として後董玄宰を親つた。半嶺夙に家學を受け殊に書道を學び大に漢隸を研究して其の妙を極めた。兼ねて鉄筆を巧にし又詩を能くして不如學吟社を創設した。氏の息興氏は半湖と號して父翁に學び其の筆意に入つたと言はれてゐる。

哭二乃木大將一

蓋世英雄竟奈何、　忽隨二龍駕一到二天河一、
揣摩休レ說公之事、　一死報レ君豈有レ佗、
今見古風武道存、　凜然悲壯弔二英魂一、
莫レ傷名士遂無レ後、　天下同情皆子孫、

太公垂レ釣圖

豈全二節義與功名一、　何負二溪磻一睠顧情、
勿レ怪釣竿輕鄭去、　此時不レ出奈二蒼生一、

生前住所　東京市下谷區西黑門町四

長野草風　ナガノソウフウ（畫）

名は守敏、美術院同人、日本畫家東京に生れて、四條狩野折哀派の大家、川合玉堂氏に就いて學び明治四十一年友人安田靫彦、今村紫紅等と紅兒會を起した。文展には第一回に「六の花」第五回に「埋經圖」第六回に「稻荷詣」第七回に「朝と夕」を出し入選し褒狀又は三等賞を得たが横山大觀、下村觀山等諸家の努力によつて日本美術院の再興した時その第一回に「布晒」第二回に「向原寺」第三回に「法成寺の萬燈會」を出して、其の才能を認められて同人に推され第四回に「雨の黃蘗」を出した。大正十二年大震災後の同院展には「一廟裏鳴蜩」「惜寫荒爐」等の力作を出品して其の技の益圓熟してゐることを示してゐた。

現住所　東京市本郷區妻戀坂上九

故中林梧竹　ナカバヤシゴチク（書）

肥前小城の人にして東京の書家、名は隆經、字は子達、梧竹は其の號である。別に劍書閣主人の號がある。文政十年生れ、世々鍋島侯に仕へた。幼より書を好み、江戸に出でゝ山内香雪に學び一家をなした。氏後に山紫水明の地に漫遊して詩情を養つた。夙に書道に精通して漢秦及六朝の書法に達し、輩出せる門生各一家を成し帝都書壇の耆宿であつたが大正四年八月郷里に於て病歿した。享年八十七。著書に梧竹堂叢書がある。鳴鶴翁の說によると梧竹は香雪及清人余慶に就き更に北京に行いて余慶の師潘存に學んだのである。

無題

涼殿參差翡翠光、　朱衣華帽宴親王、
紅簾高捲香風起、　十六天魔舞袖長、

中林　儁　ナカバヤシセン（畫）

明治十二年九月京都市上京區南禪寺町に生れ、二十七年より伊藤快彦及び淺井忠に就いて洋畫を學び、三十六年六月關西美術院に入り、四十一年、東京に出て太平洋畫會研究所に在學した。京都にあつては關西美術會、第五回內國勸業博覽會等に出品して屢々受賞し、文展へは第三回に「松並木」第五回に「植物園」を出し又四十五年四月太平洋畫會展覽會に出品した「初秋」は畏くも宮內省御用となり、大正二年日本美術學院に入つて講師となつた。又嘗つて「中央美術」編輯同人の一人となり、大正八年松本高等女學校講師となつた。

現住所　長野縣松本市外島內村小澤方

中原綾子　ナカハラアヤコ（歌）

明治三十一年二月長崎市に生れ、東洋高等女學校を卒業し、大正六年中原斗一氏と結婚し、同年より新派閨秀歌人與謝野晶子の門に入つた。與謝野晶子は「火のおもひ」の作者を推薦すと題して、三田文學誌上に淸新なる獨創と熱烈なる幻想に富んだ歌として激賞した。歌集「眞珠貝」は女史の歌壇上の位置を確立せしめた。

運命の神に捧げし贄なれや我みじろかず悔いず

歎かず
天馬きて我を誘ふ日を待ちぬ誰が言の葉に由るぞともなく
物足らずサロメの舞もカルメンの歌も女人の燃ゆる心に
かゝる世に誠を持ちて生れしが我が過ちの初めなりけん
地巽よりも天變よりもおそろしき人と人との魂のあらそひ

現住所　東京市外大井町瀧王寺四四四〇

中原潔子　ナカハラキヨコ（歌）

伯耆國橋津村の人、父は中原孝太と言つて、十九歳の時米國に渡りミシガン大學に學び歸朝後三十餘年の間種々の事業や發明に一身を献げ盡した人であるし、兄和郎も二十歳の時渡米しコーネル大學を卒業したる後ロツクフエラー研究所に入り現に同所のアツソシエールに昇進してゐる。そして淋巴腺に關する論文で大正十二年博士となつたほどの天才である。女史は頭腦明晰で純眞な詩情に富み、新進の洋畫家栗原亮氏と結婚して藝術的に惠まれた美しい家庭を作つてゐる。歌人としての地位は諸家の推賞以來一般に認められ佳作甚だ多い。今は歌道の外創作にも力を用ひ菊池寛氏の指導を受けてゐる。著書に「潔子集」がある。

四つ辻の角のひなたにねむたげの眼をまばたきて馬はゐにけり
冬の陽のほのぬくもりに眼をほそめさらに細めつねむたげの馬

現住所

長原止水　ナガハラシスイ（畫）

名は孝太郎、止水と號し元治元年二月美濃の竹中藩に生れた。本姓は竹中。早く父を失ひ。明治十八九年頃小山正太郎の不同舍に入り、後、原田直次郎の指導を受け、三十一年、黑田淸輝の推薦で東京美術學校助教授に任じた。其後白馬會等へ出品して名聲を馳せ、文展へは第二回に「平和」第

三回に「入道雲」第四回に「風伯」第五回に「草花」第六回に「藤棚」第七回に「殘雪」等を出して褒狀又は三等賞を得、第九回の「晩春」は二等賞の首席となり、第十回に「初夏」「晴嵐」を出して名譽の推薦となり、第十一回に「月」「新晴」を出した。現に東京美術學校教授の職にあり、大正八年以來帝展審査員となつて今日に至つた。

現住所　東京市本郷區駒込動坂町三二七

故中原悌治郎　ナカハラテイジロウ（畫）

明治二十一年十一月北海道釧路に生れ、夙に太平洋畫會研究所に入つて中村不折の指導を受けて洋畫を研究し新海竹太郎に塑造を學んだ。文展へは第四回に彫刻「老人の頭像」を出し、院展へは第三回に「肖像」を出して大いに好評を博し、遂に名譽の樗牛賞を得大正七年遂に美術院同人となつた。

現住所　東京府下日暮里渡邊町一〇四〇

故中丸精十郎　ナカマルセイジユウロウ（畫）

甲斐の人。初め京阪に遊び南宗畫家日根對山人に就いて南畫を學び、後東京へ出て西洋畫家川上冬崖の聽香讀畫館に入つて洋畫を學び、又工部省美術學校へも入學した。後神田に畫塾を開き、參謀本部陸地測量部に出仕した。遊就館にある武人の肖像畫に彼の作が多い。明治二十九年歿した。門下藤島武二、大下藤次郎、眞野紀太郎等錚々たるものがある。

故中村秋香　ナカムラアキカ（歌）

靜岡藩士中村錄翁の次子、天保十二年九月駿府に生れた。不盡廼舍、今かくれが、乾坤廬、松下庵等の數號ある。年甫めて十一家翁について歌學を學び十五歳松本直秀及び八田知紀の門に入つて歌文を候め、後戸塚積齋に漢學を問ひ又因幡の正音師に依つて語學を質し二十歳松本塾に入り專ら國語を研究し次いで駿府明新館に入り漢字塾を修め二十六歳幕府の大試に應じて經書歴史文章の全科及時務策に及第して賞與をうけ擢んでられて其の助教となつた。明治六年教部省に出仕して後內務文部の兩省を經て大學に轉じ、更に東京高等女學校幹事兼教諭、女子高等師範學校教諭。第一高等中學教授に歴任し二十六年眼疾を得て一旦職を辭したが後東京音樂學校、第一高等學校講師を經て宮內省御歌所寄人を命ぜられた。四十三年一月二十九日歿した。成蹊實務學校長中村春二氏は氏の令息であつて、新教育の實際家として斯界の注目を惹いてゐる。

其著「書翰文大成」「皇國文法釋義」「日用文鑑」「中古文鑑」「中古國文」「書簡文法式」「新體詩歌自在」「吉野拾遺詳解」「落窪物語評釋」「伊勢物語評釋」「新說歌がたり」等數多く歿後「不盡廼舍遺稿」一卷刊行されてゐる。

山中雜興

瀧の聲、松の風、心とはに淸く
花の色、鳥の聲、月日そゞろに長し
雲をわけて苔に臥し、露に醉ひて歌ふ
峯の春、谷の秋誰か知るこのこゝろ

故中村櫻溪　ナカムラオウケイ（詩）

名は忠誠、字は伯實、東京の詩人、先世上總長生郡日吉村櫻谷に居たので櫻溪の號があるのである少より精敏で倉田幽谷に就いて經史を修め、尤も文章を善くした。其文溫粹典雅にして歐曾の風があり、廻瀾社に入つて文學を研究し、平生纂述を事とした。埼玉縣師範學校、臺灣國語學校教授となり育美に從ふこと前後三十年の久しきに亘り、大正十年十二月三十一日年七十を以て病歿した。著書に「涉濤集」三冊「盤錯秘談」一冊其他がある。氏は詩よりも文に長じ「花香月影序」「賀吳立軒先生七十序」「賀立皇太子表」「甘藷先生傳」「艾木賊曲」「奇鱗」「書靖寇愚案後」「楳坪遺稿跋」「題賴山陽詩笠卷軸」「佐藤後素遺德碑」等の外名篇數多くある。

中村岳陵　ナカムラガクリヨウ（畫）

名は恒吉、明治二十三年靜岡縣に生れ、川邊御楯寺崎廣業に學び、四十五年東京美術學校日本畫科を卒業し、紅兒會、及び巽畫會會員となり、又大正四年今村紫紅、速水御舟、牛田雞村、富取風堂小茂田青樹、小山大月、黑田古鄕、岡田壺中等と赤耀會を起し、文展へは第六回に「乳糜供養」を出し、日本美術院の再興第一回に「綠蔭の饗莚」第二回に「薄暮」を出して遂にその同人に推され第三回に「維盛高野の卷」第四回に「大月氏行」を出して其技倆を認められてゐる。

現住所　東京市小石川區高田豐川町三七

中村勝次郎　ナカムラカツジロウ（畫）

號は紫明といひ、慶應二年十一月奈良に生れ、夙に西洋畫の大家黑田清輝に就いて研究し、二十九年同人と白馬會を組織した。作品は文展第二回に「餘所見」第三回に「雨中の葵」「ぼけの花」第七回に「みだれ菊」第八回に「十樣錦」等を出した

現に東京美術學校助教授の任にある。

現住所　東京市下谷區谷中町三七

中村吉藏　ナカムラキチゾウ（劇）

もと春雨と號した。明治十年五月十五日石見國津和野に生れ、少年時代に於て雜誌「少年文集」の投書家として頭角をあらはした、三十二年早大哲學科並英文科に入り傍ら廣津柳浪に師事し同氏の令息和郎の家庭教師として同氏宅に寄食した。三十三年「大阪每日新聞」の懸賞募集に應じ「無花果」を投じて當選し文名大いに揚つた。三十九年劇の研究に志して洋行の途に上り、米英露を經て四十二年歸朝した。劇曲「牧師の家」等を公にして劇壇に重きをなし、大正二年藝術座の起つた時島村抱月氏と共に同座の舞臺監督となり傍ら早大講師を勤めた。創作「新社會劇五篇」「井伊大老の死」「淀屋辰五郎」「大鹽平八郎」「錢屋五兵衛」「中村吉藏現代劇選集」の外「サロメ」「人形の家」「ブランド」「希臘悲劇六曲」等の翻譯及び「イブセン評傳」「劇場と劇評」等の著がある。大正七年十一月四日島村抱月氏惡性感冒の爲去つた後は藝術座の運命は殆ど氏の双肩にかゝつて同月六日夜抱月氏の告別式を藝術座にて行ふ前中村吉藏氏を脚本部主任とし、それに長田秀雄、楠山正雄、秋田雨雀、川村花菱、本間久雄、仲木貞一の七氏を脚本部員とし座主の囑托をうけて藝術及實行方面の事務を處理することになつた。

大正十年三月島村民藏、本間久雄外數氏とイブセン會を起して每月十三日氏の宅に於て脚本並びに演劇の月評を行つて來た。

「井伊大老の死」は大問題を引起したがあれは劇場の爲に廣告になつて却つて幸であつた。氏は新社會劇を提供して我國民劇の爲に一新境地を開拓しようとしてゐるが實に當代新劇界の第一人者である。氏の作「地震」が東京の市村座に上演された時は、舞臺技巧の渾然と纏まつた大作であり、之をし生かした菊五郎と鯉三郎とがよくあてはまつてゐたので立派なリアリズム劇との好評もあつた。「錢屋五兵衛」は變化少く色彩乏しく、調子が單純で舞臺上の効果を期待し得るやうな場面が少いといふ評もあつたやうに、「井伊大老の死」ほど讀者の注意を惹かなかつた。氏は秋田雨雀氏楠山正雄氏等と共に劇作方面では島村抱月氏以後大に期待されてゐたが、秋田氏は力を多く童謠童話等の幼少年の讀ものやエスペラントに割かれ、楠山氏また少年少女の讀ものと翻譯ものに傾いて來たので、純粹に生一本の劇道を歩むのは氏一人の觀がある。其劇作に精進三昧の態度は驚嘆に價する。近年東京淺草に新國劇研究所起るに及んで氏は其の所長となり、新派俳優一方の大立物澤正一黨と力を併せて大に盡してゐたが、不幸にして其筋の檢束を受けたのは將來發展の斯道に對して惜しいことである。夫人は有名な音樂家であつて特にヴァイオリニストとして知られ現に東京女子高等師範學校の教授である。

現住所　東京府下西巢鴨宮仲一九六九

故中村敬宇　ナカムラケイウ（漢）

名は正直、敬輔と稱し、敬宇は其の號であるが、初は鶴鳴、梧山等の號があつた。幼名は釧太郎、天保三年五月江戸麻布丹波谷に生れ、同五年葛原茂右衛門に就いて四書の素讀を受け、又鹽田瀧潭及石川梧堂の門に入つて書道を學び、岩崎多左衛門に就いて經書の素讀を學び、十二年更に興堂に入つてその吟味を受け、又平田馬之進、川崎魯助井部香山等に就いて漢學を學び、桂川甫周に就いて蘭書を研究し、嘉永元年昌平坂學問所寄宿寮に入つた。文久二年十一月將軍上洛の間侍講を命ぜられ、慶應二年英吉利に留學し、明治元年歸朝して後に大學教授となり、又元老院議員及貴族院議員に任ぜられた。一方小石川に同人社なる一大塾舍を開いて全國の子弟を教育したが東京に留學する者爭ふて入社し、後年有用の材となつた人が少く無い。又西周、神田孝平の諸氏と明六社を起し明立雜誌を出した。著譯の書多くあるが西國立志編自由之理最も汎く世に行はれてゐる。明治二十四年六月七日病歿し祭粢料一千圓下賜され侍從東園子爵を勅使として幣帛を賜はつた。享年六十。

褫理來邦
珍ニ重罍痕ニ金不レ如、　聞言被ニ理手親書、
要レ知ニ四海弟兄意、　早在ニ兩邦交際初、

中村孤月　ナカムラコゲツ（小）

明治十四年東京に生れ、早稲田大學英文科に入學したが、事情があつて卒業間際に退學した。氏は現代作家論の外數多の創作を著して文壇を賑はした。邊幅を修めず嘗て四十に近くしてなほ少年のやうに嬉戯を好むと言はれた人で文壇の一畸人と言はれてゐる。「人々は寢靜まつてゐる」「女が生活するには」「子供の喜ぶ新智識」「大本の研究」等を發表したが近頃面白倶樂部等に探偵小説をも書いてゐる。

現住所　靜岡縣濱名郡曳馬村早出

中村星湖　ナカムラセイコ（小）

本名は將爲、明治十七年二月山梨縣南都留郡河口村に生れ、早大英文科を卒業した。在學中「萬朝報」の投書家として名を馳せ、早稲田文學に小説「少年行」を投書して懸賞に當選二葉亭四迷の推奬を得て文壇に其の地位を造つた。時正に自然主義の全盛期に會し自然主義的作品の多くを公にしその堅實冷性の觀照的態度を稱せられたが最近新主觀主義傾向が新機運を將來するやそれに魁して新文藝の中堅の一人となつてゐる。短篇「少年行」「半生」「星湖集」「影」「漂白」「女のなか」等の外に翻譯モオパッサンの「月光」「死の如く强し」フロオベルの「ボワリィ夫人」等がある。人生並に藝術に對する態度堅實なるに等しく文章も亦頗る堅實修辭の絢爛はないが描寫は委曲をつくし表現また暢達の筆を有つてゐる。

近く發表したものに小説「義兄」「踏切番の發狂」「鶉詞ひ」「二人の小僧」「妹の如く」評論「フロオベルの生涯」「月評」「小説界近事」等を「表現」「早稲田文學」「萬朝報」「新女性」「讀賣新聞」「東京朝日新聞」等に發表した。

現住所　神奈川縣鶴見町生麥字岸二九〇

故中村彝　ナカムラツネ（畫）

明治二十一年七月水戸に生れ、中村不折、滿谷國四郎に學び、四十二年太洋畫會に於て奬勵賞を得、文展へは第三回に「巖」第四回に「海邊の村」第五回に「女」第八回に「少女」を出して褒狀及三等賞を得て、第九回に「肖像」を出して遂に二等賞を受け、第十回に「田中館博士の肖像」を出して特選の首席を占めた。更に名譽の推薦となり、大正十二年帝展審査員候補者に擬せられた、十三年帝展出品の室田氏肖像を絶筆として十二月歿した。年三十八。

現住所　東京府下落合新田四六四

中村白葉　ナカムラハクヨウ（小）

本名は長三郎、明治二十三年十一月二十三日名古

屋市西洲崎町に生れ、名古屋商業學校を經て、東京外國語學校の露語科を卒業した。「罪と罰」「アンナ、カレニナ」「小惡魔」「無題」「四民」　等の翻譯及「蜜蜂の如く」「末路」「行路病者」「底無地の思出」「黎明」等の長短篇ものゝ外感想や紀行が數篇ある。

現住所　東京府荏原郡駒澤新町四三一

中村不折　ナカムラフセツ（畫）

名は鉾太郎。慶應二年七月京橋八丁堀に生れ、幼時鄕里なる信濃高遠に移り、十二歳の時上京して松岡環翠の門人眞壁雲鄕について南畫を學んだ。後、父に伴はれて歸鄕し、貧苦と戰つて漢學を修め、明治十七年高遠小學校助教となり、其の間長野に出て河野次郎に鉛筆畫と水彩畫とを學んだ。十九年飯田小學校に聘せられたが、其の生徒に菱田春草がゐた。二十一年、小山正太郎、淺井忠等の十一會に入學の目的で上京し、小山正太郎の不同舍に入つた。それより苦學數年、二十四年より

始めて油繪に手をつけ、二十六年、東照宮を寫生して明治美術會展覽會に出品した。二十七年「小日本新聞」に入り、新聞の挿繪を描き、二十八年日清戰役に從軍して、三十四年六月佛國に留學してラフアエル・コランの門に入つたが、半年後アカデミー・ジユリアンに移り、ジヤン・ポール・ローランスの教を受けた。三十七年コンクールの賞を受けて、三十八年三月歸朝した。四十年、東京市博覽會に「建國掛業」を出して大いに世の注意を惹いて一等賞を得た。文展には第一回以來洋畫部審査委員となり、又太平洋畫會の幹部として研究所に生徒を教へてゐる。作品は文展第一回に「白頭翁」「彫刻家」第二回に「妙義山」第四回に「半諾迦尊者」第五回に「跋陀羅尊者」第六回に「道」「巨人の跡」「迦諾伐蹉」第七回に「神農」「老孔二聖之會見」第八回に「卞和璞を抱いて泣く」「處女」第九回に「長養」「神納」第十回に「たそがれ」「黎明」第十一回に「巢父汚流に飲はず」「維摩居士」を出し、又太平洋畫展覽會にも毎回出品した。尙ほ洋畫の外、六朝風の書と北畫風の日本畫を以つて名があるのみならず、書畫帖等の蒐集に於ても大いに努めてゐる。大正八年帝國美術院會員となり今日に至つた。餘技として俳句も巧みである。

初空やよろこぶ雲の置きどころ

現住所　東京市下谷區上根岸町一二五

中村武羅夫　ナカムラムラオ（小）

明治十九年十月四日北海道岩見澤町に生れ、小學校卒業以外學歷は無い。二十三歳の時上京して、小栗風葉、眞山青果等の關係から新潮社に入り、爾來「新潮」の記者として働いて來た。著作には長篇小說「人生」の第一部「惡の門」「獸人」の二冊及び時事新報に連載した長篇「渦潮」等がある。

現住所　相州藤澤町辻堂海岸

中村樂天　ナカムララクテン（俳）

名は修一、播州の人、夙に俳句に志して一家をなすに至つた。同地出身の文人には井上通泰、前田林外、播磨龍城等があり畫家に松岡映丘がある。

朝顏や枯竹攀ぢて垂れ咲けり
野分庭に尻向け合ふて鉢木かな
蟲聽くや枚方近き船の中
凧や墓焦がし燃ゆる束線香
病める子に藪入の友尋ね來し

現住所　東京市外大井町一一〇九

中村良顯　ナカムラリヨウケン（國）

文政十一年六月播州赤穗の藩邸に生れて幼時叔父中村良信の養子となつた。養父良信は伊勢松坂の人で夙に歌學を本居太平に學び皇學歌學に通じて門人頗る多かつた。氏は幼時より和歌を好み蓼生園と號し爾來家學を受けた。後伊勢國山田足代弘訓に從ひ皇學語學を修め、又紀州和歌山藩士加納諸平に歌學を學び尋で漢學を赤穗藩博文館及伊丹町近衞殿明倫堂等に修業し兼ねて武術を赤穗藩に

修めた。嘉永三年養父歿後其襲衣を繼ぎ徒に教授すること數年であつた。後大阪尋常師範學校、同尋常中學校、同高等女學校等の和文科教授を擔任し兼ねて大阪市私立女學校講師となつた。「蓼生園歌集」「萬葉集學のちか道」「韻文答問錄」「蓼生園韻語」「はまの枝折」「蓼生園拾玉集」等がある。

現住所　大阪市東區瓦町二ノ四

中村亮平　ナカムラリヨウヘイ（小）

明治二十年六月十九日長野縣埴科郡五加村に生れ明治四十四年長野縣師範學校を卒業し、大正七年まで教職に在つた。大正八年以來日向國に行つて武者小路實篤氏の創始した「新しき村」に二年間生活して鄉里に歸り北安臺郡會染村の教師となり傍ら創作に從つてゐる。藝術家の生活「柊の花」聖者の生活「荒野の光」長篇小說「死したる麥」等の著作がある。

現住所　朝鮮蔚山局內北亭

中山啓　ナカヤマケイ（詩）

明治二十八年四月金澤市に生れた。早稻田大學商科卒業後服部時計店の番頭となつたが後辭して監獄部屋打破同盟を組織し又國家資本主義卽ち國家社會主義の運動に參加した。「クロポトキンの經濟學說」詩集「自由の廢墟」等の著がある。露骨な感情むき出しに荒つぽい線で書いてゐる。時には調子の流麗は白秋式のところがある。氏が氏の趣味性から男性的の裝禎の大きな詩集を出版し、目方の五百目もあるもので頗る大きいものを作り定價十圓の豫約を百部丈募集したこともあるが隨分奇拔な詩人である。最新の著書では詩集「火星」等がある。

節約デー

酒や煙草をね　節約しませうとさ
ほんに羨まし　節約できる身分に
たまになつて見たい　を ら年が年中
からけつだ

宴會をはね　質素にしませうとさ
ほんに羨まし　宴會できる身分に
たまになつて見たい　を ら年が年中
南京米だ

物見遊山はね　節約しませうとさ
ほんに羨まし　遊山できる身分に
たまになつてみたい　を ら年が年中
蟻のよだ

虛禮虛式は　止ませうとさ
ほんに羨まし　虛禮できる身分に
たまになつてみたい　を ら年が年中
着のまゝだ

貯金や保險に入りませうとさ
ほんに羨まし　貯金のできる身分に
たまになつてみたい　を ら年が年中
無一文

現住所　東京市本鄉區根津八重垣町六九

中山稻靑　ナカヤマトウセイ（俳）

名は健三郎、明治十二年九月二十九日埼玉縣北足立郡安行村大字吉藏新田に生れ、子規居士生前既に根岸庵の俳席に列り、日本派の俳句に傾倒してゐた。當時第一高等學校內には三子、孤雁、潮音麥圃等の諸氏翠風會を起して句作に熱中してゐたそれに紫人、抱琴の諸氏と校外より加はつた。同會は初め故大野酒竹氏等の流風を汲んだが後に至つて純日本派となつた。三十五年中野三允氏と共に俳諧雜誌「プラレ」を創刊し、印刷所を岐阜に移すに及んで鹽谷鵜平氏の「鵜川」と合併し、第六卷に至つてその發行所を東京の俳書堂に移したこの後廢刊の止むなきに至り俳風は一般に新傾向の流行となり、氏も東京芝區を中心とする俳人と共に「シカブラ」「やなぎ」等の俳誌を企畫し、中野三允氏の俳誌「新綠」と共同し後に分離し、「アラレ」を本陣として生命派の俳句を力說してゐる。氏の句は「ホトヽギス」「日本新聞」「中央公論」「文庫」「國民新聞」等へ投稿したが、「春夏秋冬」にも取られてゐる。

青嵐吹くや三十三間堂
八戒の晝寢して居る夏野かな
金盥伏せて霰の音聞かん
現住所　埼玉縣安行村吉藏新田

長與善郎　ナガヨヨシロウ（小）

明治二十一年八月東京麻布に生れ、學習院卒業後東京帝國大學文科大學に入つたが中途で退學した醫學博士長與稱吉氏の弟で「白樺派」の新進作家中武者小路實篤志賀直哉等の諸氏と共に重きをなす人である。「盲目の川」「彼等の運命」の大作や短篇集「或る人々」「生活の花」「結婚前」「平野」戲曲「項羽と劉邦」「賴朝」等の著がある。作風あくまで眞摯にして底力がある。トルストイの俤を傳へた青年作家として、將來最も大きく育つて行く可能性を有する作家として矚目されてゐる。
現住所　神奈川縣鎌倉町扇ヶ谷字泉ヶ谷二九八

半井桃水　ナカライトウスイ（小）

名は洌桃水は其號である。萬延元年十二月對島嚴原に生れた。父は溝四郎と言つて長崎縣士族で代々醫を業とした。明治五年氏は父に從つて朝鮮釜山に遊び七年歸國して翌八年東京に上つて尺振八の共立學舍に學僕となつて英學を修めた。九年頃より東京日日新聞等の投書家として漸く文壇に知られた。十一年西京新聞に聘せられ尋いで大阪魁新聞大阪朝日新聞等に執筆し十四年筆を投じて再び朝鮮に航した。十五年本邦居留商人朝鮮人の爲に殺傷せられたので氏は居留民を率ゐて東萊府伯に直談し爲に入獄の憂目にあつた。後釜山商法會議所理事となり外務省御用掛となつた。十八年歸朝して後三菱會社に入り又大藏省に出仕した。時偶東京朝日新聞發刊の際であつたので氏は再び文壇に投じて專ら小說を擔任し今日に至つた。閨秀作家として名高かつた樋口一葉女史は實に氏の門人であつた。氏は有名な多作家であつて其の作は四百篇もあらう。又音樂を好んで俗曲歌詞の作物が多い。

俳句

村やせていよいよ梅のかほりかな
また鮒の身巾にたらぬ小鮎かな
包圍陣中仲秋三五の月を見て
名月や旅順も同じ影ながら

小唄燕

かりかねの屆けし文はかた通り返事いそぐとかける氣かあのはりがねにとまる燕

小唄助六

時鳥名のれよ月の傘の内夜目遠目にも見違へてよいものかいな一つ印籠ひとつまへ

小唄お月さん

待つ折はおもはせぶりな雲がくれ忍ぶ今宵を照らすとはエ、意地わるなお月さん閨の夜もあるぞへ

現住所　東京市麴町區飯田町二ノ三

奈倉梧月　ナグラコゲツ（俳）

名は正良、明治九年九月松江市南田に生れ、同三十年齡二十一歲の時大谷繞石に師事し、後にその紹介で子規の指導を受け、又高濱虛子氏國民新聞に選句を擔當した頃よりその薰陶を受けて今日に至つた　松江には明治三十年來碧雲會を組織して主に繞石氏の指導を受けてゐる。氏の句は「ホトトギス」「日本新聞」「國民新聞」「地方の新聞」に投稿したが、其の句のあるものは「春夏秋冬」「續春夏秋冬」今井柏浦編纂の「句集」「一萬句選」「ホトトギス雜詠集」等に蒐錄されてゐる。著書といふべきものは無いが、氏の選句の中より更に拔萃したる句を「碧雲集」「續碧雲集」の二部として出版されてゐる。

小大工の霜踏み落す足場かな
冬ざれのいつ盜まれし梯子哉
西陣や加茂の分家へ衣配
柴漬に一寸しぐれたる月下かな

さし出でし邪魔を折りけり椙の足

現住所　松江市南田町一四八

故夏目漱石　ナツメソウセキ（小）

名は金之助、東京府平民夏目直克の第五子。慶應三年東京牛込喜久井町に生れた。東京府尋常中學校に入り、兼ねて二松學舍に通つて漢學を修め、又成立學舍に英語を學んだ。尋いで大學豫備門第一高等學校を經て明治二十三年東大工科建築科に入り後に文科に轉じ二十六年卒業し直ちに大學院に入つた。在學中正岡子規と交り其の感化を受けて俳句や寫生文を作つた。大學院在學中東京高等師範學校の屬托となりて英語を教授し、二十八年松山中學に赴任し、二十九年熊本高等學校教授に轉任した。有名な創作「坊ちやん」はこの松山中學校時代の事を描いたものださうな。三十三年英國倫敦に留學三十六年歸朝して帝大の助教授兼一高教授となつた。傑作「倫敦塔」は留學中作したものであつて「我が輩は猫である」に先立つて氏の文名をあげた作物の一である。三十八年「ホトトギス」に小説「わが輩は猫である」を掲げたが、その機智縱横洒脫輕妙の作風は一世を風靡した。こゝに於て氏は一躍文壇の寵兒となり、遂に森鷗外、坪内逍遙と共に泰斗と崇められるに至つた。四十年教職を退いて朝日新聞社に入り數多の創作を公にした。著作には右の外「薤露行」「草枕」「虞美人草」「三四郎」「坑夫」「彼岸過まで」「行人」「明暗」等の外殆んど等身に達し何れも有名である。氏の該博な識と高邁の見とを示せる「文學論」「文學評論」等もよい著書である。大正五年十二月九日朝日新聞連載の「明暗」未完成のまゝに胃潰瘍で倒れた。年齢漸く五十益々健筆の縱横を加ふる時に當つて忽然逝いたのは實に愛惜に堪へない。一種の癖を有する文壇の奇傑であつて曾て博士號を贈られたが斥けて受けなかつたのも有名な話の一つである。門人に鈴木三重吉、森田草年、阿部次郎、安部能成、野上臼川、久米正雄芥川龍之介、松岡讓、赤木桁平等の文學士がある

松岡讓氏は漱石の逝去後その長女と大正七年春結婚した。氏の思想も晩年益々哲學的境地に足を踏み入れて深みを增し、眞を重じて「則天去私」の精神を盛に唱へ、眞、善、美の外に壯をも理想の一大要素とした。氏の歿後門人等は九日會を組織して毎月九日に同氏邸に會合してゐるし、その書齋漱石山房は相當の紹介人があれば參觀させる。大正九年十遺墨展覽を東京京都大阪で開催したがそれによつて書、漢詩、日本畫・西洋畫、俳句、小説等行くとして可ならざるなき天分を十分示してゐる。氏は長篇小説を書く場合に、能く其の腹案をダイヤグラム式に手錄し、全體を幾つかの章に分ち、其下に人物の名前を書き付け、其處から幾條かの線を引つ張つて、各性性格の關係を明かにしたものだと云ふ。現に「虞美人草」などに關しては左樣した手錄が立派に殘つて居る「明暗」にも此種の手錄があるにはあるが何所に當嵌るものか、他人には一寸見當がつかない。氏が書を始めたのは何時頃といふことも別段判然せず、また誰れの書を學んだかわからぬが、木庵隱木、卽として書道で知られてをる隱元門下の木庵の書風を最初取り入れたやうだ。それから伊豫の松山に、明月といふ醫者の能書家があつた。それをも取り入れた處がある、その外では言ふまでもなく、良寛の書である。「書苑」などに出たものも、勿論味はつてゐた。要するに何を見ても、直ぐそれを取り入れることが、氏には出來たのである。本來イミテテイヴな處のあつた人で、そこが氏のセンシブルな處であつた爲めであらう。そしてその何んでも直ぐ取り入れる中からやがて別の自分のものが生れるといふのであつた「朝日」に小説を書く時なども必ず三つばかり他の小説を先づ讀んだものだ。無論誰れのと云ふことなしに手當り放題讀んで、それで小説を書く氣分を誘發するといふ風であつた。遺墨展覽會に出品されてあるものに就て見ても、晩年のものには可なり良寛が出てゐる。四十五年あたりまでは、書を別段藝術的だと思つて書いてはゐないやうで現にそれ迄の分には

機嫌の好い時には好いやうな、怒つた時には怒つたやうな筆勢が現れてゐて面白い。畫は三十二年頃まで描いて一旦杜絶えて四十年頃から復た始まつた。最初は水彩畫ばかり、その間に僅か三四の油繪がある。後には水彩畫でも、松の下に人物が坐してゐるやうな風のものを書いた。それから後で南畫に移つた。古書畫や法帖類も相當に所有してはゐたが、書畫屋が扱ふやうなものは相手にしなかつた。畫の方にはこれといふ師があるではなく、却つて「國華」などに出てゐる畫を參考にした。先生といふものがなかつたため水彩畫にしても南畫にしても、獨り描いて獨り樂むといふ風であれは如何だと示したまゝでそれに對して青楓氏が自分は斯う思ふと答へると云つた風である。何にしても氏の畫には、どうしても東洋の藝術、東洋人でなければ出來ないものが、確かに見出される。尙謠曲はワキ寶生の大家寶生新門に學び、又斯界の高僧釋宗演の後繼ぎ釋寫活師に參禪して澁いものを味つた。

名取春仙　ナトリシユンセン（畫）

名は芳之助。春川の別號がある。明治十九年二月東京麻布日ケ窪に生れ、幼時綾岡有眞に就いて日本畫を學び後、久保田金僊、福井江亭に就き、又洋畫をも研究した。後、東京朝日新聞に入り、「デモ畫集」「漫畫と譯文」「古事記畫談」「日本の神樣」等の著書を出した。作品は第四回に院展に「潮盈つ珠、潮干る珠」がある。日本美術院院友であつたが大正八年僞作事件の爲美術院を除名された。

現住所　東京市芝區田村町六〇

鍋井克之　ナベイカツユキ（畫）

明治二十一年神戸市に生れ、大正四年東京美術學校西洋畫科を卒業した。作品は二科會へ第一回から出品したが、其第二回に「並木の午前」「落葉する丘」「秋の連山」第三回に「海近き山」「入江の木かげ」第四回に「河岸の家と木」「蓮池」がある。尙第二回の「秋の連山」は二科賞金を得、第四回院展には「連山」を出して好評を博した。二科會會友、氏は又今や創作界にも乘り出して其の偉才を認められてゐる。筆致輕暢、描寫纖艶であつて氏の處女作「半日」のごときは讀者をして思はずホロリとさせられる。大正十三年三月國枝金三、小出楢重の諸氏と共に信濃橋洋畫研究所の實技指導者となつた。

現住所　東京市本郷區曉町一三、前田直之助方

浪上圓玉　ナミカミエンギヨク（通小）

慶應二年十一月東京本所相生町に生れ本名義三郎といふ。幼い時から病弱なため醫師の勸めによつて音聲を出すは養生になるといふことで十六歳の時父の友人なる名人松林伯圓の門に入つた。天才あつて其の技大に進み師の秘事を傳へられこの道で衣服するやうになつた。氏は餘暇を以て遠記を今江綱一氏に漢籍を伯父なる舊佐竹藩士富岡英之助及津輕家の儒者金子某及三輪聖人と言はれた下谷三輪町の精勤義塾石川文莊に師事したから講談師としては文學のある人である。初名は伯儀後圓玉を襲名した。師の伯圓はこれを大切な名であると言つて強いて氏に襲がせたものであつて圓玉五代に當る。主として文藝倶樂部、娯樂世界、講談雜誌、青年、日本少年、人情倶樂部、現代、講談倶樂部、ポケツト、實錄と講談等の雜誌に寄稿し「安政三組盃」「八五郎論語」等を著した。講談師如燕、伯知、南龍、文士久保田万太郎、森曉紅、漢文學者杉原夷山、畫家村岡應東等の交友あるを見ても氏が尋常一樣の講談師でないことがわかる。氏の兄爲次郎は尺振八門の英學者であつた。

現住所　東京市深川區西森下町三四

故成島柳北　ナルシマリユウホク（文）

名は溫、字は叔厲、柳北は其號、蓋し其の家東京柳原の北に在つたのでこの號があるのである。又別に確堂とも號した。後避けて名を弘、字を保氏

と改めた。天保八年二月甲子に生れたので甲子太郎と稱した。十八歳の時父椿堂の後を嗣ぎ、家定及家茂二公の侍講に擬せられ、奥儒者となり、布衣班に進み、更に俸を增し内班に入れられた。慶應元年騎兵奉行となり增俸せられて二千石に至つた。氏は文墨蠹魚の間に人と爲つても好んで兵を談じ、又屢々要路に建白したが議論頗る凱切を極め、深く時弊に中つた。幕府敗殘の時、氏は擢んでられて外國奉行に任ぜられ、更に會計副總裁に進んだ。江戸開城の後農に歸して官命出仕を促されたが遂に就かなかつた。爾來學舍を淺草本願寺に設けて子弟教育に任じ、又歐米諸國に航して新智識を得て歸つた。のち朝野新聞に聘せられてその社長となり大に才筆を振つて文名大に高かつたが、明治十七年十一月三十日病歿し本所小梅村本法寺に葬られた。年四十八。

九十九橋

仰看金葵照二碧空一、　城南門外蹈二長虹一、
裙釵絡繹趁二涼到一、　九十九橋明月中。

成瀨正一　ナルセセイイチ（評）

明治二十五年四月二十六日東神奈川に生れ、第一高等學校を經て大正五年帝大英文科を卒業し翻譯ロマン、ローランの「トルストイ」外數篇の創作がある。帝大卒業後直ちに渡歐し、米佛瑞等に遊學して大正八年歸國した。渡歐中瑞西に於けるロマン●ローランとの對話を時事新報に發表した。

現住所　在外

故成瀨大域　ナルセダイイキ（書）

名は溫字は子直通稱久太郎大域はその號である。別に賜硯堂の號がある。文政十年正月遠州日阪宿に生れた。幼より外祖父巢甫翁の書法を學び明治初年東京に遊んで芳野金陵、川田甕江、安井息軒翁等の門に遊んだ。初め居を茶溪にトし後居を根岸に移し同八年宮内省に奉職した。十二年八月勅を奉じて王羲之聖教之序の大幅を臨して上納し又前後相尋いで出師表眞艸二幅を奉獻した。此年楠公手澤に係る古硯を賜ふの光榮を擔つた。十四年春又十体書幅を奉獻し十五年春支那公使隨員文學士黃鈞詮に即成書法を傳へ席上少年生をして書せしめ目前其執筆を示したので黃氏はために謝文を贈つた。神社佛閣内の記念碑等揮毫を依頼するもの甚だ多い。著書に「十体一覽帖」「眞書正信偈帖」「軍人龜鑑帖」「訂正三体千字文帖」「和漢諸体一覽帖」等がある。十体一覽帖は曾て侍從仙石氏の手を經て天覽に供した。晚年東都に維を垂れて書法教授を業とし、鳴鶴、一六、雪柯、梧竹等の六朝風に反對して、これを魔道に落ちたものと非難した。

成瀨無極　ナルセムキヨク（評）

明治十七年一月東京に生れ第一高等學校を經て東京帝國大學獨文科を卒業した。短篇「極光」「京の夢大阪の夢」翻譯「小さきアイヨルフ」並に「文學に現れたる笑の研究」「東山の麓より」「四十歳」「東山夜話」「近代浪漫主義」等がある。近代浪漫主義に著書の犀利なる觀察と流麗なる筆を以つて評論されたもので近代文化講座の一。氏は京都帝國大學の助教授で目下外國に遊學してゐる「東山夜話」は著書の「東山の麓より」が詩と眞とから生れ出たやうに本書の前半「斷腸記」「思出」「雜信」「南支印象記」は主として體驗を語り「四つの夜話」の「岡崎夜話」に於てこの二つの要素が入り交りその「碎かれたる心」に現はれた京洛の水のリズムが「鴨涯夜話」「宇治夜話」「湖畔夜話」を貫いて流れ、終に戲曲「池」に於てどんよりと淀んでゐる水こそ最も人の運命を語るものではないかと思はれる。

現住所　京都市動物園北通

南部修太郎　ナンブシユウタロウ（小）

明治二十五年十月十二日仙臺市に生れ、芝中學を經て慶應義塾大學に入り、その文學部を卒業した創作集「修道院の秋」「湖水の上」長篇小說「返らぬ春」「若き入獄者の手記」等の著がある。大

正六年より九年まで三田文學の編輯主任をした。この外近く發表した小說に「紫陽花」「睡蓮」「女盜」「妹へ」評論「階級藝術の問題」隨筆「秋」「密告者」等を「婦人畫報」「女性」「新潮」「現代」其他に發表した。

現住所 東京市赤坂區新町四ノ一八

故南摩羽峰 ナンマウホウ（漢）

文政六年十一月舊會津藩の城下若松市に生れた。舊名八之進後之を改めた。字は士張、羽峯は其の號である。夙に史子經典に通曉し兼ねて書道をよくした。白虎隊の遺跡として香煙絶えざる若松郊外飯盛山上の白虎隊記念碑は翁の筆である。氏は明治五年五月京都府に出仕し少屬に任ぜられ、爾來太政官權大主記其他諸官を經て後東京大學文學部教授兼文部省編輯局普通學務局勤務となり、正七位に叙せられ累進して從五位勳五等に陞叙された。後高等師範學校教授兼女子高等師範學校教授となつた。或人は氏に三島毅重野安繹の二博士を加へて明治の三大漢學者と稱した。蓋し三人中學問文章に於ては其下風に立たないまでも上位に立つことは困難であらう。しかし人格の高潔に於ては當代稀に見るところで所謂會津武士の典型であつた。三十六年官を辭し四十二年四月十三日病のために逝いた。享年八十七。初め程朱の學を宗としたが後古今の諸說を折衷して一家を墨守しない餘暇を以て弘道會副會長、斯文會講師をした。著書に「內國史略」「追遠錄」「環碧樓遺稿」等ある

梅兒塚

墨江千古水禽哀、　往事回頭總劫灰、
杳々迷魂招不レ返、　春風空度墓門梅、

寒霞溪西石門

（前略）陟降崎嶇到二石門一、曰是窓也、　奇巖聳立突レ天、　中空成レ門、　雄偉驚、　又行數十步、　指巉嵒壁立如レ列二屛風一、　高數千尺下達二壑底一、曰是瀑布也、有二銀下九天觀一、　而レ無レ水、　蓋曰レ隩曰二瀑布一者土人以レ形似レ名也、　其他傾而欲レ頹者、　橫而欲レ墜者斜走者、　倒懸者、獅怒、虎踞龍蟠鳳翥、使レ人心悸目眩既而到二山巔一無レ樹無レ巖細草如レ氈、四望開豁南海山陽諸山歷々鍾二脚下一、蓋望二十州一云。（後略）

二の部

新居格 ニイイタル（評）

明治二十一年三月九日德島縣板野郡大津村大幸に生れ、東京帝國大學法科大學に入學して大正四年その政治科を卒業した。爾來「讀賣新聞」大阪每日新聞を經て現に東京朝日新聞學藝部員となつて今日に至つた。尙ほ「無痛階級教化の問題」「ブルジョア文學の撲滅」「左傾思想」等の外評論隨筆等を多く書いてゐる。

現住所 東京市牛込區南榎町五七

新岡旭宇 ニイオカキヨクウ（書）

奧州津輕の人、天保九年生る。名は久瀨、旭宇は其號、別に大海道人の號がある。年十八の時江戸に出て諸名家を歷訪し大に書論の錯亂を訂した。是より書學を以て自ら任じ、筆を執り書を綴くこと四十餘年一日のやうであつた。終に漢魏唐宋の書論書を看て其錯簡を訂正し其稿積んで數百卷に至つた。古文、篆、隸、八分其他の諸体皆之を能くした。最も草格に長じ其著に「筆法書傳三十八法」「三体いろは帖」「短冊習字帖」「及學校用習字帖」等がある。

現住所 東京市中根岸町四二

贄川他石 ニエカワタセキ（俳）

名は邦作、明治元年四月八日靜岡縣駿東郡淸水村的場に生れ、郡縣會議員となり、又水力電氣事業會社の專務となつたこともあるが、今は製紙會社の業務に從つてゐる。氏は孤山堂凌頂に就て一般

俳諧を學び、俳諧鳴鶴集の編輯をなしたることもある。この間角田竹冷伊藤松宇より益を得ることが多かつた。又松永蜴堂、松浦羽洲、森山鳳羽諸氏に就いて連句を研鑽した。氏の句は「梅の雫」「白梅」「瀧廻雫」「南海之俳壇」等に投稿し、「木太刀」「大正句選」等に掲載されてゐる。著書に「眞玉白玉」「寒稽古」等がある。兎に角氏は普通の俳句よりも連句に熱中してゐる。

現住所　靜岡縣駿東郡淸水村

西井敬岳　ニシイケイガク（畫）

名は敬次郎。明治十三年一月福井縣武生町に生れ圓山派の大家山元春擧に就て學び、三十七年以來岐阜全國繪畫展覽會、眞美會、美術研精會、京都新古美術展覽會、巽畫會等で受賞し、文展へは第一回に「瀑布」第二回に「雨の夕」第三回に「秋溪」第七回に「怒濤」第九回に「深き溪」第十回に「雲山高逸」第十一回に「海三題」を出した。

現住所　京都市西三本木丸太町上ル

故西尾爲忠　ニシオタメタダ（演）

京師の人、鹿峯と號し、幼より讀書を好み、岩垣氏の私塾遵古堂に入つて刻苦勉學し、その名漸く顯れた。又夙に勤王の志が厚かつたので諸名士と種々の計劃をなした。維新の際監軍となつて、東山道に向ひその功によつて賞祿百石を賜はつた。明治十三年文學御用掛となり、二十八年故熾仁親王殿下御行實編纂委員を命ぜられた。又甚だ書法に精通してゐたが特に大師流を學んで其の蘊奥を極めた。氏は人と爲り頗る溫和であつて人との交際も甚だ圓滿であつた。明治三十三年二月五日病歿した。

故西川春洞　ニシカワシユンドウ（書）

舊肥前唐津の藩士西川元林の男、弘化四年五月二十五日江戸の藩邸に生れた。名は元讓、字は子讓春洞は其號である。別に如瓶人、大夢道人、茄古山民等の號がある。幼より機察明敏頗る塗鴉の嗜があり最も能書の聞えがあつた。年甫めて六歲祖父龜年翁に就いて書を學び、平田彬齋に漢籍を修めた。嘉永二年藩主の命に應じ楷隸二體千字文を書し、當時既に奇童の稱あつた。萬延元年氏時勢に感ずるところがあつて翻然筆硯を拋ち、廣く大儒の門に遊び、或は志士を訪ひ尊王攘夷を唱へた慶應二年藩籍を脫し明治初年大藏省に出仕し、後文墨を樂しみ遂に漢魏六朝書道の蘊奥を極め、特に說に精しく篆隸楷行草の妙を得た。世人呼んで五筆居士と稱した。傍ら後進の薰陶に力を盡し門生二千名中高弟諸井春畦、豐道春海四十餘名あつた氏は尙茶の湯、端吹、詩、繪畫、篆刻等をよくして中村蘭臺、五世藏六等諸氏も氏に就いて大に學ぶところがあつたといふことである。享年六十九歲心臟痲痺のために歿し東京駒込西須賀町大恩寺に葬られた。

生前の住所　東京向島寺島白髮祠畔

西川勉　ニシカワツトム（詩）

愛媛縣宇摩郡金田村の人、明治二十七年六月生れ大阪の關西英學校を經て、早稻田大學に入つて、その英文科を卒業した。詩集「牧野の曲」「日本童謠選集」「メエテルリング童話集」「純正童謠講話」等の著がある。

現住所　東京市本郷區駒込林町一九〇豐秀館

西澤笛畝　ニシザワテキホ（畫）

日本畫家。名は昂一。前姓、石川、前號、迪畝。明治二十二年一月東京淺草千束町に生れ、初め光淋派を研究し、後轉じて荒木寬畝に學び、南北合派を研究し、花鳥を最も得意とする。三十八年以來歷史風俗畫會、「日本美術協會、正派同志會」等に於て受賞し、文展へは第九回に「八哥鳥の群れ」第十回に「園の囀り」第十一回に「初夏の山」を出した。日本畫家中で雛研究の權威とまで言はれてゐる氏は木彫家の益田盛人氏一生の傑作內裡雛に色彩を施して攝政宮御婚儀に際して献上するの光榮を有した。雛と玩具とを好む氏は雛ばかり描

いてゐて一年中の仕事はあるさうである。
現住所　東京市牛込區筑土町三〇

西島○丸　ニシジママンマル（川）

川柳作家にして井上劒花坊等と同じく新派同人である。

蟲に出て月に呼ばれる俗な事
手拭に秋を染め出す勞働者

西田幾多郎　ニシダイクタロウ（哲）

明治元年八月十日石川縣平民西田得登の長男に生れ明治二十七年七月東京帝大文科の哲學選科を卒業して石川縣尋常中學校教諭となり同三十二年三月山口高等學校教授に任じ七月金澤の第四高等學校教授に轉じ三十四年九月同校舍監を兼ね四十二年七月學習院教授に轉じ同四十三年八月京都帝國大學文科大學助教授に任ぜられ、大正二年八月教授に陞進し十二月文學博士の學位を授けられた。數多い我が哲學者の中で獨創の哲學をもつてゐるのは氏のみであつて他はカントやヘーゲルの教を紹述するか希臘の古代哲學を再燃せしめようとする傳統學者であると言はれてゐる。大正十三年カント生誕二百年に際して、多くの哲學者が口を揃へてカントの偉大を說くのに、氏は「カントといふ哲學者はそれほどお祭り騷ぎをするほどの大した人ぢやない」とか言つたといふので、いろ〳〵噂が新聞等にも載つてあつたが、兎に角我が國の哲學界に氏を出してゐることは心强いことである
現住所　京都市上京區田中飛鳥井三二ノ二

故西南臺　ニシナンダイ（書）

名は誠之、字は士惠、通稱は完二、南臺と號し、天保二年五月十二日淺口郡黑崎村沙美浦に生れた父は杢右衞門と曰ひ海岸遠見番所に勤務して譽あつた。南臺はその次男である。壯年笠岡に出て小寺清之に師事し清之歿したのちは其の塾敬業館を襲ぎ子弟を教授した。明治維新の後教鞭を執ること十餘年、退職の後、乙島、玉島、成羽等に帷を垂れて後進を薫陶した。尤も臨池の技に長じ殊に隸書が巧であつた。明治四十三年十二月十二日歿した。享年八十。

故西薇山　ニシビザン（漢）

名は毅一、字は伯毅、薇山は其の號で、父は霜山德左衞門と言つて岡山藩の家老池田隼人に仕へた天保十四年七月岡山に生れ、十五歳の時父に從つて大阪に出て篠崎訥堂の門に入り、訥堂の歿後後藤松陰の門に入つた。一度父に從つて歸國したが再び意を決して上阪した時には、悲しい哉最も敬慕措かなかつた松陰先生は最早此の世の人では無かつた。氏は茫然自失困頓窮り無く、晝は他人の爲に書を寫し、夜は按摩を營み、刻苦精勵わづかに口を糊した。偶々森田節齋の門人西後村が鄉里庭瀨藩に聘せられて來たことを聞いて歸國し其の學僕と爲つた。後村の病歿後、節齋の門に入り、節齋去るに及んで主家に拔擢せられ、後村の後を受けて教授に擧げられた。これより姓を改めて西氏を稱した。後上海に至り專ら英語を修め、更に米國に渡り、再び支那に出で蘇州に入り、上海に歸り、次いで歸朝した。幾ばくも無く外交應接力となり、廢藩置縣の後學校督事に任ぜられ大に學校の改革を行つた。又加藤次郎と謀つて、女子教訓所を設け、明治九年權參事となり、次いで判事を兼ね東京上等裁判所詰となつた。國會開設の論起つて氏は建白書を元老院に出し、又岡山の池田學校の閉ぢてあつたのを開いて源泉學舍を設け、自ら英人二名と共にその教授となつた。この歳閑谷黌長となり、次いで第一回の衆議院議員となり、更に第三回の代議士となつたが、爾來推薦されても之に應じないで專ら育英に從ひ傍ら梅を植え桑を培ひ、悠々として自適した。氏は最も文を能くし節齋の衣鉢を傳へて高雅穩健である。著書數卷何れも世に行はれてゐる。明治三十七年三月二十八日卒かに歿した。年六十二。

西宮藤朝　ニシミヤフジトモ（評）

明治二十四年十二月七日秋田縣角館町字田町に生れ、早稲田大學政治科に入り、後英文科に轉じて卒業した。新進批評家中の錚々たるもので盛に筆を執つてゐる。「高山樗牛傳」「歐米文藝家傳」「現代文化の問題」「思想問題大觀」「近代十八文豪と其生活」「解放の教育」「新詩歌論講話」等の著及アンドレーエフの「反逆者ユダ」トルストイの「愛と暴行」ゴルキイの「懺悔」「自由な生活へ」デューランドの「哲會と社會」ミュンステルベルヒの「藝術教育の原理」ウエルスの「世界國家と世界教育」等の翻譯書がある。

現住所　東京市外田端五五

西村伊作　ニシムライサク（評）

和歌山縣平民大石金平の二男で明治十七年九月六日生れた。同二十五年五月先代西村モンの養子となり同年八月家督を相續した。株式會社北山銀行紀和索道株式會社の各取締役であり紀州では屈指の資産家である。氏は廣島縣の某私立中學を卒業したのみであるが一種の藝術的天才をもつて繪畫や建築をよくする。養母の反對意見があつたにもかゝはらず資産を社會的にか藝術の爲にか提供するやうなことを可なりの決斷を以て實行してゐる現に東京神田駿河臺の文化學院を創設して自ら院長となり藝術の諸大家を招いて理想の教育をやつてゐる。氏はこの多忙なる教育事業の傍ら「現代人の住宅」其の他文化方面の著書を出版し或は數多くの文を筆まめに書いて各種の誌上に發表してゐる。夫人も亦同じく文化的方面の著書があり、長女アヤ（明治四十一年九月生）は十二歳にして既にピノチョを著し長男久二（明治四十三年四月生）は繪畫を二科會に出品して其の選に入つたほどの天才である。

勢力絶倫にして各種の藝術を自分のものとし更に筆に口に之を宣傳する其熱心と勇氣には驚く。將來文化的施設の必要なときに當つて氏の建築論住宅論は是非傾聽すべきである。文化學院は全く氏の設計によつて出來たものである。教育の方面にも一隻眼を有するけれどもとより氣分的な詩人肌の氏ゆゑ藝術的教育に多少偏しはせぬかといふ疑問が幾分無いでもない。

本宅は和歌山縣東牟婁郡新宮町で

現住所　東京神田區駿河臺

西村渚山　ニシムラシヨザン（小）

明治十一年滋賀縣水口町に生れ、外國語學校に學び、少年文學者巖谷小波山人の門に遊んだ。小品文、旅行記、小說、翻譯の外少女の讀物を多く著はしてゐる。輕く光つた才の閃きを認めるが未だ大きい力の籠つたものは發表してゐない。嘗て文章世界の散文選者をして居つた。

火の海の空映り酉の市遠き。

日盛りの水田人まばら蠶きつゝ。

內陣を出る疲や春の人。

飯具かはかせてある垣根蝸牛。

現住所　東京府下荏原郡碑文谷村柿木坂二三八四

西村醉夢　ニシムラスイム（文）

名は眞次、明治十二年三月伊勢の國山田市に生れ早稲田大學の英文科並に國漢部を卒業した。

氏は非常な健筆家として有名で創作「見えざる黑影」の外「蟬の研究」「鳴く虫の研究」等の著述をなし、日本船舶の史的研究をも公にした。「學生」編輯主任で早稲田大學の講師。日本船舶史家としては權威者である。

大佛の肌寒げなり秋の風

五月雨や谷川のぼる蟹の群

夜もすがら野分の風に鳴子かな

京に入る日青葉の塔に雨繁き

綿ぬきや粥の湯すゝる貧の朝

の句も面白いが次のやうな歌もある。

矛杉の梢に鷲のかゝなきて月影暗し大臺原

嘘言ひて顏赤らめし少年の純なりし日のなつかしきかな

幾度も寒さに夢の破れつゝ東白みて驢馬なく頻

り

現住所　東京市牛込區矢來町八ノ一三號

故西村天囚　ニシムラテンシウ（漢）

鹿兒島縣の人、名は時彥天囚は其號であり碩園は別號である。夙に東京に出て重野安繹氏等に就き漢文學を修め、後操觚に從事し「屑屋の籠」を著して其名を江湖に知られた。明治二十五年大阪朝日新聞社に聘せられて記者となり益々文名を博した。氏屢々諸國に航して其の政治を視察し二十七八年の役亦渡清して從軍記者となり、後東京朝日新聞社に轉じ、三十三年六月清國事變の起るに際して南京特派員となつた。後京都帝國大學文學部講師となり文學博士の學位を授けられた。後再び大阪朝日新聞に入つて樞要の位置に在つたが同新聞社員大變動のあつた時退社し後宮內省に入つて御用掛となつた。氏は詩文の外書道にも達して氣品ある文字を書いてゐる。東京誠之堂發行の「北白川の月影」は氏の普通文の著書とし頗る有名なものであつて、北白川宮臺灣御征討の御事蹟を知らしめると同時に忠君愛國の念を涵養するに最もよい。大正十三年七月三十日病死。

如意輪寺作

延元陵下古僧堂、滿地春泥白似霜、
百錬鍛成忠孝族、題名字々與花香、

偶感

眞天子在義兼仁、滿漢何爲問主賓、
爭辨華夷堪一哭、西來黃帝亦胡人、
卜年三百見深仁、死義南朝有幾人、
今古靑蟲多誤會、只言明哲保斯身、

送高野竹隱游薩三十韻

天鉾高逆立、海上望巍巍、厥南三陵在、
億載仰肇基、隼人居斯土、吠狗守宮墀、
入唐一帆近、文物來從茲、佛公始剖符、
三州乃一麾、百二都城列、獻琛南島夷
豈啻武威震、文敎誇先施、戰國盛絃誦、
耆宿推桂師、伴宮名造士、餘澤久不衰、
前脩存風範、秋海是白眉、錦水佳公子、
揚風姓字馳、延賢唱且和、上客藪與伊、
南冥信奇才、磊落不可羈、仲繩嘲闘吏、
子成罵健兒、交臂失英雄、往事使我悲、
惟其積也厚、舊邦重四維、道豐而仁洽、
忠勇出天資、忽遇風雲會、人豪起一時、
贊襄中興業、功勳銘鼎彝、茲有觀風客、
載筆入西陲、不知今猶古、無奈俗易移、
依然形勝壯、名山作藩籬、呼吸秀靈氣、
登高可無詩、況有賢太守、同鄕言無私、
鶴嶺春色好、聯驂花下騎、掃苔月川上、
微雨讀殘碑、崔崒淨光寺、鬱葱順聖祠、
徘徊以俯仰、浩然發遐思、回頭壇坫寂、
大雅其屬誰、非君掬靈蹟、焉得洩神奇、

西村陽吉　ニシムラヨウキチ（歌）

本名は辰五郎、明治二十五年四月九日東京本所區相生町一ノ九に生れ故大杉榮氏に就いて佛蘭西語を學んだ。歌集「都市居住者」「街路樹」論集「新社會への藝術」等の著書がある。氏は石川啄木、土岐哀果等の生活派短歌を更に强調したもので民衆派又は民衆の藝術民衆の短歌と云はれるものである。用語はなるべく卑近なものを使ひ從來の旣成歌學を排する立場であつて傳統を無視して生活に直面する等をこの派の特徵とする。氏は東雲堂書店主であつてもと「短歌雜誌」の主宰者であつたが大正八年十一月新短歌雜誌「尺土」の主幹となつた。「新社會への藝術」は新社會への藝術、民衆藝術としての短歌、石川啄木について、尺土漫筆等の文を集めたものである。

昔よりかくし變らず寄る波と思ひつゝ見れば海の寂しも
寄りて來る白き浪がしら見てをれどなほ寄りてくる白き浪がしら
赤き花いまは散りつくしあをあをと葉の繁りたる鉢の躑躅かな

故西村芳藤　ニシムラヨシフジ（畫）

震災前住所　東京市日本橋區檜物町九〇

名は藤太郎。一鵬齋と號し明治の版畫家として有名であつた。文政十一年十一月江戸に生れ歌川國芳の門に學び、武者繪、組み上げ燈籠、初組繪を巧みにしたばかりで無く、又人形の衣裳が巧みだつたので「おもちや芳藤」と稱せられた。明治三十六年、年七十で病歿した。

西山翠嶂 ニシヤマスイシヨウ（畫）

京都の人。四條派の大家竹內栖鳳畫伯に學び、文展へは第一回に「廣寒宮」第二回に「轉迷開悟」「花見」第六回に「青田」第八回に「採桑」第九回に「農夫」を出して褒狀又は三等賞に入り第十回に「未笄の女」第十一回に「短夜」を出すに及んで遂に特選に入り、大正八年より帝展審査員となつた。大正十二年大震火災の後京都大阪で開催された日本美術展覽會の審査員となり、大作「木槿の花」を出して好評を博した。

現住所 京都市柳馬場姉小路北

西山泊雲 ニシヤマハクウン（俳）

名は亮三、明治十四年四月三日丹波國に生れ、十六歲の時京都商業學校を半途で退學し、直ちに南洋に渡航しやうと企てたが暴風のため引返し、今は家業の酒造業に從つてゐる。氏は三十五年頃より句作を始め、三十六年の春東京より來れる高濱虛子氏について俳談を聽き、爾來俳句をもつて宗教視するに至つた。「ホトヽギス」には每號氏の句を見ることが出來る。

今日植えし門田さやかに夏の月
高草にとびあへぬ蝶や青嵐
山繭の殼浮びたる清水かな

現住所 兵庫縣氷上郡竹田村

丹羽海鶴 ニワカイカク（書）

名は正長、近藤雪竹、比田井天來諸氏と同じく書聖日下部鳴鶴翁の高足であつて、夙く一家をなし書品時流を拔き、筆力雄健を極め、當代眞に得易

からぬ名手であり、子弟の指導亦妙を得てゐると稱せられる。大正五六年の交鷄林八道を遠征して大に書眼を高め、歸來益々研鑽を積んだ。比田井天來の後を承けて東京高等師範學校の習字科を擔任し、また一般の揮毫にも應じてゐる。同好會々員であつて楷行を最も得意とし、「教育勅語」「戊申詔書」「古柏行」を公刊して廣く世に頒つてゐる。大正九年文部省習字科中等教員の試驗委員を命ぜられた。

大正甲子孟春
律回二歲晚一氷霜少、　春到二人間一草木知、
便覺眠 前生意 滿、　東風吹レ水綠 差々、

現住所 東京市四谷仲町三ノ一〇

ヌの部

額田六福 ヌカダムツトミ（脚）

明治二十三年十月二日岡山縣勝間田町一七三の門閥であり屈指の資產家に生れ、學校時代は何時も最優等の成績を示して擔任教師を驚かした。後中學校時代に病氣に罹り右手を折斷せざるを得ぬやうになつた。氏はこれより家に籠つて演藝脚本其の他の文藝を耽讀し幾度か萬朝報其の他の懸賞文に當選した。氏は左手であるにかゝはらず右手の常人も及ばぬ程の速筆である。のち早稻田大學英文科に入つて研究の傍岡本綺堂氏について脚本を書いてゐた。早大在學中大正五年「出陣」の一篇新演藝懸賞募集に當選したが氏の戲曲的天才は坪內逍遙博士の評語がよく盡してゐる。大正九年早大卒業大正十一年松川淸子女史と結婚した。氏の著作は「眞如」其の他の戲曲概ね東都の舞臺に上つて好評を博してゐる。恐らく岡本綺堂氏の門人中でも出藍の才筆家であらう。近來は戲曲の外に童話のやうなものにも筆を染めて譚海其他に寄稿してゐるのを見る。

現住所 東京市外高田町大原一五二六

沼波瓊音　ヌマナミケイオン（俳）

名は武夫、明治十年十月名古屋市玉屋町一丁目に生れ、三十四年東京帝國大學文科大學國文科卒業後伊賀國上野中學校に奉職し、三十六年一月文部省圖書課囑托となり、四十年一月萬朝報社に入り四十四年二月以來著述業に從つたが、後また第一高等學校教授となり傍ら著述をやつてゐる。氏は學生の頃筑波會に入り、大野酒竹の指導をうけた。四十三年三月より雜誌「俳味」を編し、大正九年雜誌「旅日記」の計畫をした。氏の句は「瓊音句集」「高原の風」等に收められてゐる。また著書には「蕉風」「俳句講話」「三紀行」「默想の天地」「評註俳句選」「芭蕉句選講話」「大疑の前」「始めて確信し得たる全實在」「小說芭蕉の臨終」「徒然草講話」「乳のぬくみ」「小學校教員諸氏のために」等數多くある。

春の日や子と雜學に志す
さきの世の我戀語れ朧月

愚痴いふは妻の癖なり晝寢せん
西瓜太郎躍り出でよと割つてけり
烟突の掃除から〳〵小春かな

現住所　東京本郷區西片町一〇二九號

沼田一雅　ヌマタイチガ（彫）

名は勇次郎。明治六年五月福井縣に生れ、夙に彫刻家を志して上京し斯道の大家竹内久一、佛人ブルレー、トワット、サンドーズ等に學び三十六年巴里に留學し三十九年、イタリヤ、ドイツ、オランダ、ベルギーの諸國を經て歸朝し、東京美術學校教授となり、千九百年、巴里萬國大博覽會に出品して金賞を得、明治四十年、佛國政府よりオフヒシエー・ド・アカデミー徽章を得、內國各地博覽會に於ても受賞甚だ多い。

現住所　東京府下下澁谷伊達跡一七九九

沼田笠峰　ヌマタリユウホウ（著）

明治十四年十月兵庫縣神崎郡中村に生れ、神戸桑美學館に學び、上京して國民美學會を卒業した。また藤井健治郎博士や故大村仁太郎に師事し、少年少女文學の方面に於ては早くより巖谷小波の門に入つてその指導を受けた。氏は嘗て雜誌「日本の家庭」「少女世界」等の主宰をなしたが、今尙高級婦人雜誌「たかね」の編輯に主腦となつてゐる。又早稻田出版部より發行の「早稻田高等女學講義」の編輯に關して來たが、今尙その顧問となつてゐる。著書には「わかき婦人の行くべき道」「わかき婦人の結婚の自覺」「わかき婦人の思想生活」「少年少女物語」「少女スケツチ」「新少女スケツチ」「少女百話」「女學校時代」「たのもしき少女」「現代少女とその教育」等の外十種ある。現に頌榮高等女學校長、早稻田高等女學講義顧問たかね婦人會主幹、雜誌「進み行く少年少女」編輯長、博文館編輯部顧問等の職に在る。

現住所　東京市外目黑町三田

沼夜濤　ヌマヤトウ（俳）

名は法量、明治十四年四月尾張國に生れ、四十一年眞宗大學卒業後、翌年大谷派本願寺錄事の職に就いた。氏は「無盡燈」「懸葵」「中外日報」「大阪時事」等に投句してゐる。著書としては「佛門句集」「句佛上人」「眞宗故事成語辭典」等がある。

耳遠き溫容の師と夏籠りぬ
餘り苗捨て置きにせり蓮田尻
社頭澄む水涼し蟹の居る

現住所　京都市七條通朱雀

ネの部

故根本樵谷　ネモトシヨウコク（書）

名は郁二郎、千葉縣市原郡白鳥町の人であつて幼時江戸に出で宮川堤月に從つて畫法を學び、又洋畫を修め、遂に雲谷派の杉谷雲樵に就いて其の衣鉢を繼ぎ出藍の稱があつた。墨馬遊鯉等は最其の

得意とする所である。美術協會又は展覽會に出品して屢々入賞の榮を得た。資性頗る恬淡であつて嘗て畫を以て軍資を献じ、又巨資を投じて故師の碑を向島百花園に建て、尋で盛んな供養を行つて而も自らは清貧に安んじた。大正二年一月八日五十六歳で病歿した。其子雪蓬も亦頗る畫を善くして名聲がある。

根本雪蓬　ネモトセツポウ（畫）

明治十一年三月上總國市原縣鶴舞村に生れた。名は柳作雪蓬は其號である。幼より父樵谷に畫道を學ぶ。二十二年以來横濱に赴き矢内楳秀に就て專ら寫生の法を學ぶこと數年、歸京の後荒木寛畝に就いて南北合派を研究した。曾て駿遠豆相南總信越七ケ國を漫遊し到る處の勝地風景を寫生し畫譜を製して歸つた。日本美術協會展覽會其他の繪畫共進會等に於て褒賞及木杯を受けること數十回に及んだ。日月會幹事、文墨協會委員、日本美術協會々員となつた。氏は花鳥山水の何れにも巧みであるが、中にも孔雀を描くに最も精妙である。それがために宮内省の御用品たる光榮を負ふたことも數回ある。餘技として俳道に精進してゐる。

現住所　東京市本郷區湯島天神町一ノ六六

故根本通明　ネモトツウメイ（漢）

文政五年秋田縣苅和野村に生れ、幼名を周助と稱し、藩校明德館に入つて通明と稱した。間も無く明德館勤學生となり、監事、教授を經て學長となつた。次いで薄小參事、藩學校教授、秋田縣權大屬、を經て大藏省に入り同省沿革志編取調掛となり、斯文學會の講師となつた。又宮内省御用係皇族御進講等をなし、十九年御講書始めの節御進講を拜命した。二十三年根本義塾を創始し、二十八年文科大學教授に任ぜられ、三十二年文學博士を授けられ、三十九年十月三日年八十五で病歿した。論語解は世に有名なものであるが易學は特に比なき造詣をもつて知られてゐる。

ノの部

納谷一堂　ノウガヤイチドウ（俳）

名は市五郎、明治十四年四月八日秋田縣能代港町に生れ、格別の學歴は無いが俳句に趣味を感じ、「文庫」「俳星」「ホト、ギス」「北羽新報」「日本」等に投句して今日に至つた。氏は三十三年「俳星」の出た頃より俳句に志し、小笠原洋々氏等と共に五工、天風兩氏の指導を受け、又露月氏に師事して大に得るところがあつた。四十二年頃から五工氏を補けて「俳星」の編輯に從事したが大正元年其の休刊以來句界に遠ざかるやうになつた。現に銀行に勤務して終日薄書堆裡にあるが、時々の句作に其の吟懷を遣つて居る。

京便の繪の具のことも春の風

現住所　秋田縣能代港町上町

野上臼川　ノガミキユウセン（小）（譯）

名は豐一郎、明治十六年八月豐後國臼杵に生れ、東大英文科を卒業した。大學ではかの華嚴に入つて死んだ思想家藤村操と同級であつた。在學中高濱虚子と知り寫生文に興味を寄せた。卒業後國民新聞の文藝欄を擔當しのち法政大學に教鞭をとり萬朝報記者となつた。小説「赤門前」「巣鴨の女」の外翻譯にピエールロチの「お菊さん」ヴェテキンドの「春の目ざめ」其他「邦譯近代文學」等がある。大正二年沼波瓊吉とはかり自由講座を創建したが今は止めた。閨秀の作家彌生子女史は氏の夫人である。

漱石氏の門人として漱石氏の行狀等に關する文章も諸雜誌に書いてゐる。法政大學教授である。

現住所　東京市外日暮里渡邊町一〇四〇

野上彌生子　ノガミヤエコ（小）

名は彌生（ヤヘ）子。十九年豐後に生れた。明治女學校卒

業、夙に作家として知られ、短篇小說「或夜の話」「五つになる子」「父親と三人の娘」の外翻譯「傳說の時代」「ソニヤ・コブレフスキイ自傳」等がある。

嘗て閨秀作家として田村俊子と匹敵し得べきは女史を措いて他にないとの評もあつた。緻密な觀察とすつきりとした上品なしかも巧妙な文章とは味の濃かな幾多の佳篇を成してゐる。嘗つて中央公論に發表した「靈魂の赤ん坊」の如きも女史の前途を語る傑作である。「小說六つ」は女の夏目漱石として大正の文壇に獨歩の慨を示せる女史の傑作である。「龍神丸」は比較的短いものではあるが發表當時非常な評判のものであつたし、「或女の話」もいろ〳〵考へさせられた作であつた。運命によつて次ぎ〳〵四五人の夫に仕へて行つた女の身の上を材料とし、且つその女が人形に近いやうな無性格的なのをやゝ問題にして取扱つてゐる點はチェーホフの或る作を思ひ出させる。これは女史が一方新時代の女性といふものを考へながら

その女主人公によつて過去の無自覺的な日本婦人の類型を提示したのであつて、その境遇乃至運命の推移は細かく描寫されてゐる。

「傳說の時代」はバルフインチ氏の原著であつて希臘羅馬の神話を說いたものであるから歐洲文化の根本的本質、文藝思潮の基調を知るに都合がよい。殊に卷中五十有餘の古代裝飾畫及古代彫刻の寫眞版は世界的傑作のみである。夏目漱石氏の序が卷頭についてゐる。

尙「ある女の話」と相前後して「綾鼓」と「神樣と巨人」を發表したが、前者は謠曲「綾鼓」を材料として新らしい衣裳を着せたもので、戲曲としてよい出來であるのは一般の評であつた。これによつても女史が平素能や謠曲に對する興味や理解が思はれて床しく感ぜられる。近く小說「準造とその兄弟」といふ百五十枚の長編を書いたが之は社會の活きた事件をありのまゝに觀察して、之を落ついた力强い筆で活寫したものである。この篇を讀んで女史の力量に驚嘆しない人があれば、その人は全く藝術を每らぬ人であるとまで言はれたほど、活寫の妙腕を示したもので到底他の女流作家の及ばざるものであることは勿論男子作家の間にあつて遜色の無い雄篇である。夫君は女史と同國の產、東京帝大出身の美文學者野上豐一郎氏であつて、夏目漱石門下中錚々たるものである。

現住所 東京市外日暮里渡邊町一〇四〇

野口雨情 ノグチウジヨウ（詩）

名は英吉、別名草中木治、明治十五年十二月茨城縣多賀郡磯原に生れ、東京專門學校の文科を卒業した。明治三十九年以來童謠民謠の製作及びその普及に努力し、童謠敎育の祖始者と言はれてゐる。詩集「かれくさ」民謠集「朝花夜花」詩集「都會と田園」民謠集「別後」童謠集「十五夜お月さん」の外に「愛の歌」「童謠作法問答」「童謠の新研究」の著をなし、少年少女雜誌「金の船」を編輯してゐる。こゝ數年來童謠童話風のもの日を逐ふて盛になるにつれ、氏の努力も大に認められるに至り、その作物の歡迎されるは勿論のこと近時は至るところに講演を依賴されて寸暇ない。氏の作風はかの極端に新らしい無形式のものでは無くて、淸新自由を强調すると同時に、リズミカルなもので無ければならぬと主張してゐる。

汐涸れ濱

べん〳〵草は
どこまで
のびる。
湊の雨
パラパラ
雨だ。
汐涸れ濱の
小笹に
たまれ
小笹も搖れろ
湊も
搖れろ。

現住所 東京市外田端三五一齋藤邸內

野口小惠　ノグチショウケイ（畫）

名は郁子。明治十一年一月麴町に生れた。閨秀南畫家なる母野口小蘋に就いて學び、十四歲の時初めて日本美術協會に出品して好評を博し、爾來諸所の展覽會に出して屢々褒賞を得、日本美術協會日本畫會の會員となつた。門下に一の井茂子、小菅かつ子、西村滿代子等十數名がある。もと小室翠雲畫伯の夫人であつたが故あつて離別したのである。

現住所　東京市麴町區內幸町一丁目五

故野口小蘋　ノグチショウヒン（畫）

名は親子。弘化四年一月大阪に生れた。阿波の人。醫師松村春岱の女、文久三年京都に出て日根對山の門に入り、南畫を學び明治四年東京に出て畫を以て業とした。六年皇后陛下御寢殿の門の屛障、御用花卉八葉を描き、二十二年華族女學校教授となり、二十六年病の爲に辭職した。爾來內國勸業博覽會、日本美術繪畫展覽會等の審査員となり、三十四年日本美術協會展覽會へ「秋草」を出して金牌を得、又皇后陛下の御用品となつた。其他宮內省御用を拜命したること頗る多く、文展では第一回から第三回まで日本畫部審査員となり、又米國コロンブス博覽會及び巴里萬國博覽會等に出畫して賞を得た。三十五年常宮周宮兩內親王御用便を拜し、四十二年に至つて之を辭した。晩年には御大禮に際して「悠紀の御屛風」揮毫の命を蒙り、又鄕里阿波國より、献上すべき阿波鳴門、及び小松島の屛風を描いた。その畫は穩健着實の筆致を以て推され遂に帝國技藝員に擧げられるに至つた。女史はその畫筆に於て一世の名あるばかりでなく女子としての諸藝にも通じ、又性質頗謹嚴であつて藝術家には時にありがちな性行上の非難は決してない。又意志が强固であつて一時南畫衰頽の時に立つても屹然として時流に染まないでその頽勢挽回に力を盡した。大正六年二月十二日病歿した。年七十一。野口成素に嫁して女子小惠を擧げた。小惠も又南畫の名手として定評がある。嘗て小室翠雲氏の妻となつたこともある。

故野口寧齋　ノグチネイサイ（漢詩）

通稱は一太郎、寧齋はその號である。肥前諫早の人有名なる漢學者野口松陽の遺子で漢詩に長じ森槐南博士社中で儁秀第一と言はれ、斯壇の鬼才と稱せられた。壯年の頃より病床に呻吟したが曾て吟詠を絕つたことが無い。雜誌「百花欄」を發行して自ら編輯の局に當り、病苦と鬪ひながら漢詩のために力を盡したのは、俳壇に於ける正岡子規を想はせる。明治三十八年五月十二日腦溢血のために歿した。年僅かに三十九。一說に謀殺の厄に遭つたとも言はれてゐる。京大教授の島文學博士は實に氏の令弟である。寧齋は性質狷介で人を容れなかつたので、往々人の誤解を招いたが、實は義心に厚く同情に富める人であつた。其詩は七古七律が最も長じてゐた。

送二栗田鶴渚歸一備後一次韻

雨行堠樹綠葱蘢、　此去郎當馬鐸空、
家在二杜鵑山下一住、　一聲々裡月冥濛、

即事

揷秧時節午鳩鳴、　箔上春蠶繭欲レ成、
社鼓暄闐雲罨靄、　半村禱レ雨半村晴、

哭二森麟兒一

玉樓先要二玉麟兒一、　獨角才名天已知、
夙慧當時徵二不壽一、　啼聲第一似二唔咿一

青山先生見レ招、　弍偶不レ在レ家、
歸後賦レ此擬レ呈、　併寄二種竹道人一

無レ端神往野塘東、　簾捲澗聲雲氣中、
罨畫春山澹レ于レ客、　駒留橋畔雨濛々、

除夕祭詩龕雅集次韻贈二靑崖山人一

拔レ劍高歌氣未レ銷、　直當二一飮罄二千瓢一、
送窮文就呵々笑、　滿眼東風是隔霄、

父松陽の作も多くあるが左に一首を擧げて置く

入二上野國界一蠶事甚盛、　野口松陽

陰々桑柘日斜時、　伊軋聲中下馬遲、
上野眞成二蠶子一國、　無レ村無レ戶不繅絲、

故野口幽谷　ノグチユウコク（畫）

通稱巳之助。南宗畫家椿椿山門下の逸足であり、人となり誠實敦厚、畫は花鳥を最もよくし、筆致渾厚頗る品致がある。屢々共進會の審査員となり晩年遂に帝室技藝員となつた。明治三十一年六月年七十四歳で病歿した。門下に益頭峻南、松林桂月、松林雪貞、太田南岳等の峻才がある。

野口米次郎　ノグチヨネジロウ（詩）

歐米に於てはヨネ・ノグチとして知られてゐる。明治八年十二月八日尾張に生れた。慶應義塾を半途で退學、十八歳の時米大陸に放浪し詩人ホーキン・ミラーの山莊に數年居て詩名をあげた。英詩集處女作

'Se.n and uns.en"　及び出世作

"From the E.stern"　の外英語の著作十數種ある。日本にはあまり知られぬが英詩集數卷歐米の詩壇に於て可なり高評を博したものである。先年英國の大學に「日本詩歌論」を講じて好評を博しあまねく彼地の詩人や文學者と交を結んで歸朝した。邦文の著書「日本詩歌論」「歐洲文壇印象記」「二重國籍者の詩」「林檎一つ落つ」「沈默の血汐」「野口米次郎詩論」「敵を愛せ」等の外新聞雜誌に投稿した幾多の文藝批評や日本版畫の論說がある。目下慶大教授の職にあつて傍文章を書いてゐる。日本文も思想豐富表現暢達である。大正十年英文「廣重」を東洋美術叢書の第一卷として紐育オリタリアより出版した。

現住所　東京市外中野町字原八六五

野尻抱影　ノジリホウエイ（翻）

名は正英、明治十八年五月横濱に生れ、横濱中學を經て早稲田大學英文科を卒業し、暫らく中學校に英話を講じ、後雜誌「中學生」の主幹となつた。著書にゴーリキーの「廿六人と一人」ド・ミユッセーの「戀より戀へ」ビョルソンの「フョールドの娘」ロッヂの他界にある兒の消息」等數種の翻譯及び共の他創作集がある。もと麻布中學校の英語教師。

現住所　東京府荏原郡駒澤新町

野田九浦　ノダキユウホ（畫）

名は道三。明治十二年十二月東京下谷上根岸に生れ、日本畫の巨擘寺崎廣業に學び後、大阪朝日新聞に入社して大阪に移り、北野恒富等と大正美術會を起し、大正六年秋東京に歸つた。文展へは第一回に「辻說法」を出品して直ちに二等賞を得、第五回に「佛敎東に來る」第七回に「天草四郎」第八回に「梅妃、楊貴妃」第九回に「歌壇の人々」等を出して幾度も褒狀を得、第十一回に「妙見詣」を出すに及んで遂に名譽の特選となり、大正十二年帝國美術院の審査員候補者に擬せられてあつた。氏はまた漢詩をよくし誦すべきもの少くない。

甲府雜詠

躑躅岡頭夜色幽、　酒家簾幙燭痕浮、
傷心三世豪華地、　誰譜清歌付莫愁、

間居書懷

不レ惑人間名利岐、　幽廬好此養二頑癡一、
虛名曷願誇簪紱、　眞樂惟欣接二酒巵一、
李白謫仙才豈敢、　少陵詩史志曾期、
江湖自有二天然福一、　狂湧風波官海危、

探梅

絕愛溪村幾樹梅、　雪前未レ綻雪餘開、
暗香疎影黃昏月、　人在二林逋句裡一行、

現住所　東京市下谷區上根岸一三一

野田別天樓　ノダベツテンロウ（俳）

本名は要吉、明治二年五月二十四日岡山縣邑久郡國府村大字磯上大塚に生れ小學校卒業後農業に從事してゐたが、二十二年大阪に出でゝ木津小學校の敎師を奉職し、三十六年五月河內國富田林中學校敎諭に轉任し、大正三年十二月攝津御影町報德實業學校に、六年四月奈良縣畝傍中學校に轉任し七年十月再び元の富田林中學校に奉職して現今に

至つた。氏は二十二年頃より月並俳句を作り、二十九年より日本新聞に投句した。三十四年頃よりは殆んど句作を廢してゐたが大正三年秋より復た句作を始め大阪の松濱青々氏の主宰してゐる俳諧雜誌「倦鳥」に折々執筆してゐる。

衣更て廬山の餘花に逮びけり
衣更てつれ〴〵顏や武藏坊
橋柱並ぶ中飛ぶ螢かな
螢籠つるす茂りの軒ばかな
麥秋の中に生れぬ日吉丸

現住所　河內國富田林町

野長瀨晩花　ノナガセバンカ（畫）

明治二十一年紀伊に生れ、初め大阪の中川蘆月に就いて日本畫を學び、後京都に出て谷口香嶠の門に入り、更に繪畫專門學校に入學して四十四年卒業した。文展へは出陳しないが京阪で五六回個人展覽會を開き、京都美術協會に「被布を着たる少女」を出して其非凡の才を認められ、大正七年一月、土田麥僊、小野竹橋、村上華岳、榊原紫峰等と國畫創作協會を起し異彩ある作を發表してゐる。

現住所　京都市岡崎別院前

信岡雄四郎　ノブオカユウシロウ（詩）

氏は東京の辯護士、備後蘆品郡萬能村の人、家世々醫を業とし、父文碩氏も亦之を業とし兼ねて翰墨の譽があつた。氏は其第四子、年甫めて十四歲大阪に遊學し、五十川認堂、菊池三溪に就いて漢籍を學び、又英數の學を修めた。氏當時既に詩に長じ蘆川漁史、水者堂主人と號し、浪華文會、浪華吟社等に入り、日柳三舟、關遂軒、土居香國の諸先輩と唱和し年十六の時歸鄉した。偶森春濤翁遊歷して福山を過ぎた。氏は其の客舍を叩いて微意するところがあつた。爾來其敎を受けて其技大に進んだ。十八年上京して東京法學校卽ち後の和佛法律學校に入り二十一年優等の成績をもつて卒業したが成年に達しないので官の試驗に應ずることが出來ない。それで每日新聞社に入つて暫く執筆した。幾もなく氏は同社の編輯主任となり兼ねて法律、部門を擔當し又嚶鳴社に入つて島田三郎田口卯吉、肥塚龍、波多野傳三郎諸氏と共に各地に遊說した。三十年日本辯護士協會の組織されし時其の評議員に推され又編輯主事となつた。三十二年法學志林の發行されし時氏は其の主筆となつた。詩才は全く天賦といふほど橫溢してゐた。

現住所　東京市麴町區內幸町一ノ五

昇曙夢　ノボリショム（評）

明治十一年七月鹿兒島縣大島郡實久村に生れた。三十六年東京駿河臺正敎神學校卒業後、獨逸語專修學校に學び、正敎神學校の講師となり、傍ら露西亞文學研究者として文壇に獨得の地位を占め、自然主義勃興の前後露西亞文學の翻譯と紹介とにつとめた。吾が國に露西亞文學の滲透したについては、氏は與つて力があつた。翻譯「六人集」「どん底」「毒の國」「決鬪」「虐げられし人々」「戰爭と平和」等の外「露西亞文學研究」「ツルゲネフ」「露國現代の思潮及文學」「露國及露國民」「露國近代文藝思想史」「トルストイ十二講」及び最近の「ロシヤ及シベリヤ」「露國文豪カクカチユア」詩集「現代露國詩人傑物集」其の他多くの著がある。尙氏は前記講師の外、陸軍敎授早大及日大の講師を兼ねてゐる。大正八年內務省囑託となり、九年と十年シベリヤを視察して歸朝した。文章は優麗典雅、しかも淸新の味が溢れ、嘗つて懸賞文に應募して一等の選に入つたほどの能文家である。片山伸氏と共に實に露文學の一大權威である。最近の評論に「詩人ベールイ」「露西亞文學の意義及特質」「ロシヤ藝術に表はれたる性慾關係の變態」「ゴーリキイと新思潮」「露國現代思想と性の問題」「勞働ロシヤとプロレタリヤ藝術」「ロシヤ近代民謠の一樣式」「革命ロシヤの文學」「研究座のかもめを見て」「ロシヤの舞踊」「ソウエートロシヤの文化政策」「ロシヤ國民性と文化問題」「近代ロシヤ文學の源泉」其他研究や紹介

數篇等を出して精力の絶大なるに人を驚かしてゐる。

現住所　東京市牛込區若松町一〇二

野村愛正　ノムラアイセイ（小）

明治二十四年八月鳥取縣岩美郡大茅村字楠城に生れ、これといふ學歴はないが大阪朝日の懸賞小説に應募して長篇「明け行く道」は一等賞を得、一躍知名の作家となつた。短篇「土の靈」の外「黒い流れ」「溺れて死んだ女」「焦土に哭く」等の作がある。「黒い流れ」は藝術と通俗との間を行きて、技巧の纖麗と結構の清新に一生面を開きたる人情小説であつて、深刻な内面的省察がある一勞作である。

現住所　東京牛込區通寺町三七

野村喜舟　ノムラキシユウ（俳）

名は喜久二、明治二十一年四月十七日石川縣金澤市鍛冶町に生れ、日清戰爭當時金澤より移つて東京に住んだ。同三十三年より東京砲兵工廠に幼年工として入職し爾來繼續して勤務中である。氏は四十二年の秋より岡本松濱氏に就いて始めて俳句を學び、同氏の俳句中絶の後は松根東洋氏の指導を受けて盛に研究をしてゐる。又渡邊水巴、岡本癖三醉、久保田傘雨、籾山柑子、小杉餘子、松浦爲王、飯田蛇笏等諸家の句風を私淑して啓發される點が少くなかつた。氏は「國民新聞」「趣味」「渋柿」「ホトヽギス」「藻の花」「俳諧雜誌」等に投稿してゐるが、其の句は「藻花集」「ホトヽギス雜詠集」等に掲載されてゐる。

掌や秋を惜しみて奈良人形
行秋や紅葉も果てゝ水車
岬畑海より霧の襲ひけり
秋風や海より吹いて荻の川
秋暑し芒へ飛べる馬の蠅
冷かや松の中にも漁家二軒

現住所　東京市小石川區金富町一九

野村素軒　ノムラソケン（詩）

通稱は素介、字は絢夫、素軒と號し、天保三年五月周防國山口に生れ、明治の初年山口藩權大參事に仕じ、後官命を奉じて海外を視察し、歸朝の後文部大丞に任じ教部大丞及大督學を兼ね、更に元老院議官となり博物局長を兼ね貴族院議員となつた。後功によつて華族に列し男爵を賜はつた。詩を巧みにする外書道に達して最も高い。現に日本書道會幹事長、書道奬勵會々頭である。

泊二西府一

未下排二妖霧一雪中君寃上　東馳西奔恨空存、
客枕一宵眠不レ得、　夢迷丞相廟邊村。

小倉官寓作

寓舍豐州閣二二冬一　寒衣孤劍奈二疎慵一、
回思一笑人間事、　昨日談レ兵今話レ農、
我舊藩諸子、以二元治甲子一、多殉二難于京師一、距二今玆丙子一實十有三年、諸友胥謀設二祭東山墓前一、追二懷往事一、慨然賦二三律一、

香煙裊々繞レ爐輕、　憶突二狂炎一入二禁城一、
萬死嘗期衂二鋒鏑一、　餘生何料列二簪纓一、
人如二霜葉一多凋落、　事似二風雲一幾變更、
靈若有レ知來饗レ薦、　蘋繁亦是舊同盟、
玉碎瓦全如二命何一、　憐レ他夙志遂蹉跎、
中興事業人千古、　半世交游夢一過、
海內風塵踪漸變、　洛邊山水感偏多、
高樓記否曾呼レ酒、　慷慨同聞擊二筑歌一、

三使二筑前一

春來入レ筑已三回、　自咲徒勞志未レ灰、
殘荻枯楊秋正老、　扁舟重繫霸家臺、

（書道傳統）

市河米菴―山內香雪―中村梧竹
小島成齋―野村素軒

故野村文學　ノムラブンキヨ（畫）

安政元年京都長刀鉾町に生れ、幼名を松太郎といひ、文學と號し、別に石泉と號した。慶應三年年

僅かに十四歳の時浮世繪派の梅川東學に學び、明治二年四條派の大家鹽川文麟及び、圓山派の名手森寛齋に就いて學んだ。明治十三年京都府畫學校に出仕し二十二年東京に移つて學習院教授となつた。二十九年「蓬萊圖」を東宮に献じ、三十一年宮中の命により、獸類十五種を畫いて振天府に献じ、三十三年臺灣總督府の囑託によつて新高山及び澎湖島の眞景を描いてこれも東宮殿下に献上した。この畫は後、東宮殿下より明治天皇に献じて貴品の一に加へられた。四十一年第二回文展より第四回まで日本畫部審査員となつた。

大作には「耶馬溪」「嚴島」の屏風があり、文展には第一回に「月下溪流」を出して三等賞を得、第二回に「水車」を出した。四十四年一月二十四日病歿した。年五十八。其養子に美術協會員野村雪江があり、門下にはこれも美術協會派の名手阿出川眞水等がある。

故野村隈畔 ノムラワイハン（評）

明治十七年福島縣伊達郡半田村といふ有名な金銀の產地に生れた。哲學の研究を目的として上京し英獨語を學び雜誌「人性」を編輯し「生命學會」の幹事をした。著書には『ベルグソンと現代思潮』「春秋の人々」「自我の研究」「自我を越えて」等がある。

大正九年頃筆禍にかゝつて森戸問題の二の舞をやり後某婦人と關係して共に水中に投じて死んだ。

ハの部

灰野庄平 ハイノショウヘイ（劇）

明治二十年四月新潟縣刈羽郡吉井村に生れた。東京帝國大學美學科を卒業し五年間大學院に在つて研究した。よく演劇の論文を演藝誌上に載せてゐる。「犬の瞳」「巨人始皇の一生」「芭蕉と遊女」等の脚本の外數十篇の劇評がある。近頃出した感想集「未知國への憧憬」は複雜な人生の問題が色

色な形式となつて表現されてゐるし、劇曲「蟬丸と博雅」「としより」「野心家」等はいろ〳〵の意味で人の注意を惹いてゐる。現に劇作劇評の外丸見屋商店員としての仕事に從つてゐる。

現住所 東京小石川區丸山町一八

故芳賀眞咲 ハガマサキ（國）

福井藩士で天保十四年に生れ、歌を橘曙覽に學び又平田鐵胤の門に入つて皇學を修め、新潟宮城二縣に仕官し、後鹽釜志波彦神社の宮司と爲りて黄金神社祠官を兼ね、明治二十四年內務省に入つて神社課長となつた。後近江國多賀神社宮司となりて後攝津の湊川神社に轉じ、從六位に叙せられ、三十九年五月病歿した。年六十六。「語法指南」「土佐日記讀本」「松島道案內」等の著書がある。文學博士芳賀矢一氏は實に其實子である。

芳賀矢一 ハガヤイチ（國）

慶應三年五月十四日福井市に生れ、同地並に東京の富士前小學校を經て第一高等學校に入り、明治二十五年七月東京帝國大學國文科を卒業し、第一高等學校並に東京高等師範學校の教授となり、大學助教授を兼ねて得意の文學史や文法等を講じ、同三十三年獨逸に留學してベルリン大學に學び、更に英佛諸國を遊歷して三十五年歸朝した。爾來東京帝國大學文科教授として頗る令名あつたが、大正十一年三月職を辭してその名譽教授に推され帝國學士院會員及び東宮御用掛國學院大學長の職にある。著書に「世界文學者年表」「國民性十論」「日本人」「月雪花考証」「今昔物語集」「筆のまにまに」「筆にまかせて」「國文學史十講」「國文學史概論」「國文學歷代選」「日本人名辭書」等甚だ多く、教科書も亦廣く行はれてゐる。近年眼疾を憂へて兩眼盲せんとしたるも、漸く一眼は助かつた。氏の父は眞咲と言つて多賀神社湊川神社等の宮司として令名のあつた人である。氏の國學者としての素養は少時この父翁に負ふところ少く無い。文學博士。

現住所　東京市小石川區音羽町三ノ二三

故萩野由之　ハギノヨシユキ（國）

父は肇慶、萬延元年四月十七日佐渡國雜太郡相川町にその長子として生れた。和莽と號し幼にして父を喪ひ祖父直角に養はれた。夙に漢學を圓山溟北、北岡南の門に受け、年十三相川縣々學助讀に擧げられた。漸く長ずるに及んで東亞興隆の志を懷き明治十三年東京に遊び、支那語學を修め、十五年東京大學文學部古典講習科に入つて、卒業後元老院書記生となり德川制度の編纂に與つた。二十三年貴族院に出仕し、古代法制の取調に從事し二十五年學習院教授に任じ、從七位に叙し、二十九年高等師範學校教授兼女子高等師範學校教授となつた。後東京帝國大學文科大學教授となり長く最高學府に於て得意の日本史を講じてゐたが大正十二年停年に達したので退職し名譽教授となつた。氏は史學に造詣深きの故をもつて文學博士の學位を授與されたが入木道に於ても其妙境に達し大學教官中に於て黑木欽堂横井時敬の諸氏と相並んで能書の聞え高かつた。著書に「江戸幕府職官考」「戸籍制度」「司法制度」「日本歷史」「日本歷史要解」「日本歷史評林」「大日本通史」「讀史の趣味」等がある。大正十三年一月三十一日腎臟痲痺のため逝去した。

東宮冊妃恭賦

聰明太子攬二乾綱一、　清淑王妃坤德昌、
鸞鶴和鳴五雲裏、　黎元此日仰二重光一、

現住所　東京市本郷區駒込千駄木林町五

萩原恭次郎　ハギワラキヨウジロウ（詩）

明治三十二年五月二十三日群馬縣勢多郡南橋村日輪寺に生れ、幼より文學に志し詩作をなした。大正十一年の頃東京に出て、「炬火」「新詩人」「種蒔く人」「東京日々新聞」「東京朝日新聞」等に多くの詩作を出し、一九一九年版の詩集に推薦されるに至つた。現に雜誌記者をしてゐる。

現住所　東京市本郷區駒込蓬萊町二八金坂方

萩原朔太郎　ハキワラサクタロウ（詩）

明治二十一年十一月一日前橋市北曲輪六九に生れ一時第六高等學校に入學したが中途で退學した。「月に吠えたる」の一篇を出すや、氏の詩的天分の豐かなるに驚いたる批評家は、筆を揃へて賛辭を呈した。其後詩集「青猫」散文集「新らしき欲情」の外、評論「現歌壇への公開狀」散文「孤獨者の手記」等の文章及び數多の詩を「日本詩人」や「詩聖」等に發表してゐる。詩話會同人中活動をしてものは川路柳虹、佐藤惣之助、萩原朔太郎富田碎花、白鳥省吾等の諸氏があるが、萩原氏も目覺ましい活動をしたものの一人で今や象徴的乃至觀念的の渾然たる作品を示してゐる。現代詩人叢書の一編として「出した蝶を夢む」は「青猫」までの詩集に漏れた詩六十篇を收めたもので「青猫」に這入る筈であつた「蝶を夢む」「腕のある寢臺」等數篇もこれに加へられてゐるから萩原氏の詩風の一般を知るには便宜である。

題のない歌

南洋の日のやけた裸か女のやうに
夏草のしげつてゐる波止場の向ふへ
ふしぎな赤錆びた汽船がはゐつてきた
ふはふはとした雲が白くたちのぼつて
船員のすふ煙草のけむりがさびしがつてゐる。
わたしは鶏のやうに羽ばたきながら
さうして丈の高い野茨の上を飛びまはつた
あゝ雲よ船よどこに彼女は航海の碇をすてたか
ふしぎな情熱になやみながら
わたしは沈默の墓地をたづねあるいた
それはこの草むらの風に吹かれてゐる
しづかに錆びついた戀愛鳥のみいらであつた。

現住所　前橋市石川町二八

萩原羅月　ハギワララゲツ（俳）

名は芝之助、明治十七年五月横濱市に生れ、東京帝國大學國文科專科を卒業し、仙臺東華高等女學校教諭を奉職したことがある。詩文集「雪線」「俳

諧七部集通釋」「連句作法」等の外俳句、連句、長詩、小說、短歌各種の作がある。

人入れぬ大門牡丹や冷やかなり
醉心ふらりと出たる町外れ
西谷に火を食ふ爺と呼ばれけり伏してひそかに七首を拔く。

現住所 東京市小石川區竹早町一一五

橋口五葉 ハシグチゴヨウ（畫）

名は清。明治十四年十二月鹿兒島市に生れ、西洋畫の大家黑田清輝に洋畫を學び、後東京美術學校に入つて明治三十八年西洋畫科を卒業した。文展へは第一回に「羽衣」を出し四十年、東京勸業博覽會に出品して受賞し、四十四年三越吳服店懸賞廣告圖案として裝飾畫當世美人を出し當選して一等賞金千圓を得て名聲を博した。氏は裝飾畫風のものを得意とする。又浮世繪に關する研究數篇がある。

現住所 東京市赤坂區臺町七五

橋田東聲 ハシダトウセイ（歌）

名は丑吾、明治十九年十二月二十日高知縣幡名郡中筋村有岡八に生れた。大正八年より雜誌「覇王樹」を主宰して作歌と評論とを盛に公にしてゐる。氏はもと濤聲と號した。第七高等學校を經て東京帝國大學英文科に入つたが、半途で法科に轉じて大正二年卒業し、東京日々新聞、東京農業大學の講師となりまた農商務省等に勤めたが、大正八年東洋拓殖會社に入り東京本店詰となり、今はこの會社の參事となつた。歌集「地懷」及び「現代名歌選」翻譯マキアベエリーの「君主論」イブセンの「ロスメルスホルム」一等があり、近くは歌を自已の主宰せる雜誌「覇王樹」に發表する外評論に力を注いで居る。卽ち順の「山海經」と白秋の「雀の卵」「倉田百三氏の歌を評す」「長塚節氏雜感」「歌人としての正岡子規」「個性と環境」「尾山篤二郎君の月評を難ず」「短歌に於ける象徵」「偉大なる凡人子規」「吉植君の反連作連作論を難ず」「歌壇の近狀」等相當に努力のあとを示してゐる。最近出版した「自然と韻律」は氏のかゝる歌評隨筆中優れたものを採つて收めてある。著者の歌論は直ちにその人生觀自然觀宇宙觀に通じ、言々句々悉く著者の博大なる愛に依つて涵養されたものである。嚴正な峻烈なる批評の裏にすら涙ぐましく溫和な感情の彷彿するを觀るは氏の人格を遺憾なくあらはしてゐるものである。地懷は大正五年より九年まで五年間の歌數百首を一卷に纏めたものである。

硝子戸にかげさす庭の裸木の搖れこまかなり朝の目ざめに
青蚊帳に影さす庭の吳竹のそよぎ幽かに夜は闌けにけり
やゝにして山冷えを感ず溪の湯にいつか童女も來てまじりたり
大內山の青山のうへに天垂らす秋の夜空はいつくしきかも
夫人あさ子女史も歌をよくし、閨秀作家として知られてゐる。その歌に
闇深き磯曲の道に行き暮れてたゞに悲しく聞く波の音

現住所 東京府下大森八景坂二二九四

橋爪惠 ハシヅメメグミ（文）

本名は健、明治二十九年八月十七日長野縣松本市片端に生れ、高等學校を經て大正十一年三月東京帝國大學醫學部藥學科を卒業し、自然科學方面に於ては「學藝」「科學知識」東京の諸新聞等に、少年少女方面では「女學生界」「令女界」「少女界」「金の船」「武俠世界」「中學生」「中學世界」其他の雜誌に、婦人雜誌方面では「主婦の友」「趣味の婦人」「婦人倶樂部」「家庭雜誌」其他に寄稿してゐる。著書には「家庭藥用法」を出してゐる。

現住所 東京市小石川區原町一〇

橋本永邦 ハシモトエイホウ（畫）

長松滿二小燈一、來宿山中寺、雪落忽驚眠、
一聲孤鶴到。

紙鯉

難下向二江湖一蹴中白濤上、竿頭繫日動翩々、
乘レ風至昇二青天上一、不レ讓龍門百尺高。

古驛

又向二江南一久滯遊、十年未レ上二故鄕舟一、
客窓何耐レ聞二歌曲一、暮雨蕭々古驛秋。

對レ春

把レ杯歡合一家情、坐對レ春盤酒共傾、
小醉齊翻和樂曲、不レ聞兄弟鬩レ牆聲。

現住所 京都市銀閣寺畔

故橋本雅邦 ハシモトガホウ（畫）

幼名千太郎、後長鄕と改めた。天保七年木挽町に生れ、十三歲の時勝川院狩野雅信の門に入り、勝園邦と號した。祖父伊貞は京都の人であるが、父晴園養邦は江戸に出て狩野晴川の門人となつた。氏は十四歲の時父母を失ひ狩野家に養はれ、二十

名は乾、美術院同人の日本畫家。明治十九年九月東京市京橋區木挽町に生れた。明治畫壇の大家で狩野派傳統の名手である橋本雅邦の子で、父及び下村觀山に就いて幼少より畫繪を學び、諸所の展覽會に於て屢々受賞し、文展へは第一回に「諸菩薩問維摩詰」を出し。入選して三等賞を克ち得た。又再興美術院の第一回に「茶摘みの頃」第三回に「釆女の眠」第四回に「藥師」を出品し何れもその非凡の才を示し、終に同院の同人に推されるに至つた。兄橋本秀邦も有名なる畫家である。

現住所 東京市本鄕區元町一ノ三

橋本海關 ハシモトカイカン（畫）

播州明石、人麿神社下の南宗畫家であるが、夙に漢詩を好み、景物に於て最も知られてゐる。息の南畫家關雪氏も亦漢詩文を善くし「南畫の道に」の著者として有名なばかりでなく、帝展審査員として新進作家中最も重きを置かれてゐる。

宿二山中寺一

歲の時先進狩野芳崖、鍬形永勝の後を承けてその塾頭となつた。二十六歲の時獨立して既に一家を成したが當時は天下亂れて繪畫美術は顧みられぬ爲に甚だ困難を極めた。第一回繪畫共進會に「竹に鳩の圖」を出して宮內省御用品となり、二十年文部省に圖畫取調掛の設けられた時芳崖の推擧によつてその委員となり、二十二年、東京美術學校の教授となつた。三十一年、校長岡倉覺三と共に職を退き、日本美術院を創立して、專ら後進の誘掖に努め、邦畫の一新生面を拓いた。氏は實に明治に於ける狩野派畫家の巨擘で、多くの傑作を遺し、芳崖と共に、德川明治過渡期の大家である。四十年、文展日本畫部の審査委員となり、四十一年一月七十四歲の高齡をもつて本鄕龍岡町の自邸に歿した。代表的作品「十六羅漢圖」「龍虎圖」「瀟湘八景」「山水圖六面」「雲龍」「臨濟一喝圖」「白雲紅樹圖」及び御物「四季山水」等である。

其子に橋本秀邦、橋本永邦があり、養子に橋本靜水がある。又川合玉堂、下村觀山、寺崎廣業、菱田春草等は門人中の錚々たるものである。

橋本關雪 ハシモトカンセツ（畫）

名は貫一。明治十六年十月神戸市楠町に生れ、四條派の大家竹內栖鳳の門に學び、美術研精會で受賞したのを初めに、諸所で賞を得、文展へは第二回に「鐵城嶺外の宿雪」第三回に「失意」「第四回に「琵琶行」第五回に「片岡山のほとり」「異見五達磨を送る」第六回に「松下煎茗」「後醍醐天皇」等を出して褒賞を得、第七回に「遲日」第八回に「南國」「後苑」第九回に「獵」「峽江の六月」等を出して二等賞を得、第十回に「寒山拾得」「煉丹」第十一回に「倪雲林」を出すに及んで特選に推された。又大正六年十二月東京三越呉服店で個人展覽會を開き、七年一月大橋翠石等と神戸に神戸繪畫協會を起し最近支那に遊んだ。門下に高倉觀崖等がある。大正七年文展推薦となり、大正八年より帝展審査員となつた。弟渡邊楳雄は大正六年卒業の文學士で大學院に這入つた。

大正十二年大震災後京都及東京に開催された日本美術展覽會の審査員にあげられた。氏の新著「南畫への道程」には南畫は寫實主義でも印象主義でも無く表現主義であることを論じてゐる。

現住所　京都洛東銀閣寺前

橋本邦助　ハシモトクニスケ（畫）

明治畫壇の大家、狩野派傳統の名手橋本雅邦氏の息であつて、最初洋畫を學び後に日本畫家となつた。明治十七年一月栃木縣栃木町に生れ、三十六年、東京美術學校洋畫撰科を卒業し、四十四年、佛國巴里に留學した。作品は初め洋畫を畫き、文展へは第一回に「ともしび」第二回に「水のほとり」第三回に「幕間」第四回に「水鳥」「白雲」第五回に「凝視」等を出し何れも入選して好評あつたが、第七回には日本畫部に「落葉掻き」「夕月」第十一回に同じく「菊花の秋」を出し、最近には寧ろ日本畫家として知られてゐる。實弟永邦氏もまた日本畫家として美術院の同人に推され重きをなしてゐる。邦助氏は大正十三年四月滯歐記念油繪作品七十六點を東京三越階上に於て展覽したが、ミレー版が過半を占めてゐるので何れも輕妙なスケツチ類であつて、セーヌ河畔の諸作や市街に人を待つ馬車海景や靜物等に優に一家をなしてゐるとの好評を博した。

現住所　東京市下谷區花園町一六

橋本靜水　ハシモトセイスイ（畫）

名は宗次郎、美術院同人の日本畫家、嘗て正素と號したことがある。明治九年一月尾道市久保町に生れ、繪畫に志して上京し、狩野派の大家、橋本雅邦に就いて學び遂にその養子となり、文展第五回に「一休」を出し入選して褒狀を得た。院展へは第一回に「白砂青松」第二回に山茶花、櫻桃第三回に「あやはとり、くれはとり」を出して其筆の非凡なるを認められ終に同人に推され、第四回に「草花」を出した。大正十二年の秋震災後の院展には「蓮池」を出品して其努力を示してゐる。

現住所　東京市本郷區龍岡町三三

橋本秀邦　ハシモトシユウホウ（畫）

名は得、雅邦の三男、十七歳父の別號を襲いで木雁齋と號す。明治十四年七月五日東京市京橋區采女町に生れた。天資畫才に長じ、夙に父に就いて其の畫法を學び、更に美術院に入りて精勵怠らず斯道の蘊奥を究め、殊に山水、人物を能する。爾來博覽會、共進會、其他諸種展覽會に出品して屢々優賞を受け、名聲嘖々たるものがある。帝國繪畫協會の會員で、畫道の外佛敎を研究し謠曲を嗜む、今は美術院に友となつてゐる。

現住所　東京市本郷區龍岡町三三

長谷川榮作　ハセガワエイサク（彫）

明治二十三年十一月東京淺草に生れた。十六歳の時から斯道の大家吉田芳門の門に入り、彫刻を學び、文展へは第八回に「夢」第九回に「春よ永劫なれ」を出して三等賞を得、第十回に「S氏の象」第十一回に「引接」を出して特選の首席となつた。親戚の關係があるので外に叔父乃木大將のために作したものが少くないが「乃木大將夫妻の木彫」の作が最も聞えてゐる。大正十二年大震災後京都東京に於て開催の日本美術展覽會の審査員となつた。梅檀社同人である。

現住所　東京府下南品川宿御殿町七三三

長谷川時雨　ハセガワシグレ（小）

本名は康子。明治十二年十月東京日本橋區通油町に生れ裕福の家の令嬢であつたが後零落して筆と藝で生活しなければならぬ境遇となつた。源泉小學校卒業の外學歴はないが坪内博士に師事した。小説や脚本の作が多く「さくら吹雪」の一篇は屢々劇に上つた。先年舞踊研究會を開き尾上菊五郎と「狂言座」を勗めたがあまり振はなかつたやうだ。文章は意氣で江戸ッ子肌のところがあつて巧みなものである。劇曲「海潮音」「足利尊氏」「丁字亂水」舞踊曲「江島生島」「全華」の外「情熱

の女」「名婦傳」等の著がある。
「名婦傳」には引田部の赤猪子、大葉子、千日女、御匣殿、伊賀局、慧春尼、津田勝子、芳春夫人松子、瓜生岩子、奥村五百子、等の傳記を大變面白く書いてゐる。妹春子氏が神奈川縣在鶴見の花香庵をやつてゐるので女史はこゝに寓してゐる。
現住所　東京市小石川區上富坂三九

長谷川春草　ハセガワシユンソウ（俳）

名は金之助、明治二十二年八月十九日東京市芝區柴井町に生れ、俳句の研究をなし、大正七年頃より俳書堂に入社した。氏は幼時黑澤庄次郎氏に就いて俳句を知り、宮田稜々、寺田寅彦諸氏と相識る機會を得て共に句作を試み、俳誌「とくさ」を發行してゐる大野一星と相知り盛に句を作つた。後河井醉茗横瀨夜雨等の指導を受けて新體詩を作り、同人と文藝雜誌「すみれ」を出した。その誌友會を上野韻松亭で開いた時北原白秋氏と同し、爾來渡邊水巴氏の指導を受けて俳句を作つてゐる。其の後「藻の花」の復活に關係して同人諸氏と相知り、上川井梨葉氏との關係によつて「俳諧雜誌」の選者となつた。氏の句は「ホトトギス」「智仁勇」「藻の花」「俳諧雜誌」古くは「とくさ」等に投稿され、「藻花集」に掲載されてゐる。
此の月や水仙を剪るは翌日の事
現住所　東京市芝區愛宕下町二ノ二

長谷川天溪　ハセガワテンケイ（評）

本名は誠也、明治九年十二月三日新潟縣刈羽郡高濱町に生れ柏崎町に生育し三十年六月に東京專門學校の文科を卒業して博文館に入り一時その編輯部長となつた。自然主義勃興當時太陽の文藝欄に論陣を張り、作家田山花袋、島崎藤村等と呼應して盛に氣を吐いた。
「現實暴露の悲哀」一篇は一世を動かして青年の歸趨するところとなつた。登張竹風との議論も隨分猛烈であつた。四十三年洋行して大正二年歸朝餘程穩健の評論家となつたが一時は可なり激烈な書きぶりであつた。「文藝觀」「アリストトール」「自然主義」「萬年筆」「歐洲文藝思潮」等の著がある。大震災の後博文館の大改造に際會して大橋氏自ら編輯に當ることになつたから氏は閑地に就くやうになつた。
現住所　荏原郡上大崎町字今里七八九

長谷川如是閑　ハセガワニヨゼカン（評論）

名は萬次郎、明治八年十一月三十日東京市深川區に生れ、中央大學を卒業して「日本新聞」「日本及日本人」「大阪朝日新聞」の記者となつた。「額の男」「倫敦」其の他多くの創作の外、文藝思想の評論が多い。近く發表したものには小說「虎から豹へ」「その日」「萬人風呂」戲曲「喰違ひ」感想「批評に就て」評論「政治と文藝の交叉點」「消費體系の國家意識とその崩壞」隨筆に「亡友四氏」等があつて、氏の主宰してゐる雜誌「我等」及び「解放」「新潮」「中央公論」其他に寄稿してゐる。「象やの桑さん」「犬、猫、人間」は氏の最新著で評判高かつた。
現住所　東京市外東中野九三七

長谷川昇　ハセガワノボル（畫）

北海道の人。東京美術學校に入つて、明治四十三年西洋畫科を卒業し、後歐洲に遊學して大正四年歸朝した。文展へは第二回に「蝶々」第四回に「白粉の女」を出して褒狀を得、第五回に「裸體」を出し、大正四年美術院同人となり、其第二回に「オペラの踊子」「オランジュ持てる女」第三回に「島の水汲み」「舞妓」第四回に「七夕に髪を洗ふ」「河畔」等を出し、大正九年歐洲に遊び、大正十三年四月春陽會出品の「練習」は斯界の評判となつた。
現住所　東京市外目黑三九九

故長谷川二葉亭　ハセガワフタバテイ（小）

尾張藩士長谷川吉數の息、本名は辰之助、四迷又は二葉亭四迷と號した。文久二年十月江戸尾張藩

邸に生れた。幼時藩立小學校に入り、八歳の時佛人について佛語を學び、十一歳の時父の任官してゐる島根縣に赴いて五年間こゝに留つた。十五歳の時上京して漢學を修め、明治四年五月外國語學校に入り露語を學んだ。在學四年同校の東京商業學校に合併される時其露語科に入り、十九年一月退學した。爾來翻譯著作に從事し傍ら英國宣教師ダンバー及米人イーストレーキ等について英語を學び、以て文學哲學の研究に沈潛した。二十二年八月內閣官報局に出仕し英露新聞の翻譯を掌つたが三十年辭職した。三十一年海軍編輯書記に任じ翌年更に東京外國語學校教授に任じられたが三十五年五月辭職して十月北京に入り、京師警務學堂の提調代理を囑せられ、滯留中淸語を修め、一年の後歸朝して大阪朝日新聞の聘に應じた。これ三十七年の春であつた。これより氏は東京に在住して大阪東京の朝日新聞文藝欄に筆を揮ひ異彩を放つた。氏は明治十九年に小說「うき雲」を著して文名籍甚たるほか露國文學に精通して之を翻譯するもの皆好評あつた。「其面影」「平凡」等何れも新聞に揭載せられ世人の稱揚を博した。四十一年六月朝日新聞特派員として露都に赴き神經衰弱症のため長く苦しみ、翌年五月歸朝の途に就いたが同月十日船中に逝いた。享年四十八。氏は小說家を以て有名であつたが、寧ろ政治に志を有してゐたから、平居人に對して文學や小說を語るは好まなかつた。坪內逍遙嘗て「小說神髓」を著して小說の革新を主張し從來の勸善懲惡主義のものを排し「當世書生氣質」を出して其の範を示したが、博士の理想はつまり四迷の「うき雲」によつてよりよき範を垂れられたとさへ言はれた。或る人は氏を評して紅葉よりも漱石よりも勝れてよい日本の作家は長谷川二葉亭だと言つてゐる。性頗る犬を愛して、讀書創作して倦怠を覺えれば庭に出でゝ犬と戲れ又筆を執つて外出散步などを好まなかつた。晩年神經衰弱を病んだのも過度の勉强の結果である。二葉亭四迷はクタバツテシメへといふ意味である。全集三卷ある。

長谷川己之吉　ハセガワミノキチ（詩）

明治二十七年三月新潟縣出雲崎町に生れ、銀行員生活を長くやつてゐたが大正五年以來諸所を漂浪したる後「黑潮」編輯部に入り、大正七年玄文社には入つたが十一年十月これを辭し。詩や評論を盛に書いてゐる。詩の雜誌「詩聖」には殆ど每月のやうに詩を寄せ、「新演藝」や「劇と評論」等には「舞臺協會の生命の冠」「父の心配」の批判「行亭雜記」等を書いた。行亭主人は氏の號である。

現住所　東京市芝區高輪町六番地

長谷川亮三　ハセガワリヨウゾウ（文）

明治二十七年十月信州上水內郡長濱村に生れ、大正六年早稻田大學政治經濟科を卒業したる後、一年ばかり勸業月報社に勤めた。氏は現に主宰する雜誌は無いが「早稻田文學」「淑女畫報」、「中學世界」「講談雜誌」に主として寄稿してゐる。著書には小唄集「かたみ草」といふのがある。氏は尙ほ俳句をよくし歌も作つてゐる。從つて氏の交友も廣く生田蝶介、川路柳虹、鈴木泉三郎、草川信、白石實三、水野葉舟、須藤鐘一等各種の方面の人である。

現住所　信州上水內郡長沼

長谷川零餘子　ハセガワレイヨシ（俳）

本名は諧三、明治十九年五月二十三日群馬縣多野郡鬼石町に生れ、一時岐阜縣大垣に在り後歸鄉して學校に入り、更に三十年東京に上つて帝國大學醫科大學藥學科を專攻して長谷川家の養子となつた。三十五年頃より句作に耽り、寒川鼠骨、河東碧梧桐、內藤鳴雪等の諸家に添削を乞ふてゐたが四十年前後はその三昧境に入つたと稱せられてゐる。嘗て「東京日々新聞」の選者となつたことがあるが、後「ホトトギス」の選者となりまた同社々員として編輯に從事した。著作には「俳句歲事記」「新註俳人の手紙」「俳句と其の作り方」「俳

句の解し方」「大正最新一萬句選」「自然に避難して」「近代俳句史論」等がある。「近代俳句史論は其の企圖から言へば古句研究のプロダクトとして又俳壇の評論として注意される。全部では八卷あるが、これは芭蕉時代より明治大正に至るまでの俳壇を歴史的に評論しようといふのである。夫人かな子女史も俳句に造詣が深いので名高い。

橋裏や春を夕べの屋形船。
筆藥を習ひ初めしが日永から。
行く春や木々蘖えて花の中。
夏近き駱駝の脊の二峯かな。

現住所　東京府下淀橋町柏木九四四

故畠山　健　ハタケヤマケン（國）

越後猿橋村の人、父は巖と言つて國學者であつた。家世々神官であつたゝめである。氏夙に伊勢神宮教院に入り、和漢の學を修め、のち上京して皇典講究所に學び、明治十八年業を卒へて其講師と爲る。爾來廿有餘年その職に在り、其間皇典講究所は組織を變更して國學院大學と改稱した。氏はまた高等師範學校、早稲田大學、學習院女子部に教授し從五位に叙せられた。氏は古典に通じ最も萬葉の解釋に心力を盡し能く一機軸を出した。又常に和歌を詠じ多作をもつて有名であつた。四十五年六月二十五日病歿し院關係者は大層これを惜しんだ。享年五十五。

畑耕一　ハタコウイチ（記者）

明治二十三年五月十日廣島市堀川町五に生れ、大阪高等商業學校豫科を卒業し、第八高等學校工科に暫く在學の後轉じて第一高等學校文科に入り、更に東京帝國大學英文科に入つて大正七年卒業した。爾來東京日々新聞學藝部記者となり、長篇小說「映さぬ究」を婦人畫報」に書き、短篇の外劇評、童話、美術評、文藝評論を東京日々新聞其他に發表し、また毎月「戲場壁談義」を「明星」誌上に書き續けてゐる。

現住所　東京小石川區宮下町七

羽田子雲　ハタシウン（畫）

東京築地寶林寺の住職、名は專讓、子雲はその號天保六年三月十五日に生れた。幼より書畫を好み岡本秋暉を師として花鳥を學んだ。爾後山川草木虫魚鳥獸等古人の粉本に就いて研磨すること多年明治六年勅を奉じて花鳥を圖し、翌年水墨山水を圖し、八年に四季花鳥の圖各一幅を揮毫して叙覽に供し金若干を賜はつた。後之を本山の學校に納めた。十四年自畫百餘幅を青松寺に陳列して縱覽せしめた。十六年又芝高野氏の別業に於てした。氏嘗て蓄鬚を剃つて筆を製し試に揮毫したのに大に意に適する。爾來此筆を以て畫するもの頗多い。後その一千幅會を開かうとしたが母の病にあつて果さなかつた。こゝに於て知友相謀つて銅版を以て其畫を寫し一小冊子となしてこれを公にした。氏は又曾て其繪畫を英國女皇陛下に贈呈し、明治三十二年十二月同宮內長官を經て感謝狀を贈られた。近來其の消息を詳にしない。

以前住所　東京市京橋區築地三ノ九八

畑仙齡　ハタセンレイ（畫）

名は經長、元禁裡北面侍從四位網之の男で字は子益、別に半象史と號す。慶應元年四月京都に生れ北宗大家鈴木百年に師事して鈴木派を修め、殊に山水、人物を能くし、明治三十年富山縣美術工藝學校教頭に任ぜられ同三十五年辭して專ら研究に從事し、爾來日本美術協會、日本畫會に於て銀銅牌を受け、巴里博覽會に出品して二等賞を得、其他御用品となること數十回、御前揮毫の榮を蒙ること數回に及んだ。帝國繪畫協會の會員で日本美術協會の委員、日本畫會の幹事である、現に東京市麴町一丁目一番地に住す。畫道の外、能樂を好む、明治四十四年淸國各地を歴遊した。餘技として氏は漢詩を善くする。

過柳橋有作

罷畫樓臺春似煙、　鶯花此處最鮮妍、
柳翁去後無人管、　花媚鶯嬌四十年、

代レ人寄校書某
鄉有二雙親一兼二伯叔一、　知二卿胸貯一愁千斛一、
縱然身在二章臺邊一、　清節勿レ輸雪中竹、
現住所　東京市麴町一丁目一

秦　豊吉　ハタトヨキチ（譯）

明治二十五年一月東京日本橋に生れた。漱石の門人で東京帝國大學法科大學在學中「エルテルの悲しみ」「アナトオル情話集」の翻譯の外文藝演劇に關する評論がある。漱石も獨逸語でわからぬものは氏に問ふたといふやうにある雜誌に書いてあつた。頭腦明晰新進才人の一人である。右の外「馭者ヘンシエル」等の著書がある。歐米に留學中であつたが歸朝後三菱合資會社員を勤めてゐる。

現住所東京市

畑　正吉　ハタマサキチ（彫）

明治十五年二月富山縣高岡市に生れ、後東京美術學校に入つて明治三十九年に彫刻科を卒業し、四十年農商務省練習生として巴里に遊學し、四十三年歸朝した。文展へは第五回に「歳三十」第六回に「淵」第七回に「某肖像」第八回に「日氏薄肉肖像」「朝」第九回に「デニソン氏胸像」「其の歳」第十回に「老人薄肉」第十一回に「去邪」を出品した。又別に「大隈侯薄肉肖像」「板垣伯銅像」等の作がある。尚東京美術學校囑託であり、大阪造幣局彫刻技術顧問となつてゐる。

現住所　東京市本郷區駒込千駄木町五七

故八田知紀　ハツタトモノリ（歌）

通稱は喜左衛門、桃岡と號す。鹿兒島藩士であるが京都の留守居下役を命ぜられ、後廣數御用人として近衛家の貞姫に仕へた。歌道を桂園香川景樹に就いて學び、熊谷直好木下幸文等と名を等しうした。著書に「忍草」「小門汐干」「都鳥集」「白雲日記」「桃岡雜誌」「桃岡家訓」等がある。明治六年九月二日年七十五で病歿した。吉野山の歌は

最も人口に膾炙し、御歌所長官高崎正風男稅所敦子、黑田清綱等の名歌人は實に氏の門人である。

吉野山霞の奥は知らねども見ゆる限りは櫻なりけり

橘の匂夜深き手枕に昔をかけぬ人や無からん

露ならぬ酒をば千世の命にてかざすばかりの白菊の花

出づる日の影までそむる心地して峯に晴れ行く村時雨かな

（略統）

香川黃中―香川景樹―
- 熊谷直好
- 木下幸文―高崎正風
- 八田知紀―稅所敦子
- 渡忠秋―黑田清綱
- 僧亞元

服部宇之吉　ハツトリウノキチ（漢）

號は隨軒、福島縣二本松藩士服部藤八の三男で慶應三年四月三十日に生れた。明治二十三年帝國大學文科大學哲學科を卒業して文部省に出仕した。後第三高等學校教授に任じ尋いで高等師範學校教授となつた。三十年文部大臣秘書官兼文部省參事官となり更に文部省視學官高等教育會議幹事を兼ねた。後又高等師範學校教授に任じ又帝國大學文科大學助教授を兼任した。三十二年五月漢學研究のため滿四年間清國に留學したが猶教授法研究のため留學期限内に獨逸留學を命ぜられた。三十二年文科大學教授となり文學博士の學位を受け同年八月歸朝した。後清國北京政府の招聘によつて北京大學師範科教授となり四十二年二月再び文科大學教授に任じられて現に其の職に在る。大正六年六月帝國學士院會員仰付られた。其の著に論理學教科書、中等論理學其他數種ある。學識高く人格の立派な點で學生崇拜の的となつてゐるが朝鮮大

學總長に擬せられてゐる。夫人シゲは漢學者島田釣一の令妹で賢夫人の聞えがある。

無題

鳳隨天風下、暮息梧桐枝、群鴟得腐鼠、
笑汝長苦飢、擧頭望八荒、默與千秋期、
一飽亮易得、所存終不移、

現住所　東京豐多摩郡戸塚町諏訪二四五

服部耕石　ハツトリコウセキ（俳）

名は治左衞門、明治八年十一月十七日千葉縣海上郡嚶鳴村琴田に生れ、家は代々庄屋を勤め父祖また相襲いで村長となつた。氏は家庭の人が多く俳趣を解してゐたゝめに其の感化を受け十五歳頃既に作句の樂しみをもつてゐた。友人牧野望東氏が秋聲會の卯杖を編輯してゐた關係で、同會の人々とも知り合ふ機會を得、角田竹冷氏とは特に接近するを得たので其感化が大であつた。明治三十七年頃は父の主幹して居た「俳諧評論」の締輯を補けたこともある。四十二年望東大羽折亭幸亭と共に「高潮」を創刊し、大正二年一月より「日本新聞」の俳欄を擔當した。氏は「日本新聞」「報知新聞」「卯杖」「俳諧評論」等の外「高潮」に投句した。餘技として篆刻を得意とする。

數ふるや肌もあらはに蚤の跡
椎の花散るや地藏の涎かけ
冴ゆる我影を趁ひ行く橋の月
醇酒來厨裏に柚味噌揑り得つ

現住所　東京市牛込區東五軒町三五

服部擔風　ハツトリタンプウ（詩）

名は轍、慶應三年十一月十六日愛知縣海部郡彌富町字鯏浦に生れ、詩と書道とを研究して一家をなしたが未だ官職に就いたことがない。主として「隨鷗集」「文學禪」「書勢」「雅聲」等に寄稿し雅聲社發刊の「雅聲」の顧問、隨鷗集の主事、佩蘭吟社、扇城吟社、鷺洲吟社、丙辰吟社、清心吟社、氷心吟社、月夕吟社、潮聲吟社、非俗吟社、微笑吟社、薫風吟社、燈水吟社等の主宰をしてゐる。

尙福原周峰、高島逢川、野口寧齋、森川竹溪、土居皇國、高野竹隱、矢土錦山、本田種竹、津田杉南藤澤南岳等の故人の外、現存の大家永阪石埭、佐藤六石、上村賣劍、田邊松波、阪本蘋園、其他の友人を有し、律詩や古詩を得意とする。著書に「江西觀蓮集」「養痾詩紀」「丙辰詩存」「去勢遊草」等があり、謁桃山陵五言排律や乃木公祠五言古詩は傑作である。尙氏の亡父信成氏は樟園と號して和歌俳句を好くし、樟園遺稿を遺してゐる。從弟實妹長女長男次男何れも詩をよくして一家卽ち一詩社の觀がある。

新柳

燕剪　鶯梭各自工、　長條　短緒織東風、
平　橋春水圍深碧、　曲　岸桃花拂嫩紅、
怨遂　征人玉關外、　凝粧　少婦翠樓中、
輕々勿作粘泥　絮、　錦　樣年華暫　眼空、
滿樹鶯　黃卯色　天、　纖絲陌土未成綿、
修將眉譜纖千月、　學得　腰肢裊似煙、
樂府永　豐垂盡日、　風流張　緒愛當年、

韋臺　別有路傍種、　落溷名　花應共憐、

氷枕

囊服括冰水、　凉床自在安、　觸時驚淮讖、
欹處憂琅玕、　腦忘熱三伏、　夢游月廣寒、
新來　窮理巧、　實作枕　流看、　人工奪化工、
電扇自生風、　驅使阿香力、　恰成安衆功、
不看影旋轍、　只聽響霹靂、　究境豪奢　者、
用存城　市人、

簾波次韻

穀紋舒　卷坐相　仍、　樹影參　差絲更　增、
人　面別時看隱約、　燕　泥墜處　尙清澄、
蘭槽逗　月凉宜洛、　鏡　檻含風暑耐凌、
流盡　六朝只如夢、　至今丁字　怨何勝、

詩雜誌「雅聲」の今日あるは一に氏の力によるのであつて、氏は實に現今中京に於ける詩宗である。

現住所　尾張國彌富町

故服部桐園　ハツトリトウエン（歌）

女史名は磯子、江戸の人であるが十七歳の時會津藩主松平容保公の祐筆となつた。後藩士服部丈助に嫁した。會津戰爭の時籠城して奮戰の後夫丈助は遂に戰死した。女史は維新後東京に歸つて氷川町に住んで茶道歌道の師匠として世を送り黑田清綱子に就いて和歌の蘊奥を極めたが門弟に貴婦人が多い。女史は獨力で產を起すこと數萬、實家なる京橋尾張町安西重兵衞氏の娘勝子を養女とした。大正四年十二月心臟病に罹つて二十一日逝去した。葬儀は谷中瑞輪寺內正行院にかて營んだ。「服部いそ子歌集」は養子吉太郎氏の編するところである。

世の中をおもひはなれし心さへ動くばかりに
長き日をあかずなくなり鶯は花より花に枝うつりして
伊香保路や赤城くろ髮つらなりて山より山の限りなきかな

服部嘉香　ハツトリヨシカ（文）

明治十九年四月東京日本橋に生れ、愛知縣松山中學校を經て文學に志し、上京して早稻田大學に入學し英文科を卒業した。後早稻田大學に於てその得意の商業文書簡文の敎授を擔當して獨特の手腕を揮ひ、傍ら多くの詩や評論を書いた。一時「大學及大學生」の記者となつたこともあるが、今は大阪にあつて文藝に携はつてゐる。「最新商用文精義」「現代作文敎典」「書簡卓上便覽」等の著がある。

氏はまた歌を善くして、次のやうな名吟少くない。

木立より秋の風吹くむさし野の露に隣れるわが小家かな
なかうどはたいこもちよりやゝ親しき心地ぞすなる從五位醫學士
この秋は落葉が丘の片隅にいと小いさくも君とわれ住む
われとわれにあてつけをする長欠伸思ひかへせば今日も淋しゝ

何となく神を祈らんかりそめの願ひも今はをかしげの無し
淋しさはわれ一人をめあてとし死なんと思ふをんなあること
「いづこの者とも知れず」――と新聞に假埋葬の人の多きかな
現住所　東京市芝區高輪南町六

花田世大　ハナダセダイ（歌）

氏の歌は一見啄木の歌調そのまゝを模した所謂生活派の歌であつて磨かれぬ素直なものであるが却つて技巧を弄せぬ眞が讀む人の心に强い感銘を與へる「是々否々」は氏の處女歌集である。

大根の靑き髻を日暮れまで刈ねてゐたりし老いたる母よ。
聖書をば繙きながらお金でも儲かる術はなきかと思ふ。
現住所

花田比露思　ハナダヒロシ（歌）

氏は子規の流れを汲む根岸派の歌人で、帝國大學法科を卒業して大阪朝日新聞に勤め傍ら荒川吉三郎安井不空氏等の歌人と雜誌「しほさゐ」に據り得意の短歌と主義主張を絕えず發表して關西短歌壇の重鎭であつた。風丰頗る和順、しかも一見溫容のうちにも不撓の精神と自家の信念とが眉宇の間に讀める。氏の歌は萬葉の古雅な詞の中に新思想を盛つてゐたが近作の歌集「さんげ」は明治四十年一月八日以來大正九年九月に至る間の著者の作歌一千六百首ばかりを製作年月日順に網羅し排列したもので、短歌あり長歌あり旋歌あり詩があつて、そしてそこに著者自身の道德と宗敎とが生々として現はれてゐるのを見る。新刊「歌に就ての考察」も讀者を利してゐる。京大學生監となつた。

木枯しのもりにとよむに戶をあけてひそかに見たり星の鋭さ。
さびしさに明石の市路あるけどもわが思ふ子に

似る人もなし

健康勝れざる氏が上京後恢復して斯道のために奮闘されることを望んでゐる。尙大震災にあつて次のやうに歌つてゐる。

かぐ土の搖りに搖りてたけり火のあらびしなかに助かりぬれば。

三宅坂わが乘り下る電車の搖れあなやと思ひし電車の大搖れ。

現住所　京都市上京區吉田町中大路二六

花廼本聽秋　ハナノモトチヨウシユウ（俳）

姓は上田名は肇、嘉永六年二月美濃大垣に生れた。有名なる大垣藩の執政小原鉄心はその伯父である。初め大學南校に學び、後病氣の爲に學を廢して鄕里遂に京都に病を養ふ。明治十四年花の本芹舍に就いて俳諧を學び、二十三年師の歿後俳諧家元二條家の允可を得て花本の道統を襲ひ其第十一世となり、不識庵と號し別に雖小廬、又三十六峯庵、吾亦等の數號がある。二十六年芭蕉二百年忌に際して芭蕉翁頌德碑を京都通天橋畔に建設した。二十八年都十二勝句帖を輯して宮中に獻じ、乙夜の覽に入れた。俳書を天覽に供するといふことは之を以て嚆矢とする。其社を梅黃社と號し門弟數千人ある。曾て「白雲の上も御園ぞ不二の山」の句を咏じて西詩に翻譯せられ、英佛の新聞紙上に於て稱賛された。當時「鴨東新誌」「檜笠」「梅黃」の三俳誌を發行して斯道を奬勵した。其著に「俳解論語、」「月瀨紀行」「學の近道往來の杖」「俳諧汲古集」等がある。

思ふこと取り消されけり今日の月。

（略俳系）

蒼虬（加賀の人、天保十三、三、十三歿）
蕉門中興
芹舍（芹水園、花の本宗匠　明治二十三、一、二十三歿）
聽秋（上田　大垣の人）

現住所　京都市押小路通麩屋町西入る

花房雲山　ハナブサウンザン（書）

名は貫隆、明治三年五月二十五日東京市淺草區吉野町に生れた。父は舊德川家旗本知行八千六百石花房豐後守正勝といひ氏はその三男である。正勝は昌平黌の學者であつて、論孟の句讀を多く氏に授けた。氏は夙に剃髮して僧となり、日蓮宗の僧正となり、傍ら書畫漢籍を研究し、苔香會を組織し、漢籍及書道の敎授をなしてゐる。氏は揮毫の外酒杯に親んで門人既に五百餘人の多きに達してゐる。氏の詩や俳句の中には次のやうなものがある。

しほれ汗苦の坂越せば樂の關

かすまるゝ吾も伏家の主かな

榮　辱相　志方外身、　詩書　經卷樂ニ天眞一

瓢中有レ酒囊　中米、　只合下隨レ時風月親上

著書に「丙午年鑑」「渡支日記」等がある。

震災前住所　東京市本所區表町本久寺

埴原久和代　ハニハラクワヨ（畫）

甲斐國中巨摩郡源村の生れで、東京女子美術學校に洋畫を學び、大正元年、フニーザン會に入つて毎回出品し、大正五年、日本美術家協會の設立と共に入つて又毎回出陳した。其他、二科には第一回に「女の顏」第四回に「顏」、「少女」を出した。女史は埴原米國全權大使の令妹である。

現住所　東京市小石川區高田老松町四四

馬場孤蝶　ババコチヨウ（評）

明治三年十一月九日土佐に生れた。有名な政客馬場辰猪の弟。明治二十四年島崎藤村戸川秋骨等と共に明治學院を卒業して高知市の學校に敎鞭をとつてゐた。二十六年上京後日本中學に敎師となり傍藤村、透谷等と雜誌「文學界」の同人として活動した。三十九年頃から早稻田大學、慶應義塾大學等に文學を講ずる傍大陸文學の紹介者として翻譯家として文壇の一方に重きをなしてゐる。翻譯

「戰爭と平和」をはじめ雜文集「葉卷の煙」等著書頗る多い。現に著作家協會々長である。その大陸文學に造詣の深い所、客を愛し辯を好むところ文壇に其の比を見ない。故樋口一葉女史と交際深くその遺稿を纏めるのに隨分盡力した。外國文學の博覽と座談の巧妙とに於て氏は上田敏博士や內田魯庵と三幅對かも知れぬ。

「泰西名著集」「國事探偵」「戰爭と平和」イリアットの翻譯及び「近代文藝の解剖」「最近社會的文藝」及び小說「屈辱」「蜩殼町」「やどり木」「連翹」「孤蝶隨筆」等の外其の著甚だ多い。

山火

三月のねぶりもはやあかつき、
諸木精、夢路のすさびか、
今小夜更けて、山のなかはら、
赤衣のもののささばしり、
集ふと見るにひきはかれ、
伏身のさまよ、狗兒のたはむれ、
峽谷をさしてともかけり、

かけるなかばの一はねの
瞬時にかろき身の轉じ、
あやましぐらに峰のかた。
立てるや侏人の舞の姿、
手つなぎにすずろの足とり、
もろさざめきの夜風に響く、
さも興じぬるねりざまの
四たびのめぐり、手は解けぬ。
はなればなれのさて鄙振や、
身の伸び縮みをかしうも
黑ぎぬしける舞殿を
いやそそりげにとび渡る
裳裾かへり、袖のふり。
今息だはしのたゞずまひや
あしだめか、しばしのやすらひ、
また思ひ得しあそびのしなか、
嵐あはせのともばやし、
寄るよと見れば、えんえんと
あらすさまじの火焰のきほひ、
千年の熟睡も、火の山ぞ、
さは山祇のさなからに
赤猪のあらびひた向ふ、
ほこらしの方か峰のたかみ。

嶺頂しのぎのすは火柱、
おほみ神、座せる宮居に
過ぎし榮華を慕ふもだえか。
いとはやり雄のともがらは、
中空拔かむいら聲に躍り立ちては闇に突き入る。
紅焰うづまきおほゆれて、仰ぐかなたの遠の峰に天に通ひの道や覓む、
ああ狂ひ火の越すよ山嶺。

短歌には

人もやと拔ける小路のすれちがひ銀杏返しの似たる朧夜。
秋風の巷を行けば夕映のやまのかなたのいとど戀しき。

又俳句をもよくして數多く發表してゐる。

夕立や藪原に買ふお六櫛
賣る人もよき夢あれや寶船
こほろぎやね物語の十三夜
鰹船九十九洋は夕凪ぎて

現住所 東京市牛込區市ヶ谷本村町一五

故馬場不知姣齋 ババフチコウサイ（詩）

名は毅、字は致遠、宗齋と號し、失明後不知姣齋と改號した。文政十二年七月作州津山に生れた。父は簡齋と言ふ藩儒であつた。不知姣齋幼い時から才思あつて、十九歲の時江戶に遊び、鄕里の先輩昌谷精溪の門に入り更に佐藤一齋について學んだ。嘉永三年越州流の兵學を究め、切紙の傳授を受け又理方一流劍術大目錄を受け、安政二年三月藩に聘せられて洋式練兵を敎授した。のち再び東遊し箕作阮甫の塾に入つてオランダの學問をやつた。五年藩校督學と爲り寺社取次に進んだが、元治元年眼疾を憂ひて遂に全く盲した。これより仕

官を斷念して詩酒を友とし自ら娛しんだ。氏の詩は多く推敲を經ないで咄嗟句を爲し東京新聞に投稿して名聲全國に傳はつた。明治二十四年露國皇太子來遊して大津の變あつた時、氏は詩を賦して赤誠を吐露し天覽の榮を得た。博文館盲人十傑を選んだ時氏も亦その選に入つた。明治三十五年一月十一日病のために逝いた。享年七十四。著書「東遊小稿」「暗窓餘樂」「北南遊記」「州南遊記」「敢爲篇」「續敢爲篇」「訓蒙道德編」「備作人爲傳」等ある。詩は頗る平明で誰にもわかり易い方である。

濱谷白雨　ハマタニハクウ（畫）

名は榮次郎、明治十九年一月富山縣婦負郡四方町に生れ、幼より畫を好み、夙に志を立て上京して東京美術學校に入り、優秀なる學績を以て明治四十三年日本畫科を卒業し、爾來孜々として南宗派の蘊奥を究め、殊に山水を能くし、大正二年文部省美術展覽會に「夏雨」の圖を出品して褒賞を得其他諸種畫會に出品して屢々優秀を受けた。帝國繪畫協會、國民美術協會、東臺畫會の會員、畫道の外圍碁、芝居を好む。

現住所　東京府下巣鴨町一一九四

濱田廣介　ハマダヒロスケ（童）

本名は廣助、明治二十六年五月山形縣東置賜郡屋代村に生れ、米澤中學校を經て早稲田大學英文科を卒業し創作童話集「椋鳥の夢」「大將の銅像」の著及び數種の小說があり、近く發表したものに童話「投げられたる壘」「小さな樫の實」評論「詩の生命を指示して現詩壇に與ふ」等がある。現に實業の日本社に在つてその出版部員を勤めてゐる。

現住所　東京市小石川區大塚坂下町七四

濱邨藏六　ハマムラゾウロク（篆刻）

名は裕、字は有孚、通稱立平、藏六は其號、別に無咎道人、雕蟲窟主人の號がある。父大足氏國學に通じ和歌を善くした。氏は其の第二子である。幼にして怙恃を喪ひ伯父谷丸に養はれ東奥義塾に於て漢學を修めること數年、明治二十二年十月上京して篆刻を金子簑香に學んだ。簑香歿し濱村微山（大懈）に從つた。微山は其才技を奇とし養つて嗣となした。二十七年火災に遭ひ不幸傳家の古甎珍書愛幅一切烏有に歸した。氏卽ち師父を慰め一層其事業を勵んだ。此年六月枕橋八百松樓に於て襲號を披露し、五世藏六となつた。二十八年師父歿後關東關西北越北海を歷游し旅窓戲鉄を著し、二十九年より日本新聞文苑欄に鉄筆目錄を揭載した。三十一年陶製文字を創意し、三十二年十月雕蟲窟印鈒初集を著した。業務の餘暇陶器手づくね圍碁詩書等を以て快樂としてゐたが、近頃其の消息を詳にしない。

以前住所　東京向島寺島新田一七九〇

濱村米藏　ハマムラヨネゾウ（劇）

明治二十三年一月七日、東京淺草區仲町に生れ、立敎中學を卒業して早稲田大學に入り、英文科に在つて研究中故あつて中途退學をなし、歌舞伎座作者部屋に入つて見習生となつた。後に大勢新聞社の創立されたる時入社してその社會部長の要職に就いて大正八年まで勤續し、同じく十年帝國劇場の文藝部に入つて現に全部主任をなしてゐる。評論「歌舞伎劇の見方」小說「おくら」「清玄庵室」戲曲「直侍」「二つの運命」等の著書があり其他評論「長町女腹切について」小說「火遊び」等の作がある。

現住所　東京市外世田谷町羽根木一八三〇

林信一　ハヤシシンイチ（詩）

明治二十七年十二月五日大阪市西區京町堀通四丁目に生れ、歌集「粟の花」詩集「鬱憂の都市」等の著を出した。「文章倶樂部」「帆船」「日本詩人」「カナリヤ」「東京日々新聞」「時事新報」「東京朝日新聞」「讀賣新聞」等に作詩を發表する外童謠の創作もある。

現住所 東京牛込區早稲田南町二〇

故林 美雲 ハヤシビウン（彫）

東京の人。高村東雲、同光雲に師事して彫刻の技を學び後東京美術學校助教授に任じ、頗る佛像に巧みであつたが大正元年七月五十二歳で病歿した。

林 甕臣 ハヤシミカオミ（國）

氏は本居宣長翁の直門林國雄氏の孫、父は名を甕雄と云つた。弘化二年二月江戸に生れた。夙に國學を以て聞え嘗て諏訪神社、貫前神社宮司及華族女學校講師等の職に在つたが辭して後專ら著述を業とした。資性狷介赤貧洗ふがやうになつても少しも意に介せず、眼中唯國家と斯道とあるのみであつた。氏は又神道扶桑教大教正となり「眞字がきの舍」と號し、高雅體歌文に妙を得又貫之風細書の假名を能くし夙に言文一致を主張し、國學はローマ字を改良したるものを用ふるを持論とした。晩年英國公使館に聘せられて國語を教授した。「小學日本文典入門」「日本文典摘要」「俗解てにをは初學」「開發新式日本文典」「日本文典」「帝國教典」「日本實用新學」「日本新字速記法」「日本新字速記秘訣」「速記學諸流比較一覽」「國文作法秘訣」「作文教授法」「五十音發音法圖說」等である。近來の消息はよくわからぬ。

ゑだくみも筆なくへしもすみた川つゝみの花のはなさかりはも

わけ入りて見れば花なり三芳野の吉野の山の峰の白雲

以前住所 東京市牛込區市ケ谷富久町七一

林 和 ハヤシヤワラ（劇）

明治二十年八月二十八日千葉縣香取郡小見川町に生れ、文學に志して上京し早稲田大學文科に學び卒業後舊文藝協會第一期を出で、後俳優の新人守田勘彌と共に文藝座を起し、其の主事及び舞臺監督として現在に至つた。其の作には「公曉」「柳澤吉保」「江戸一代女」「惡魔日」「俠客物語」等がある。氏はドラマツルギーニ（戲曲著作術）に於て現今第一人者の稱があり、その時代物、世話物、社會劇等何れも相當の舞臺的効果を擧げてゐる。

現住所 東京市四谷區永住町二

速水御舟 ハヤミギヨシユウ（畫）

名は榮一。明治二十七年淺草區茅町に生れ、四十一年松本風湖の門に入り、大正四年今村紫紅、富取風堂、中村岳陵、牛田雞村、小茂田青樹、小山大月、黑田古鄕、岡田壺中等と赤曜會を起した。横山大觀下村觀山氏等の院展へは第一回に「近村」第二回に「山頭翠明」を出し、第四回に「洛外六題」を出してその技倆を認められ遂にその同人に推された。

現住所 東京市外大崎長者丸吉田幸三郎方

原 阿佐緒 ハラアサオ（歌）

盛岡縣出身の歌人であつて、新詩社やアラ、ギ派の閨秀歌人中夙に知られてゐる一人である。女史の歌は明るくてきれいな、そして女性特有の香氣と一種の粘着力と軟かい彈力とをもつてゐる。洗練された珠玉の語句を聯ねて詠み出すところは讀者に一種のよい感銘を與へずにはおかぬといふやうである。吾が子や友人を材料にした實生活の歌が多くある。文章も亦歌と同樣頗る暢達優麗なものであることは人の知るところである。石原純博士と共に房州保田の洋館に住んで、時に共の吟詠を示してゐる。

吾があらぬ今宵ははやく戸を閉ざし寐るらん友の姿おもほゆ。

吾よりも疾く起き出でゝ朝戸繰る吾子をたのもしみもの言ひかたり。

雪どけの水こもり流る山の根の枯草ふかくともしらに鳴り。

吾子よ汝が母吾によりてもの言はむおもかげ思ひて山道いそぐ。

現住所　千葉縣房州保田町本郷

原　月舟　ハラゲツシユウ（俳）

名は清、明治二十三年五月二十四日東京赤坂區青山南町に生れ、麻布中學校を卒業後四十一年慶應義塾大學部に入り、大正二年理財科を出た。直ちに神奈川縣川崎町にある東京電氣株式會社工業部に入社し、大正七年八月病氣のために休職となつた。氏は中學時代より句作に興味を有し、中央新聞に投稿して小林蹴月氏の選を受け、慶應に在學中は高田瓜鯖氏等と相知り新傾向の句を盛に作つたものである。後長谷川零餘子氏と相知るに及んで爾來松根東洋城氏の選せる國民新聞に投稿し、これより盛んに多作を試み一ケ月千句以上を作ること珍らしからざるに至つた。四十三年六月俳誌「朝虹」の選者となり、三田俳句會へは豫科二年頃より加はつた。四十五年七月より高濱虛子氏の俳句に共鳴を感じ「ホトヽギス」に投稿するやうになつた。大正三年九月同誌選者の一人となり、大正六年五月より「時事新報」の選句を擔當し、大正七年マツダ俳句集を選輯した。又寫生文にも力を入れ、創作にも筆を染めて「二人の不良少年」を發表した。氏の句は「ホトヽギス雜詠集」「マツダ俳句集」其他に蒐錄されてゐる。月舟全集は七百餘頁の大部なものであつて、氏の俳論と俳句とを集めたものである。氏は弓術謠曲等に嗜好があり、大陸文學の研究にも興味をもつてゐた。

月舟も百人町の豪家かな
鳥追ひや千住通ひの馬車の中
浪追うて鷗春立つ干潟かな
春曉や覇府には狹きこの山河
清水や尙鶯の春夕
麗かに汲めば水漏る手桶かな

故原　在泉　ハラザイセン（畫）

有名なる京都の日本畫家。松壽と號した。畫を父在照畫伯に學んで一家をなし、明治十三年京都府畫學校に出仕し、明治十五年內國繪畫共進會に出品して受賞以來、各種の展覽會に出品して屢々賞を得、晩年には明治天皇御大喪の繪卷物を畫き、又他に宮中の御用を拜命したことも屢々である。京都畫壇の老手とされたが、大正五年二月年六十八で病歿した。

原　石鼎　ハラセキテイ（俳）

ホトヽギス派高濱虛子の高門であつて、同誌重鎭の一人であるのみならず、別に俳誌「鹿火屋」を發行して獨自の道を開いてゐる。句作の指導が深切なので悅服して居るものが少くない。大阪每日新聞の選者である。

草原に月はたゞある夜長かな

現住所　東京市麻布區龍土町五四

原田謙次　ハラダケンジ（文）

明治二十六年八月長崎市に生れ、第一高等學校文科に入學したが思ふところあつて中途退學し、外國語學校伊語專修科を修業し、更に早稲田大學に入つて英文科を卒業した。著書には長編小說「生の凱歌」創作集「鹹念佛」翻譯ダヌンツイヨの「ジョコンダ」及び「ダヌンツイヨ詩集」等がある。氏は歌をよくし朗讀法にも長じて有名である。

現住所　東京府下巢鴨宮仲二六七五ノ二

故原田直次郎　ハラダナホジロウ（畫）

明治初期に於ける洋畫の大家であつて文久三年江戸小石川に生れた。父は一道と云つて岡山藩士である。父は後に大阪に住したので氏もその地に於て漢學を保田東潛に學び、佛蘭西語を大阪開成學校で學んだ。十一歲の時外國語學校に入つて更に佛語を學び、十二歲の時山岡成章に就いて畫を學び、二十一歲の時高橋由一の天繪學舍に入つて洋畫を學んだ。明治十七年獨逸に遊學してミュンヘンのガブリエル、マツクスに師事し、二十二年歸朝し、私塾鐘美館を開いた。二十三年第三回內國勸業博覽會の審査官となり、現に護國寺所藏の「騎龍觀音」及「毛利敬親公肖像」を出し、二十

六年、脊髓病に罹つたが病を力めてシカゴ博覽會美術出品の鑑査をなし、二十八年第四回博覽會に高田愼藏氏所藏の「素盞嗚尊」を出し、三十二年十二月逝いた。年三十七。門下に和田英作、三宅克己、小林萬語、久保田半齋、大下藤次郎、伊藤快彦等がある。初期の日本洋畫家中比較的正式に畫學を修めた人である。其作品では滯歐中の人物習作類及風景畫等あるが、代表作としては油繪「騎龍觀音」が推される。氏は性剛毅、趣味頗る廣く、篆刻、寫眞、大弓、釣魚等を娯しみとした。氏は常に「モデル」を傭ひ、實景に對して繪を描くのは習作の手段であつて、眞の繪を作らうとすれば形を腦裏から作らなければならぬと言つて寫意主義を取つてゐた。

原田　實　ハラダミノル（評）

明治二十三年四月八日、千葉縣千葉市に生れ、安房中學校を卒業したる後、早稲田大學英文科を大正二年に卒業した。現今「生命の朝」「人間の教育、國際日本の教育及び翻譯「兒童の世紀」「婦人運動」「戀愛と結婚」等エレン・ケイの原著を出し、ゴーリキイの「世の中へ出て」等を公にした。尙ほ評論には「國際教育」「フェミズム概說」「教育の機會均等と婦人の教育」「ウエルズの世界國家」「女子教育の改築」「戀愛と結婚の進化」「エレン・ケイの母性高調」等を「東方時論」「婦人公論」「早稲田文學」「帝國教育」「新小說」等に書いてゐる。

氏の夫人琴子は舊姓齋賀と言つて、明治二十五年十二月千葉縣市原郡五井町に生れ、成女女學校を出たる後山田嘉吉氏について英語を學び、長篇小說「をとめの頃」の作を出してゐる。

現住所　東京市牛込區南山伏町一四宮田氏方

原　白光　ハラハクコウ（翻）

名は久一郎、明治二十三年四月十日新潟縣北蒲原郡水原町に生れ、新發田中學校を經て早稲田大學英文科に入學し、大正三年卒業した。また同四年外國語學校專修露語科に入り同六年之を卒業した。又露國人に就いて露語を學び早稲田大學講師となつた。創作「永遠の足音」翻譯「ランデの死」「賭博者」「永遠の良人」「アンナ・カレーニナ」「生活の盃」等がある。

現住所　東京市雜司ヶ谷四四九

原　夢笑子　ハラムシヨウシ（川）

本名は精、明治二十年二月六日茨城縣新治郡石岡町大字石岡に生れ、大正六年明治大學政治經濟科を卒業し、爾來新聞雜誌の編輯事務に與り、又一方川柳に志して高木角戀坊氏と共に雜誌「草詩」を主宰し、「受驗界」「高等小學の友」「警察新報」等に寄稿してゐるが、目下一茶の藝術を深く研究してゐる。

雨上り花には重い露がある
東は淺黃に蓮の開く音
華やかに灯を彩つて散る櫻
若草を小紋に染めて散る櫻
等の草詩の外、十四字詩として
土の匂ひもなつかしき春
もむ若草に淡い春の香
首までひたしなぶる菖蒲湯
さゝやく水に沈む花片
ズボンの折目が氣にかゝる朝
等がある。氏の祖父一閑も作句を好み
永き日やぽつり〳〵とひとり旅
といふ辭世を殘してゐる。

現住所　東京市外落合村葛ヶ谷八〇二

故春木南溟　ハルキナンメイ（畫）

江戸南宗畫家。春木南湖の子で、名は熙、字は敬一、通稱卯之助、俊、名を龍、字を子絹と改め、耕雲漁者とも號した。畫を父に學んで頗る天才あつて山水、花卉に長じ、殊に山水は淡雅で韻があると稱せられた。築地三枚橋に住し、明治初期に於ける斯界の名家であつたが十一年十二月八十四歲の高齡で病歿した。志士で有名な南畫家。田崎

草雲は谷文晁にも就いたが又彼に就いて大に得るところがあつた。

半田良平　ハンダリヨウヘイ（歌）

明治二十年九月十日栃木縣上都賀郡北犬飼村深津に生れ、宇都宮中學校、第二高等學校を經て東京帝國大學に入學して、明治四十五年英文科を卒業した。私立東京中學校に奉職して英語の教授を擔任し、短歌雜誌「國民文學」及び日本畫家の團體なる「晨光會」の同人となつてゐる。歌集「野づかさ」「最新旅行歌選」評釋「芭蕉俳句新釋」等の著がある。氏の歌はいかにもキメの細い技巧の優れた、如何にも物馴れた人の肌合ひを思はせるといふやうな評もある。

庭の面のあつき日ざしも家ぬちにはふかくとゞかず秋さりにけり

いとゞしく吹きながれくる夕霧に九十九谷はかくれあへなく

夕暮をこぼれ雨してほど經たり寒き月夜となりにけらしも

東にかゞやきしるき明星のうするゝなべにさ霧たつ見ゆ

現住所　東京府下落合村上落合二四二

阪　正臣　バンマサオミ（歌）

愛知縣平民阪丈右衞門正緒の長男で安政二年三月二十一日生れた。字は政介、茅田と號した。明治五年分れて一家をなしたが幼より孤となつて醫學を修め、後醫を廢して三河國寶飯郡一の宮村砥鹿神社權禰宜となつた。同六年東京に上り英學を學び尋いで鎌倉宮及神宮に奉仕した。同十五年再び東京に出て操觚界に入つた。二十年宮內省御歌所寄人となり華族女學校教授となつた。同二十九年常宮周宮內親王殿下の學問習字御用を拜し、書道及歌道の名手として知られてゐる。書は行成や近衞三邈院あたりの古いものを習つて優雅この上も無い。その連綿に於て水の流れるごとき小野鵞堂のに比して幾分鈍重の氣味はあるが品位の上より

は氏の書を好む者が多いやうだ。女學校の習字教科書は過半氏のものが行はれてゐる。漢字と假名との調和も頗る妙を得てゐるので假名書の大家でありながら漢字との調和に苦心しても意の如くならぬと言つてゐる人達は何れも氏の筆に感じてゐる。昭憲皇太后御集木版本三冊には、御歌總數二萬七千六百五十一首中から千九十七首外に御文章二十二篇、御唱歌二篇が揭載されてゐるが、阪氏は畏くもその筆者を仰付かつたので丹精を凝らして書いたものである。氏は茅田と號してゐる。

裾野にはあらしふけどもふしの嶺のこの曉の雲ぞしづけき

つばくらめすからむとすれば春風の吹き隔てけり青柳の枝

雨けぶるそのふの花にたはるゝはたかうたゝねの夢の胡蝶ぞ

又詩を能くし「春雨樅園卽事」といふに次のやうなのがある。

點滴聲々送二暮寒一、　春泥三尺出レ門難、

溪南溪北花如レ雪、　好是樓頭憑レ欄看、

現住所　東京市赤坂區榎坂町五

ヒの部

故東久世通禧　ヒガシクゼミチトミ（歌）

天保四年京都に生れた。父は通德と言つて勤王家であつた。氏は幼名保丸、夙く父を喪つて母の教養を受け九歲の時旣に宮中に出仕し餘暇をもつて讀書三昧に入つた。それが業中の圖書は大抵讀破することが出來、氏が爲事歌文に名をなす基を作つた。安政文久の頃國事に奔走し、所謂七卿落の一人として京師を脫して長州に入り筑前太宰府に五年の間淹留した。のち王師の參謀となり、神奈川縣知事、開拓長官、侍從長、元老院議官、樞密顧問官、貴族院副議長等の諸官職に就き遂に伯爵を授けられた。氏は多能であつて議場整埋の妙を得、詩歌文章を善くし兼ねて書畫に巧みであつて

請ふものあれば決して之を惜しまなかつた。それで竹亭の書は至るところに見ることが出來る。晩年舌癌を患へて截開手術を數回加へたが其の効なく遂に四十五年二月一日東京に於て薨じた。享年八十。天皇震悼して誄語を傳へしめられ且つ祭粢料五千圓を賜つた。

よく集めよく散らしてぞ國のため黄金の光あらはれにける

隅田川かはかみとほく雨はれて見えこそわたれ小筑波根の山

又竹亭と號して詩を善くした。

牽牛花

風爽籬邊秋色間、　牽牛花上露斑々。
莫レ言艶態衰萎早、　紅紫朝々改二舊顏一
宿二沙流一

風捲二波濤一夜不レ收、　數聲征雁喚二鄉愁一、
新寒徹レ骨眠難レ就、　月白九郎祠畔秋、
龜山營中供二西鄉都督一祭一

露營半歲勞二王師一、　懲罰功名轟二四陲一、
同想英雄千古感、　陰風五月渡レ瀘時、

湖山小隱

閑中歲月長、　高臥水雲鄉、　孤鶴歸二穹岫一、
群鷗避二渡航一、　世機曾不レ管、　塵慮總相忘、
一簟清風色、　悠然對二夕陽一、

巴田朱泉　ヒキタシユセン（俳）

名は安三郎、明治二十一年三月十四日東京市日本橋區通旅籠町に生れ、幼少の頃より俳句に趣味を有し、三十六年頃既に西野藍雨氏等と作句を試み其の後瀬川疎山、金森匏瓜等と相識り其の指導を受けて啓發させられた點が多かつた。氏は主として「藻の花」「俳諧草紙」「ホトヽギス」等に投句したが、著書は無い。

震災前の住所　東京淺草區今戸町一五

故樋口一葉　ヒグチイチヨウ（小）

山梨縣出身の德川幕臣樋口則義の第七女である。幼時東京池ノ端の小學校に學び傍ら源氏物語枕草紙等を讀んだ。父は府廳に出仕して相當に文字のある人であつたが女史に對しては質疑に應ず位に止めて積極的の教授はしなかつた。夙に中島歌子に就いて國學殊に和歌に學び嶄然として頭角をあらはした。同門には三宅花圃、島田三郎夫人其他貴族門閥の令嬢達があつたが女史は師に代つて門弟の指導に當るほどの進歩をなし人の推すところとなつた。十八歳の時父を亡ひ家計頗る困難を極め商業を營みつゝ學問に耽つた。尙半井桃水に從つて小說の添削を乞ひ、明治二十五年二月始めて「闇櫻」を著し、甫めて原稿生活をやつた。爾來「濁り江」「丈くらべ」「われから」等の外小說書簡文日記を殘して明治二十九年十一月二十三日歿した。年僅かに二十五。容易に人に許さぬ高山樗牛博士すら女史の才に嘆賞措かなかつたのを見ても、如何に非凡の文才があつたかゞわかる。一葉全集は其業を示してゐるがあれだけでは筆蹟がよくわからぬけれども水莖の蹟も頗る達者であつて落合直文氏の文字に似てもつと流暢である。大正十一年十月山梨縣東山梨郡大藤村慈雲寺に女史の記念碑を建て、馬場孤蝶戸川秋骨高島平三郎の諸氏の講演會を開いて盛んなる廿五周忌を行つた。碑文は幸田露伴博士文字は岡山高蔭氏である。令妹邦子女史も亦才氣あるが小石川區に書籍文房具店を營んでゐる。

長閑にも來啼く軒端の鶯に春を任せて住める宿かな。

秋篠や外山の峯の朝靄に薄れて殘る有明の月。

樋口龍峽　ヒグチリユウキヨウ（文）

名は秀雄、明治八年五月長野縣飯田町に生れ、飯田中學校、第一高等學校を經て東京帝國大學に入學し、同三十三年その哲學科中の社會學科を卒業し、一時大隈侯の下に永井柳太郎氏と共に雜誌「新日本」の編輯をしたが現今は文筆に遠ざかつて政治生活をやつてゐる。長らく衆議院議員となり、黨籍を憲政會に置き今はその常務委員の重要地位を占めてゐる。「社會小史」「社會學十四講

義」「近代思想の解剖」「群衆論」「現代思潮論」等の外、數多の論說時評がある。叙述穩健で頗る平明の文である。長詩人として有名なる日夏耿之介氏は龍峽氏の實弟である。

現住所　東京市小石川區白山御殿町一〇

故菱田春草　ヒシダシユンソウ（畫）

名は三男治。明治七年九月長野縣飯田町に生れ、十六歲の時上京して畫を狩野派の巨匠結城正明に學び、二十三年、東京美術學校に入り、橋本雅邦に師事し、二十八年優秀の成績をもつて卒業した。翌年同校の敎員を囑託せられ、傍ら帝室博物館の爲に古畫を模寫した。三十一年日本美術院の起る時、雅邦、觀山等と共に學校を退き、三十六年大觀と共に印度に航し、翌年大觀及岡倉覺三と携へて米國に渡り、英佛に轉じ、佛國パリーに於ては自作畫の展覽會を開き大に好評を博し、三十八年八月歸朝した。四十年第一回文展に「賢首菩薩」を出して二等賞を得、第三回に「落葉」を出して再び二等賞を得た。四十三年の第四回には日本畫部の審査員となつたが、翌年九月年三十八で歿した。彼は明治の大家狩野派の名手橋本雅邦に學び、次で明治新美術の先覺者たる岡倉天心に奬勵され、大觀、觀山等の先輩と共に盛んに新描寫を試み、印度及び歐米の感化を受け、新しい日本畫の出現に貢獻した。三十三年美術院出品の「雲中放鶴」を以て其前期の代表作とすれば文展出品の「落葉」は後期の代表作である。殊に落葉に於て新畫風たる無線描法を十分發揮したといふ評がある。

比田井天來　ヒタイテンライ（書）

名は鴻、信州の人、夙に東京に出でゝ書道を研究し、今は鎌倉にあつて詩書を事としてゐる。書は日下部鳴鶴門中の白眉であつて、嘗つて東京高等師範學校の習字科を擔當したことがある。近時弘法大師流をも加味せる筆法を示して、他の六朝風の書と趣を異にしてゐる。夫人小琴女史も亦坂正臣氏の高弟である。

留ル僧試茶

鼎熟　松風起、　盌香　雲氣凝、　誰知　此中味、
但有二一庵僧一。

田邊松坡はこの詩を讀んで「高妙超脫にして復一點の塵氣なしと評してゐる。

氏は故鳴鶴翁の遺愛中法帖及び書籍全部の讓與を受け氏年來の希望たる書道館開館の曉は一般に公開して見せる筈である。尙氏は大震災後信州上田市片平町に寓して書籍法帖の整理をなし且つ揮毫講演を試みた。氏は天性ものに拘らない奇人故近藤雪竹は嘗て氏に無責任居士の號を送つたが、氏大に喜び爾來無責任を以て任となし、その扇谷の鷗雨莊に住むや數年門標を揭げないので訪問客は大いに困却した、隣翁荒削の標札に比田井の三字を揮毫し門柱に打つた、一夜大風の爲失せたるが天來固より頓着せぬ、隣翁再びこれを作つて禿筆を染めて後門柱に揭げたと言ふことである。

現住所　相州鎌倉小町三〇二、（假住長野縣上田市）

故日高秩父　ヒタカチヽブ（書）

栃木縣の人、梅溪と號し頗る書に巧であつた。氏は有名なる書家長三洲に就いて入木道の奧を究め又諸大家と出入して作詩に力を用ゐた。初め東京府に出仕し後宮內屬に轉じ、進んで內大臣秘書官及東宮御學問所御用掛、宮中顧問官等になり正五位勳三等に叙せられた。小學校に於て使用した習字手本は氏の文字であつたが隨分しつかりした書體で或人は子供には少し堅過ぎはしないかとさへ言つた程である。廣島城內には日淸戰爭當時大本營を置かれたからといふので、同城內入口には「大本營」といふ大書の大木札がある。これ卽ち日高秩父氏の筆蹟であつて、實に力の籠つた釣合のとれた一點一畫隙の無い黑色淋漓としたものであつて、これを見たゞけでも氏の書蹟の立派なことがわかる。艶は無いが威嚴があり品がある。大正九年四月十九日六十九歲で病歿した。生前正五

位勳三等に叙せられたが書家としては異數である。

故日高鐵翁　ヒタカテツオウ（畫）

長崎春德寺の沙門で後、雲龍寺に居た。稼圃の風を慕ひ、田能村竹田、木下逸雲等と共に德川末期の西方に於ける南宗畫の大家である。山水花卉とも善くしたが、最も墨蘭に長じ、到底他の追隨を許さぬものがあつた。其他に寓する淸人等の從學するもの多く、又明治の南畫安田老山、川村雨谷村田香谷等の諸大家は、彼に就いて學んだのである。明治四年十二月七日八十一歲の高齡で歿した。

飛田周山　ヒタシユウザン（畫）

名は正雄。別に對月居と號し、明治十年十月二日常陸國多賀郡北中郷村に生れ、二十九年三月上京して四條派より出た大家久保田米僊の門に入り、後、京都に入つてこれも同派の最高標準とされてゐる畫伯竹內栖鳳に就いて學び、三十二年には日本美術院に入つて更に深奧の研究をした。文展へは第一回に「維摩居士」第六回に「天女の卷」第九回に「星合の空」第十回に「わたつみの宮」第十一回に「幽居の秋」を出して特選となつた。しかし氏をして最も有名にしたのはかの「神泉」であつた。「神泉」は神さびた杉の大木のあたりに泉の噴出するところを畫いたものであるが見るからに神々しいものであつた。氏は明治三十九年以來文部省囑托となつて教科書の挿繪を擔當してゐるので國定教科書を見れば氏の氣を常に見られるわけである。

奈良女子高等師範學校に藏するものは神泉に似たやうな畫彩によつたもので日佛展覽會出品として嘗て巴里に行つたことのある傑作である。氏は畫の外入木道に於ても其の堂に入つた大家である。氏は畫家として名ある飛田逸民の親戚か孫か。尙十三年帝展審査員に擧げられた。

現住所　東京市小石川區水道端町一ノ五

人見東明　ヒトミトウメイ（詩）

名は圓吉、別に淸浦明人とも號してゐる。明治十六年一月岡山縣岡山市門田屋敷町に生れ、同地の中學校を經て早稻田大學に入り英文科に學んだ。後讀賣新聞社、あめりか屋出版部等に居たことがある。詩集「夜の舞踊」「戀こゝろ」「愛のゆくへ」短篇小說「榮光を望みて」等の外多くの作を出してゐる。

現住所　東京府下杉並村天沼六八

日夏耿之介　ヒナツコウノスケ（詩）

本名は樋口國登、明治二十三年二月二十二日長野縣飯田町に生れ、郷里の中學校を卒業したるのち上京して早稻田大學に入つて大正三年英文科を卒業した。著書に有名なる「轉身の頌」を始め、「黑衣聖母」「ワイルド詩集」「英國神秘詩集」「近代神秘說」があり、「日本近代詩の成立」「散步の說」等の作を公にしてゐる。東大出身の文學士で社會學を專攻し文學藝術に造詣深く、憲政會派に屬する衆議院議員樋口龍峽氏は實兄である。

悲哀

一

このがつしりとした窓框に凭れ倚り
外景を睹るに
——わが心性はことごとく今空虛である——
たゞ漠々と密雲いやが上に蒼空を埋み
野は灰白の粗面い掛氈をひろげたり
いつぽんの纖く長き
槲樹の老木の最下端の水枝の上に
眞赤い嘴をうごかし黑き小鳥
時あつて稚移りゆく白日の月の行末を
丹念に見おくつてゐる

二

ああ何の飛躍ぞ抽象ぞ
わが身はかかる外氣に觸れて
乳汗の上のいささかの脂肪のやうに凝結し
わが心性は熱ある人が
赤い埋み火に見入りしごとく

惡感に惱む

わが室内のいと嚴疊な安樂椅子に軀を委ね
千百の盲目たる思量の重みに
自ら俯ぶいたわが頭は
脆く熱あつて顫へつゝ
譬へば玻璃でできた青白い火屋のやうだ
その裡を凡百のこころの縷
漏電のごとく往來して
サラセン風の惟綺なる模樣を織
猩々緋のかがやかしい地色の上を
ままに黄昏ときの星のやうに
黄金と白金とを鏤める　（後略）

現住所　東京府下大森山王二七二〇

故日根對山　ヒネタイザン（畫）

日野根とも云ふ。泉州堺の人で京都に住し南宗畫の妙手であつて、名は盛長、字は小年對山と號し又茅海の號がある。大家貫名海屋に學んで一家をなした。性豪放にして酒を嗜み、島津久光の宴席に在つて毫も恐れなかつたやうな逸話を多く殘してゐる。畫は渾厚にして和熟、支那臭を脱した遒勁のうちに、京畿の特有な優雅を帶びてゐる。明治二年三月年五十七で歿した。代表的作品には「京都中山吉兵衛氏の藏にかゝる。「嵐山圖」及「高雄圖」があり、門下に猪瀬東寧、野口小蘋等がある。

日野草城　ヒノソウジヨウ（俳）

本名は克修（ヨシノブ）、明治三十四年三月十八日東京市下谷區山下町五番地に生れ、大正十年三月京都第三高等學校一部乙類を卒業し、直に京都帝國大學法學部法律學科に這入つた。氏は草城の名をもつて夙に作句を發表し、俳諧雜誌「京鹿子」を主宰し、また「ホトゝギス」に寄稿してゐる。

塵取をこぼるゝ塵や秋の暮
寂しくばたらふく喰ひね零餘子飯

等は氏の作である。

現住所　京都市北白川下池田町七七

姫島竹外　ヒメジマチクガイ（畫）

名は解三。天保十一年三月筑前に生れ、石丸春平村田東圃に學んで南宗畫家として有名になつた。日本美術協會々員、游心會顧問等となり、諸所の展覽會に出品して受賞多く、好評を受けてゐる。氏は亦詩文をも善くし門下に水田竹圃、赤松雪嶺等の名家を出してゐる。もと大阪市北區中ノ島六丁目に居たが、近來その消息を聞かない。

平井楳仙　ヒライバイセン（畫）

名は秀三。明治二十二年一月京都市に生れ、京都美術工藝學校に入つて繪畫科本科專攻科研究科を卒業し、四十二年以來京都美術協會、及び日英博覽會等で數回受賞した。文展へは第一回に「宮苑の朝」第二回に「晩春」第三回に「浚落」第四回に「大佛炎上」第五回に「あかつち山」第六回に「浦づたひ」「とさめの朝」第八回に「遼東の夏」「宮苑」第九回に「夏」第十回に「都三十景」第十一回に「夏」を出し、「浚落」「大佛炎上」「浦づたひ」「遼東の夏」は何れも三等に入り、九回の「夏」は二等賞を得た。

現住所　京都市洛東高臺寺馬場

故平井晩村　ヒライバンソン（詩）

通稱は駒次郎と言ひ、上州前橋の人であつて、幼時より詩歌文章を嗜み、且つ巧みであつた。長じて文章家を志望して上京し、先づ報知新聞に入つて記者となり、次いで東京毎日新聞に入り、轉じて上野毎日新聞記者となつた。晩年貧と病との爲に苦しんだことは氏の仆を傳へられた當時の新聞や雜誌に載せられて一般のあはれな情をそゝつたものであつた。大正八年九月二日年僅かに三十七歳で白玉樓中の人となつた。その辭世に

病葉の遠雷に散る夜かな

といふのがあつた。詩人晩村の終焉は實に淋しく痛ましいものであつた。

故平木白星　ヒラキハクセイ（詩）

名は照雄、白星は其號である。上總市原郡姉ヶ崎町の人で幼時東京に出で東京英語學校卒業の後高等學校に入つたが半途で退學した。後遞信省に奉職し、累進して東京駒込郵便局長と爲り、業暇を以て文學を研究し、著作する所少なくない。「釋迦」「お小夜新七」「耶蘇の戀」「平和」等の著がある。氏は性質頗る溫厚で眞率、常に筆硯に親しんでゐても官途に就いても亦精勤の稱があつて官吏中の文士として知られた。大正四年一月二日年四十で病歿し谷中感應寺に葬つた。

廓がよひ
八丁づゝみ宵闇を
駕籠に搖らるゝ下垂髫、
丸に井桁の紋どころ
廓がよひ人
衣紋はだけの艶あれや。

いたくな吹きそ、秋の風
前髪ちらとほつるれば、
さはさりながら無きも憂し
吹けよいさゝか
袂の伽羅の薫るほど。

左に三分、右手七分
半ば讀みたる長文の
戀に眸をたどらせて、
誰が紅筆に
何思ひでの片ゑくぼ。

秋の香高き長繩手
息杖とんと地を捶てば、
閻魔蟋蟀鳴きやみて
「肩せいまかせ」
萩やしどろの曼陀羅華。

ちゝやちゝよと養虫の

露にすだくも血を呼ぶと
聞かれて蕭殺の
氣は行人をうかゞへど、
黑羽二重の袖をくみ
いびき微かに
夢はくれなゐ濃紫。
（後略）

平櫛田中　ヒラグシデンチユウ（彫）

名は倬太郎、明治五年四月岡山縣後月郡西江原村に生れ、彫刻の大家中谷省古、高村光雲等の諸氏に學び東京彫工會、日本美術協會、日英博覽會に屢々出品して受賞し、文展へは第一回に「姉ごゝろ」第五回に「維摩」第七回に「竪指」「落葉」を出して入選し三等賞其の他を得たが、大正三年院展第一回に「横笛堂」「樹に椅りて」「禾山笑」「月明」を出してその天才を認められて遂に同人に推され其第二回に「沙上」「陰影」第三回に「兒」「淵」「遠き思ひ」第四回に「森の晝」を出し大正十二年の大震災後に於ける秋季展覽會には傑作「收入」を出品して好評を受けた。大正七年三月以來日本美術院評議員となつてゐる。
現住所　東京市下谷區谷中茶屋町九

故平子鐸嶺　ヒラコタクレイ（畫）

伊勢の津に生れ、明治二十七年、三重縣から特選されて東京美術學校日本畫科に入り、後西洋畫科に轉じ、三十三年優等の成績で卒業し、近畿地方を巡歷して古美術を觀、其間、白馬會に作品を出したこともあるが、氏の製作よりも、古美術の研究に傾き、佛典を學び、漢學を修め、外國語を習つて古美術研究に資した。そして其研究の中心は推古時代であつたが、三十九年支那に遊び、更に六朝より漢に研究を進め、古美術に於ける造詣は頗る深きものがあつた。浩瀚なる遺著「佛教藝術の研究」は如何に氏が堅實の研究家であるかを證明するものである。明治四十四年年僅かに三十五歳をもつて病歿した。

平田松堂　ヒラタシヨウドウ（畫）

名は榮二。明治十五年二月東京市に生れた。工學博士で有名な漫畫家伊東忠太氏は從兄である。氏初め狩野派の大家川合玉堂に學び、後東京美術學校に入學して三十九年日本畫の選科を卒業し、四十年東京勸業博覽會で銅賞を得、國畫玉成會幹事巽畫會評議員等になり、文展へは第一回に「ゆく秋」第四回に「秋の色」第五回に「我庭の秋」第六回に「木々の秋」第七回に「秋風」第八回に「小鳥の聲」第九回に「松間の春、松間の秋」第十回に「群芳競研」第十一回に「奔湍翠光」を出した。「小鳥の聲」「松間の春、松間の秋」は三等賞を得、最も好評のあつた「群芳競研」は特選となつた。號松堂は逗子の別莊が全く松の生えた山松の根ざした岩であるのと師玉堂の一字をも意味するのださうな。餘技として詠歌の道にも精進してゐる。

柿の木に人のぼりたる朝晴を御嶽道きく二人連かな

浦島が寢覺の床の松かげに箱ひらくらし有明の月

山の香と湯の香にひたり五日ほど紅葉と住めば子等の戀しき

うちら寒う秋風わたる諏訪の湖に一文字ひける細き舟かな

現住所　東京市神田區駿河臺袋町一二一

平田禿木　ヒラタトクボク（文）

明治七年東京日本橋に生れ、東京高等師範學校の英語專修科を出て、第三高等學校東京高等師範學校の教授をしたこともある。其後「英語文學」を主宰し傍英文學の翻譯紹介並解說等をやつてゐる。嘗て英國オックスフォード大學で言語學及び英文學を修めて來たのと夙に文才があつたので教授としての評判もよかつた。「最近英文學研究」「青春」「彼等」「虛榮の市」「英國近代傑作集」「エマーソン代表偉人論」の外多くの泰西文藝叢書　翻譯を分擔して書いた。氏は文學界同人として、まだ若い頃より文筆があつたことは、今日同誌を繙いて見ても、驚くほどのよい文章があるのでわかる。文章の明快暢達に引きかへて氏の文學の讀み憎さは先づ類がなからう。その類のないほどのわかりにくい文字が、見れば見るほど味があるやうに思はれるのは不思議であるが、どつか底の方に藝術的のものが潛在してゐるのかも知れぬ。

現住所　東京府下北豐島郡瀧野川田端一〇八

平塚義平　ヒラツカギヘイ（歌）

明治九年十月十日千葉縣海上郡富浦村神宮寺に生れ、同二十八年八月故海上胤平氏を東京神田猿樂町の宅に訪問して入門以來大正五年三月翁の長逝するまで長短歌の研究をした。尙氏は香取郡府馬村を中心とする松籟吟社及び長崎縣島原の敷島會を主宰しつゝ歌道のために盡してゐる。短歌に

みな月のてる日をいたみあを山もなき枯らすべき蟬のこゑかな（蟬）

しつきたる玉のひかりかわたつみの浪にかゝよふ宵の稻妻（稻妻）

等の作があり、胤平翁の門下だけに長歌を得意とする。

杜鵑をよめる歌

わが宿の、はひりにたてる、五百枝槻、千枝さし茂る、夏かけの、木蔭よしとや、今朝のあさけ、鳴く子規、一聲は、思ひまとひつ、二聲は心おちゐつ、珍らしき、三聲四聲、おむかしき五聲六聲、あやにあやに、きゝのよろしも、かくなから、七聲八聲、つぎて鳴かなむ。

現住所　千葉縣海上郡富浦村神宮寺二二九六

平塚雷鳥　ヒラツカライチヨウ（評）

名は明子、明治十九年二月東京麴町に生れ、お茶の水高等女學校を經て日本女子大學家政科を卒業した。父は有名なる會計檢査院部長平塚定二郎氏である。「煤烟のヒイロン」として新しい女の領

神としてまた若い燕の妻として有名である。曾て「青鞜」を經營してゐたのでこの同人を目して青鞜派とも云つてゐる。著書には「圓窓より」「現代と婦人の生活」「現代男女へ」「婦人と子供の權利」「雷鳥評論集」「我國の女工問題」「母性の復興」「婦人の勞働と嬰兒の死亡率」等がある。女史が中央公論に書いた子供に對する感想を讀んで見ると母となつてからの思想は非常に變つたらしい。嘗て與謝野晶子女史と女子の職業問題について烈しい論爭をしたが隨分眞劍であつた。兎に角思想文章共に現代女流の雄であつて夫君は畫家奥村博史氏である。

現住所　東京市外千駄ヶ谷町九〇五

故平沼鶴峯　ヒラヌマカクホウ（書）

氏は舊津山藩士であつて、元治元年二月七日同地南新座に生れた。字は君一、名は淑郎、鶴峯は其號であるが又別に洋堂學人の號があり、鶴廻舍と稱する。父君青氏人格高潔學德があつた。氏は年甫めて三歲の時百人一首及唐詩選を暗誦し鄉人舌を卷いて驚嘆した。明治三年藩士齋藤又左衞門に就いて漢籍及作詩を學び、兼ねて書道を樂しんだ。五年上京して西周の家塾に入り、又箕作秋坪の塾に學び和漢數の三學を修めた。八年東京英語學校に入り、十年東京大學豫備門に移り、十三年卒業して大學に入り理財學、國法學、行政學、心理、論理、漢文、和文の諸學科を修めた。これより先不幸踵いで臻り家道漸く傾いた。大學に在る間官の給費を受けるが僅かに一口を糊するに足るのみ。之を以て或は筆耕し或は新聞紙に投書して家道を補ひ學資の不足を補つた。一時は廢學しようと思つたほど焦慮したが、濱尾新氏の戒めを受けて止めた。氏は又螢雪の餘暇丹羽忠道に詩を鈴木重嶺に和歌を學問し、又原坦山氏佛學の講筵に侍し、劍を榊原健吉に學び、十八年帝大を卒業した。故丸山作樂氏が忠愛社を創設して明治日報を發行した時、氏は入社して大に皇道を鼓吹した。其後岡山縣尋常師範學校教頭、第二高等中學校教諭、市立大阪商業學校長等を經て大阪商業會議所特別會員に擧げられ、三十一年大阪市助役に當選した。大阪市在職の間各種の公務に參して大に盡すところがあつた。令弟既に法學博士となり檢事總長となり居るのに阿兄は一學士であり一教師であることを見て人心中には大に阿兄の爲すなきを悲しんだ。併し晩年の長年月は早大の教授とし學長として重きを置かれ文部省よりは博士を授けられて阿兄の晩成を祝した。蓋し經濟學は氏の最も長所とするところである。著書に「通信教授論理學」「同經濟學」「新編教育學」「英國憲法新論」等の外教種ある。氏は天成の詩人歌人であつて、つとめて作爲するので無く、至る處必ず氏の手帳に數多の詩歌が書き留められる。講演に出張して席書する筆蹟も亦實に見事であり、演說また熱があつて言々火を吐くの思があつた。蓋し津山藩出身の本書に載せられる人として氏及尾上柴舟氏等の外新進作家井汲清治氏等を數ふべきである。

故平野五岳　ヒラノゴガク（畫）

豐後國日田眞宗願正寺の僧。名は聞慧。別號古竹普通には僧五岳として知られてゐる。少にして田能村竹田の畫を見て志を起し、終に一をなし、廣瀨淡窓に學んで詩文に長じ、詩と書と畫と三絕の稱がある。畫は淸秀閑雅、墨竹亦風韻多く、寸縑尺素人得て拱璧に比した程である。竹田門下の帆足杏雨と共に九州に於ける兩名家だつたが、明治二十六年逝いた。年八十三。

義仲寺

奇勳壓倒大頭公、　深惜先鞭不レ令ノ終、
想像將軍當日恨、　芭蕉墓畔立二秋風一。

濱市、一呼邯鄲市、
綾羅滿目競二光彩一、　汗漫聊游歌吹レ海、
唯恐匆々成夢來、　邯鄲市上觀二傀儡一。

熊本城歌

四面皆賊簇如レ雲、　城在二雲中一紛々分、
滿目今日眞火國、　市廛村落一時焚、

城兵如レ魚在ニ釜中一、
破裂丸飛烈焰迸、
忽令下萬雷發ニ自地
六十日間無ニ虚日一、
軍粮如ニ山山亦盡、
雖ニ力未レ殫色欲レ荼、
都督大兵知レ在レ近
城兵驀地出擊レ賊、
嗚呼日本國中已無城、
守レ城者誰谷干城、
賊將心居ニ泰山安一、
雲梯笑レ渠學ニ魯般一、
火牛何必待ニ田單一、
攻守一日幾艱難、
賴有ニ我兵力一未レ殫、
千竈絶煙兵氣酸、
吶喊聲隔一山聞、
賊軍敗走如ニ倒瀾一、
唯有ニ此城遮ニ賊氛一、
築レ城者是當年鬼將軍。

平林初之助　ヒラバヤシハツノスケ（詩）

明治二十五年十一月八日京都府竹野郡深田村に生れ、早稲田大學英文科を大正六年に卒業し、「やまと新聞」「國際通信」等の記者を經て今日に至り、專ら文筆の業に從つてゐる。著書に氏の研究を纒めたる「近世社會思想」及び「自然界に於ける人間の位置」（翻譯）の外論文集に「無產階級文化の黎明」を公にしてゐる。

現住所　東京市外雜司谷町一四四

故平福穗庵　ヒラフクスイアン（畫）

羽後國角館町の人で、名は芸、通稱は順藏。父の感化によつて幼より繪に巧みで毘沙門天や大師像を畫いてゐた。初め同鄕の武村文海に師事して文池と號したが、後京都に見學してより穗庵と改めた。又前に南部の畫家月嶺の敎へをも受けた。其作は筆致敏捷で描線に一家の妙を有し、就中動物畫に巧みであつた。明治二十三年十二月四十七で病歿した。其息に平福百穗があり、門人に寺崎廣業があり、何れも斯道の巨擘となつた。

平福百穗　ヒラフクヒヤクスイ（畫）

名は貞藏。明治十年十二月秋田縣仙北郡角館町に生れ、十四歲の時父に別れ、二十六年、岩手縣鑛業家瀨川安五郎の資助によつて東京に上り、圓山派の大家川端玉章の門に學び、次いで東京美術學校日本畫選科に入り、三十二年卒業し、結城素明等と无聲會を創立して自然派を標榜して其の努力を示した。後一旦歸國し三十四年上京して新聲社に入り、專ら雜誌挿畫に從事したる後、更に美術學校の西洋畫選科に約一年間通學した。三十七年電報新聞に入り、四十一年國民新聞に入社した。文展へは第三回に「アイヌ」第五回に「赤茄子と芋」第八回に「七面鳥」第九回に「朝露」第十回に「田澤湖傳說」等を出し又大正博覽會に「鴨」を出して其の異才を示してゐたが第十一回に「豫讓」を出すに及んで大に世の注意を惹き、特選の一人となつた。大正五年、鏑木淸方、結城素明、吉川靈華、松岡映丘、田口掬汀等と金鈴社を起し三回の展覽會に出品し又日本風景版畫がある。後遂に名譽の帝院推薦となり、大正十一年吉川靈華と共に新に帝展審査員となり、十二年大震災後開催の日本美術展覽會審査員に擧げられた。氏は名高い日本畫家で寺崎廣業畫伯の師事した平福穗庵の四男であつて、畫壇中人格頗る高く且つ、心ある「アラヲギ」歌人としても相當の地位を占めてゐる。

現住所　東京府下上目黑五八五

鰭崎英朋　ヒレザキエイホウ（畫）

名は太郎。明治十四年八月東京市に生れ、歌川派の浮世繪師、右田年英、圓山派の川端玉章に學び明治三十四年、大野數方、鏑木淸方、河合英忠、山中古洞等と烏合會を起し、大正六年、三井萬里小山榮達、町田曲江等と藝術社を起した。

現住所　東京市麴町區平河町五丁目五

廣島晃甫　ヒロシマコウホ（畫）

名は新太郎。德島縣の人。東京美術學校に入つて大正元年日本畫科を卒業して行樹社に入り、又南北社に入つて挿畫を描き、帝展に「秋の野々宮」「靑衣の女」「落葉が岡」を出して好評を博し、殊に「靑衣の女」は特選となつた。行樹社同人であつて同社にも出品してゐる。

現住所　東京府下下澁谷向山

故廣瀨勝平　ヒロセカツヘイ（畫）

明治十年兵庫縣洲本町に生れ、初め山本芳翠に學び、後、黑田清輝に師事し、東京美術學校に入學して西洋畫選科を卒業し、大阪毎日新聞に入社したが、後辭した。文展へは第七回に「志摩の端」を出して褒狀を得、第十一回に「ほとゝぎす」を出した。光風會等にも出品があり、光風會會員であつたが大正九年三月一日歿年四十四。

廣瀨哲士　ヒロセテツシ（譯）

明治十六年九月岡山縣津山町の近郷に生れ津山中學校、第一高等學校を經て東京帝國大學佛蘭西文學科に入學し、明治四十年これを卒業して慶應大學教授を奉職してゐる。專ら佛文學の紹介に力を盡し傳統主義の問題などを移植したこともある。あまり書かぬが確かな頭と筆とを有つてゐる。「笑の研究」「西洋史論」の譯書を出した外大正五六年頃「歐洲政治概論」を世に公にして名聲嘖々たるものがあつた。この書は後にかの有名な傳統主義問題の動機となつたといふ點で忘れてはならぬ。」氏は大正八年四月自費留學を企てゝ渡歐し歸朝後同大學の文科で十八世紀の佛蘭西文學史を講じてゐる同じ岡山縣出身の第一高等學校教授太宰施門氏等と共に佛蘭西學會を組織し其の講習部でも教鞭を執り盛に傳統主義といふことを主張してゐる。南宗畫の大家として百年前に死んだ廣瀨臺山翁は實に氏の曾祖父である。今より凡そ百十年前に於て田能村竹田と相交り、谷文晁と同席に連つて遂に上座に押されたほどの人南畫家としても支那風の書家としても將たまた名利の念が淡くて辭職を許されないので深川の寓居の二階に三年間病氣と稱して隱れ、いよ〳〵願が叶つて桂冠するや卽日畫筆を携へて西遊した臺山翁、その翁の血が佛蘭西文學者としての氏の血管にも流れてゐるのである。

現住所　東京市外下荻窪五四

廣瀨東畝　ヒロセトウホ（畫）

名は濟。明治八年二月高知縣佐川町に生れ、初め南宗畫家天野瘦石に就いて學び、後文晁派の大家荒木寛畝に學んだ。三十二年より日本美術協會、米國聖路易萬國博覽會等に出品して屢々受賞し、又宮內省及東宮職御用品となること數回、日本美術協會々員、日本畫會委員、獨畫會幹事等となり文展へは第五回に「よぶかたへ」第六回に「谷間の雪」第七回に「逸氣橫生」第八回に「信州燒ケ岳」第九回に「新霜」第十回に「深山の秋」第十一回に「霜おく頃」を出し好評を受けた。

現住所　東京市下谷區上野櫻木町三四

廣田花崖　ヒロタカガイ（小）

明治二十年四月十一日神奈川縣都筑郡中里村下谷本一二六二に生れ、同三十九年三月神奈川縣中郡農學校を卒業し、同四月より四十二年八月まで煙草專賣局盛岡製造所、宮內省下總御料牧場、陸軍省軍馬補充部鐵治谷澤支部等に歷任し、其間に負傷して免官となつた。氏の文學生活は之より始まるのである。氏の著は之を三期に分けることが出來る。その第一期は「甘柑禪寺丸栽培法」「有利なる竹林經營」「實驗飼料作物栽培」、第二期は「デー、エル、ムーデー傳」「床上の歡喜」「ゼシカの最初の祈」「ゼシカの母」「愛子」「基督の如く」「ジヤツク」第三期は「科學小說」（天地の卷、自然の卷）「鐵血團」「空中探偵」等の作を公にしてゐる。尙ほ氏は大正八年七月より執筆の傍橫濱貿易新報記者を兼ねて居る。目下は雜誌への小說述作を主とし、新聞記者を副としてゐる。

現住所　神奈川縣都筑郡中里村市ケ尾一七三七

廣津和郎　ヒロツカズオ（小）

明治二十四年十二月東京牛込の矢來町に生れ、早稻田大學英文科を大正二年に卒業した。氏は正宗白鳥氏の「妖怪畫」より小說を好むやうになつたといふことであるが、一は父柳浪氏及父の門下で

當時氏の家庭教師であつた中村吉藏氏等の感化によること大であらう。氏は新進評論家として名をなしてあつたが、其後創作に筆を染め頻りに多作したものである。氏は磊落無慾物に拘泥せぬ氣性であつて藝術家の無頓着風にも見ゆるが其實有名な親孝行な作家として感じられるのである。翻譯「女の一生」「貧しき人々」「接吻」「コサック」「クロイツエル●ソナタ」「六等室」小說「神經病時代」「二人の不孝者」「明るみへ」本村町の家」「興津の万年筆」等の外「握手」「朝の影」「二人の女」「死兒を懷いて」評論「作者の感想」其他がある。氏は翻譯「美貌の友」に於て大に讀者を喜ばし非常に版を重ねた。氏の制作には取材としてよく性格破產者を取扱つてゐる。しかし「ひとりの部屋」のやうに透明で健康なものも時にはある。氏の作品に强味があるのは、氏の作品を通じて氏の全人格に直面するやうな感じを與へるほど氏自身に吐かれた嘘が無いことである。氏は道德的心理の描寫に長じてゐる。しかもそれは人間性の根本に根ざした道德的心理であつて現實と理想との抱合境を示さうとしてゐる。近く出した小說に「女の生活」「二の道」「博士の候補者」「秘密」「兄の立場」「一人の部屋」「隱れ家」「U君とエス」「窓」等とあるのを見ると可なりの多作家である。氏は多く晝の間は散步するか何かしてゐて夜間に書く習慣である。時には夜を徹して朝までも書き續け晝までも晩までも休む。氣の向かぬ時は何程本屋から電報が來てもペンを執らない。紅葉でも泡鳴でもよくさういふ人が藝術家にはあるものだ。谷崎潤一郎氏や里見　氏等も朝を知らないと言はれてゐる。氏は正宗得三郎氏等の畫家と深交があつて、油繪をよくし、文章家として立つと同樣畫家としても立ち得る自信をもつてゐる。大正九年白木屋瞳子社展覽會に洋畫を出品して觀覽者を驚かした。この點與謝野晶子巖谷小波等に似て多才を示してゐる。十二年上村益郎氏と共に合名會社「藝術社を起し、出版事業を創始し、その第一着手として武者小路氏の全集を刊行

した。それが世間では氏の創作を斷念して筆を執らぬやうになるごとく傳へられたが全くの誤傳であつた。

編者は嘗て廣津氏より「家の先代は柳浪といつたもので人口に膾炙してゐる。「朝顏」の筆者であると聞いてゐる」といふ話を聞いたが、其後編者の購入した古い讀み本の中に「朝顏日記」といふのが見附かつた。中を熟讀すれば芝叟といふ人の遺話を一返舍柳浪の著したもので、後に有名になつた淨瑠璃の種本なのである。

現住所　神奈川縣鎌倉町字小町三三九

廣津柳浪　ヒロツリユウロウ（小）

氏は舊久留米藩士廣津弘信の次子で、文久元年七月二十五日長崎市材木町に生れた。通稱は直人、柳浪はその號である。其先は島津家に出で遠祖蘭溪儒者として有名であつた。服部南郭等の諸名家と相往來した。其次子馬田昌調は文藻があり「朝顏日記」を作つた。號して柳浪と云つた。氏は之を襲つて自家の號とした。父弘信醫を業として蘭法に名があつた。氏は明治七年東京に出で一番町小學校を卒へて外國語學校には入つた。一は當時父の志を紹いで醫師にならうとし、大學醫學部豫備門に轉じ、拮据太だ勉めた。偶々病を得て怨を呑んで中途其志を拋ち、蹶然身を實業界に投じようとした。時に大阪の紳商五代友厚の知遇を得たが、拉せられて關西に下り、商業會議所の書記となつた。二年の後再び上京して農商務省商務局會社課に奉じ、二十年五月其友山內愚仙に勸められ試みに小說「女子參政蜃中樓」を草して東京繪入新聞に這入つた。社主禮を厚ふして其續稿を求め文名是より知られた。其後博文館の「やまと錦」に從事し、硯友社員に知られて遂にその客員として社中に加はり「殘菊」の一篇を公にしたが、その深刻な作風に世を驚かした。又二十九年の春文藝倶樂部に「今戶心中」を出したが、其の構想の非凡と筆致の深刻とは更に文名を高からしめた。かくて「都新聞」「中央新聞」等に筆を弄し諸雜

誌に寄稿してゐた。尋いで「新小說」に「河内屋」の作を出したが時の評家は嘖々として之を賞揚し尾崎紅葉、幸田露伴の二家に伍せしめた。此の他「魂さん」「黑蜥蜴」「あにき」「七騎落」「羽ぬけ鳥」「骨ぬすみ」「おもかげ橋」等氏一家の特色を發揮して佳作の名を擅にした。氏は非常に健筆家で一夜に數十枚を草して倦まない。紅葉露伴の二家久しく沈默してゐる時でも、氏は其間に處して須臾も筆を斷たない。蓋し自然主義勃興以前の文壇に於ける最高の地位を占めた作家の一人と云ひ得る。硯友社の天下であつた時尾崎紅葉は他の作家など眼中になかつたことは勿論で、現今第一流の作家となつてゐる田山花袋氏の如きものでも容れられなかつたのは名高い話であるが、この紅葉も「矢來の叔父さんはえらいぞ」と門人か誰かに話したさうである。氏がこの大文豪たる紅葉から恐れられてゐたことはこの一事でわかる。要するに氏の作風は人生の深刻な觀察と痛烈な表現とである。從つて往々殘忍な感を與へるやうなものもあると言はれてゐる。長らく文壇から遠ざかつてゐるので、氏の存在さへ疑つてゐるものもある。噂によれば近く中央文壇に創作を發表するといふことであるが、もしもこれが事實となつてくれば、露伴の文壇的復活と共に面白いことであると注目されてゐる。評論家創作家として有名なる廣津和郎氏は實に氏の次男である。

雨の日を蕗の中ゆく鯉かな

現住所　神奈川縣鎌倉町字小町三三九

フの部

風光堂菊外　フウコウドウキクガイ（俳）

新潟縣の人、猪瓜金作の男、天保十二年十一月生れた。幼名卯太郎、後素吉と改めた。風光堂菊外は其號である。九歲の時相撲國須賀浦常圓山光孝上人に就いて學問した。氏俳諧を好んで大磯の鴫立庵立宇を師とし、生翠軒松壽と號し、後藤澤の不可思議堂如々の門に遊び、次で北總得知庵仁里の門に遊んだ。後東都に出でゝ染業を營み、餘暇を以て菊守園見外の門に入り、桃翠園菊松と號し後松守菊外と更めた。見外歿後風光堂山月の門に遊び、故あつて風光堂を嗣いだ。俳道を研鑽すること數十年遂に一方の俳匠となつた。近來其の消息を詳にしない。

震災前住所　東京市淺草區猿屋町九

故深川照阿　フカガワシヨウア（連）

近代の連歌の名家であつて江戸砂村護摩稻荷の社司の子として生れ、幼いときから怜悧で神童の名があつた。國學に長じ且つ連歌を善くして、德川柳營連歌師の一員に任ぜられた。明治五年教部省が神佛の各宗をして敬神愛國の道を宣教せしめるために教道職を置いて之に當らしめたが、神道の各派は照阿を選んで司教者を總轄せしめた。氏は幕府の倒れた後連歌の道の廢れることを憂ひて、上野東照宮に例月連歌會を開いて、舊同僚土岐善靜と斯道の復興を計つた。今日尙上野東照宮に每年一月連歌始の式があるのは善靜照阿の功である。又平家琵琶の絕えることを憂ひて合田勾常・福地櫻痴其他の有志と會合當時之を研究し、屢々東照宮に法樂を行つたりした。大正四年二月三日八十三の高齡で病歿した。

深田康算　フカダコウサン（文）

東京府士族深田康守の長男で明治十一年十月十九日生れた。同三十五年七月東京帝國大學文科大學哲學科を卒業して大學院に這入つた。四十年五月美學及美術史研究のため獨佛に留學し四十三年十月歸朝の上京都帝國大學文科大學教授に任ぜられ四十五年二月文學博士の學位を授けられた。

現住所　京都市上京區下鴨

故福井學圃　フクイガクホ（詩）

氏は有名なる詩人で名は緜、繁太郎と稱し漢學を三島中洲に、獨逸語を外國語學校に、書を長三洲

に、詩を岡本黄石に學び、明治二十六年涵詠吟社を創立して詩を研究し、三十六年宮内省屬吏となり圖書寮に出仕し、又大久保湘南、森槐南等の主唱で出來て明治大正に於ける最も勢力ある詩團隨鷗吟社の主事となり大に盡すところがあつたが大正七年十月三十日歿した。年五十一。

千歳山

登攀一阜峻、飛舞四山來、馬水從レ東瀉、
霞城直北開、浮雲變荒壘、秋色滿香臺、
下有名媛墓、松風萬古哀。

夕觀米人斯氏飛行

之子破天荒、年少技巧、行レ空如レ行レ地、
膽大心愈小、新機妙操縱、孰辨人歟鳥、
疾如秋隼擊、翩似驚鴻矯、斗上幾千尺、
乾青未了、層雲盪胸開、不レ許風伯嬲、高
下前後旅、縱横左右邊、九霄舞如レ意、木
葉林表、此夕初月懸、爆聲倏震掉、萬人
齊絶叫、頭上飛行杳、轟轟駭柄鴉、炎炎
疑野燎、光壓攙槍、勢將犯參昴、鼓
翼機轉回、看者神縹緲、嗚呼觀止矣、擲
筆仰天杪。

生前住所 東京市四谷區坂町九

福士幸次郎 フクシコウジロウ（詩）

明治二十二年十一月五日弘前町本町五丁目に生れ青森中學校、東京開成中學校を何れも半途で退學し、苦學して國民英學會英文科を卒業した。氏は神秘主義を排して科學的帝識的の態度を以つて作詩することを正當だと主張してゐる。時代の惠に與らない主義主張は全然無用である。神秘主義の如きはこの科學的正確を尊む現代と背反した有害無用だといふ思想を把持してゐる。詩集「太陽の子」「展望」「惠まれない善」の外「イワン、イリッチの死」等の翻譯がある。氏は二十一歳の時始めて作詩を發表して以來詩人として立ち、二十五歳以後は傍ら評論にも從つてゐる。「自由詩音律論」「批評の職分とは何ぞ」「社會主義と文學」「詩歌を中心としての美學」「反社會主義の精髄」

「女性の社會的服從の範圍」「内容と形式に關する考察」「大杉榮君の勞働文學」其他の評論を矢繼ぎ早やに發表してゐる。

幸福の日

いつでも謂ひ知らぬなやましい日はゆく、
幸福は古ぼけた鉛人形のやうに、思ひ出と陰影
をかき消してまたも嘆く一絃琴……

その坂には若い檜林が葉を匂はせてゐた。
うち續く單音の琴の音に私の過去は立ちかへり、
聞くまゝに草間を鳴らす羽蟲の翼の音よりも靜
かに嘆く……

現住所 東京市外田端五四二

福島甲羽 フクシマコウウ（俳）

名は孝吉、明治二十年三月二十四日東京市淺草區山ノ宿町に生れ、十一歳初舞臺に出て試演以來尾上宗家に入門し、歌舞伎座より市村座へ引續き出演し、二十五歳の時名題昇進して伊三郎と改名した。氏は十六歳の時兄の歌香と共に俳句を岩本梓石に學び句誌「晒井」に投稿した。また傍ら「ホトヽギス」に文章を發表して阪本四方太高濱虛子諸家の指導をうけて寫生文を勵んだ。十八歳の時日本派の大家内藤鳴雪翁の知遇を得同派の人々と交り俳人團體の甲羽觀劇會を組織したこともある。氏の句は「晒井」「ホトヽギス」「二六新報」「寶船」其他の諸雜誌新聞に掲載された。

汗拭を干し行く旅の頭かな
橘に日くれて戻る喜撰かな

現住所 東京市日本橋區元柳町四一

故福住正兄 フクズミマサエ（文）

報德教の祖述者であつて、相州片岡の人大津市左衛の第五子である。通稱は九藏といつて、幼時千賀桐陰に就て漢籍を學び、稍々長じて江戸に行き二宮尊德翁の門に入つてその講說を聽き、大に之を服膺した。弘化四年尊德翁が野州東郷郡宰屬吏

となつた時は之に隨行して共勞務に服した。嘉永三年湯本溫泉宿福住氏の養子と爲り、勤儉刻苦家道を興し、後里正と爲り、村債を償還し、金穀を蓄へ、凶荒に備へ、元治元年更に十四村取締と爲つて救濟に盡力した。小田原侯之を賞し、稱氏帶刀を許されるに至つた。明治四年士班に列し、國學一等教授を拜した。氏夙に國典和歌を間宮永好平田鐵胤、鈴木重胤に學んで造詣があつたので是の命があつたのである。後報德教會を起し、後に報德社と改め爾來同社の爲め大に盡力して社運の隆盛を來した。二十五年五月二十日六十九で病歿し、湯本早雲寺に葬つた。氏の如きは二宮尊德翁の教訓を眞に實行體驗したところの模範的人物である尙「富國捷徑」「二宮翁夜話」、「善惡應報鑑」、「報德幽顯論」、「二宮翁略傳」「蛙園庭訓集」等の著書があつて今日に至つても尙一般の讀者を得て社會に稗益するところが甚だ多い。

福田眉仙　フクタビセン（畫）

名は周太郎。嘗て麥仙と號した。明治八年九月兵庫縣赤穗郡に生れ、圓山派の久保田米僊、狩野派の橋本雅邦の諸大家に學び、三十三年以來繪畫共進會、第五回內國勸業博覽會等で受賞し、國畫玉成會々員、二葉會及び美術研精會評議員となり、後支那に遊んで蜀、西藏に入り、研究するところあつた。「支那大觀」の著は其の寫生である。大正三年院展第一回に「群犂」を出して好評を博した。現に日本美術院々友である。

現住所　東京市赤坂區青山高樹町一七

福田正夫　フクタマサオ（詩）

明治二十六年三月二十六日神奈川縣足利下郡小田原に生れ鎌倉師範學校を卒業の後東京高等師範學校に入つたが中途で退學した。田園詩人民衆詩人として名ある詩作家である。詩集「農民の言葉」の外譯詩評論並に幾多の詩作がある。神奈川縣川崎在上年間及小田原石橋に小學校教師をしてその傍ら「民衆」を編輯し「科學と文藝」の同人として筆を執つてゐたが大正十一年の春教職を辭して專ら詩的瞑想に耽つてゐる。

「船出の歌」「世界の歌」詩劇集「哀樂兒」少女詩集「笛吹貝」及井上康文氏との共著「童謠詩の作り方」の外數多の詩集があり近來長編叙事詩の新らしい試みをなして注目されてゐる。長編叙事詩「高原の處女」は一人の美しき處女の戀を主題として永遠の人生を歌つたもので七編數十章小說の面白さと詩の面白さとを兼ね備へてゐる。又長編叙事詩第二輯「戀の彷徨者」は特殊部落民の子として生れた一青年が父を殺し愛人を屠るに至つた小說的運命悲であつて叙情詩の連續からなるところは新しい技巧である。大正十一年北原白秋氏が福田正夫、白鳥省吾二氏の詩を散文だと言ふて詩壇の騷擾を引起したこともあつた。氏は詩作の外朗吟をよくし演說も亦熱と力とに充ちて堂々たるものがある。

淨火の前に

洗はれよ、靈の火に、
やけよ、人間一切の夢——
全體は一つの火焰に燃え、
ひろがり、ひろがつて遂に自由の荒野となる、
おゝ、寂しき自由の荒野よ、
そこに凡て無の如くなり、人は冷たい涙を流して、一切の幻滅の前に、
淸淨な肉身を感ずる……
そこにわれら共に產み共に育ち、共に行く、
自由と共力と、正しき惱み、寂しさ、
それらを持つ明らかなる大地の心
全一なる一切へ向つて、
雄々しく行かうではないか、
虛にしてかぎりなき一切の實在に……

現住所　東京市外池袋一一一五

故福地櫻痴　フクチオウチ（文）

名は源一郎、天保十二年三月二十三日肥前國長崎

鍛冶屋町に生れた。父は福地苟庵翁といふて當時有名の碩儒であつた。氏は幼名八十吉、後今の名に改め櫻痴居士と號した。夙に家庭の教育を受け後名村八右衞門に就いて蘭書を學んだ。安政四年名村氏に養はれ稽古通詞を命ぜられ、翌年拔擢されて翻譯掛となり、尋いで江戸に遊び聖堂に通學し傍ら蕃書調所に入り、教師箕作阮甫杉田成卿について蘭學を修め、又更に森山多吉郎に就いて英學を修めた。又餘暇を以て中濱萬次郎氏に就き語學を習つた。安政六年外國奉行支配通辨御用を命ぜられ、横濱在勤となり、專ら外交の衝部に當つた。萬延元年進んで外國奉行支配同心となり、更に支配役に昇進した。此年幕府竹内下野守等の使役に隨行して歐洲各地へ派遣され文久三年正月歸朝した。後攘夷論の甚だ熾に起つて天下騷然たる頃は大阪に在つて益々洋學を修めて開國說を講じて止まなかつた。慶應元年柴田日向守に隨行して再び渡歐し英佛間を巡視して二年に歸朝した。後家塾を下谷二長町に開き英佛學を教授した。又江

湖新聞を發兌して盛んに時事を論じた。これ新聞の嚆矢である。淺草寺内に穩棲して著作を以て業とし、明治二年日新社を開き英佛學を教授した。後これを共慣義塾と改稱した。後伊藤博文の知遇を得て一等書記官に擧げられ米國に渡つて會計、理財、公債、紙幣、銀行、造幣等の諸務を調査して歸つた。岩倉右大臣歐米諸國に差遣される時又隨行して外國裁判の實際を目擊して六年に歸朝した。後官を辭して七年東京日々新聞の社長となり九年東京會議所議員に擧げられ西村勝三、澄澤榮一の諸氏と謀り瓦斯を引き街燈を點じ、其他公益を企圖したことが多い。明治十一年商法會議所を設けられた時推されてその副會頭となつた。十二月府會議長となり、東京株式取引所肝煎となり、十五年丸山作樂、水野寅次郎等の諸氏と帝政黨を起して國權主義を鼓吹した。二十年日報社長を辭し一度東京府會議員賄賂問題で拘引されたが幾くもなく釋免された。爾來心を文學に傾け、社會風俗改良を目的として演劇を企て、千葉勝五郎と共に發起人となつて歌舞伎座を京橋區木挽町に新築し、專ら之が脚本著作に從事して文名江湖の間に嘖々たるものがあつた。後自ら其の座主となり、又脚本を仕組んで之を市川團十郎に演ぜしめるなど一意梨園の改善に勉め、又筆を小說に染めて頗る文壇の好尙を進めつゝあつたが、三十七年再び政界に出で憲政本黨の東京府選出衆議院議員となり晩節稍々振はんとして三十九年一月四日二豎の冒すところとなつて死んだ。享年六十六。著書頗多く「幕府衰亡論」「幕末政治家」「懷往事談」等の時論及び「大策士水野閣老」「烏丸光廣卿」「秋の夕暮」「素人芝居」「仙居の夢」「山縣大貳」「尊號美談」「成吉思汗」等の小說と「春日局」「春雨傘」等の脚本がある。死後谷中天王寺の墓地に埋葬し法名を溫良院德譽芳香櫻癖居士と言ふ。記者嘗て氏の友人櫻所君を訪ふて氏のことを聞いた話の中に「氏は酒を呑まぬが非常に通人で多藝であつたこと。速文家で新聞の論文を書く時など卷紙に書いて行くのを二三行づゝ持つて行つて字を拾ふに丁度其長さの場所を塡めるほどの論說であつて論理整然として大に推敲を經たものゝやうであつた。「東京日日新聞」のあの標題の文字は氏の筆蹟である」等のことであり書幅も多くあつたのを見たが、之また實に立派なものであつた。白村廚川博士の夫人として才名ある蝶子女史は實に居士の令孃である。

生前の住所　東京市京橋區築地二ノ三六

福永挽歌　フクナガバンカ（詩）

名は煥、明治十九年三月二十二日福井市に生れ明治四十一年早大英文科を出た。嘗て散文詩を作つて詩才を認められ、詩集「習作」の著がある。萬朝報記者をしてゐたこともあつたが、今は湘南に閑居して居る。「海を越えて來た女」「白い壺」「友」「眞珠」等短篇の作が頗る多い。青年露西亞文學者として知られた尾瀨哀歌はその弟である。大正七年十二月には「彼の踊」を文章世界に公にした。が、其後は小說倶樂部に翻譯を載せてゐ

る。「世界童話傑作選集魚の舞踏」「同編茶碗の一生」等は何れも露西亞ものを譯したものである。
現住所 東京市外代々木富ケ谷一四六二一

故福羽美靜 ブクバビセイ（歌）

幼名は文三郎、津和野藩士義質の長男で、十七歳の時京都に上り野々口隆正に就いて和漢の學を修め、文久三年學習院に出仕し又孝明天皇の左右に侍した。神祇事務局權判事、神祇大副兼宣教次官教部大輔、侍講、歌道文學御用掛、國憲取調委員東京學士院會員、參事院議官、內務部長、元老院議官等になり、明治二十年五月子爵を授けられて特に華族に列せられた。二十三年貴族院議員に當選し、錦鷄間祇候を仰付けられた。三十七年從二位勳一等に叙し瑞寶章を授けられ、四十年八月十四日病の爲に薨じた。年七十七。人となり軀幹倭小であつたが寛宏にして頗る瞻略があつた。最も和歌に長じ入木道に於ても有名であつた。病危篤の時特旨をもつて正二位に叙し旭日大綬章を賜はつた。

稲荷祭の日に詠める

遠近の梅の梢も匂ひつゝ稲荷祭の今日の長閑けさ

故福原周峰 フクワラシユウホウ（詩）

有名なる京都の詩人であつて、名は公亮と言ひ清介と稱し、萩の藩士惣右衛門の子で幼名は百合之助と謂つて少時から詩文を研究して嶄然頭角を表はした。嘉永五年明倫館文學寮舍長に命ぜられ、安政元年藩命によつて相州浦賀の守備をした。歸藩の後長崎に行き西洋の兵術を學び、尊王攘夷論が起つた時京阪に祇役して偵察し文久三年藩命をうけて下關に回航し、六月米艦來擊の際にはその役に從つて戰つた。明治元年軍艦華陽丸が船將に補せられて函館に航し。尋いで大阪藩邸留守居役に補した。十五年大和神社宮司に任ぜられ、城南の男山八幡伊弉諾神社の宮司を經て伊勢神宮權宮司に轉じ、大鳥神社平野神社の宮司に歷任して三十九年勳六等に叙し、四十三年平野神社宮司を辭して正五位に陞ぜられた。大正二年七月十八日年八十七歳の高齡で病歿した。詩集に「香草齋詩集」「太古山房詩鈔」がある。

惜春

酸風 苦雨 慘於秋、 詩思 低迷莫倚樓、
滿地落花深數寸、 傷春 何處可埋愁、

種秋菜

學稱 經濟奈空疏、 咬菜多年漫讀書、
一事不成何況百、 又携鴉嘴種秋蔬、

送別

春興 交情孰淺深、 江南送客惜分襟、
一聲柔櫓忽離岸、 流水桃花何處尋、

抹麗詞

嬌然一笑現珠娘、 月色玲瓏此夜涼、
譜上阮咸感脈々、 水晶簾外雪吹香、

畫水春詞

吾妻橋外漾清漪、 畫舫揭簾歌竹枝、
莫向春風嗟老大、 萬花園繞白鬚祠、

福原蘇洲 フクハラソシユウ（詩）

伊勢桑名の人、名は鐐二郎、東京帝國大學法科大學を卒業したる後、長く文部省に勤務して普通學務局長、專門學務局長、次官等になり、後本省を出でゝ東北大學總長に任じ、現に學習院長として令名がある。氏は業餘筆硯に親しみ、吟詠を善くし、夙に隨鷗吟社に入つて名をなしてゐる。帝國美術院長。

奉陪紫宸盛儀恭賦七律

唵靄 烟霞繞紫宮、 春興 殿前上日曈、
武臣鎧甲秋霜劍、 衛士裲襠明月弓、
風送 金鈴如太古、 天傳寶鏡到無窮、
翠簾 咫尺神人會、 侍立階前虎豹中、

仙臺途上雜詩

蚌燈 結網欲三更、 屋外亂松風雨聲、
憶起去年今夜事、 千尋雪浪縛長鯨、
半生漂蕩大濤間、 臨死幾回能得還、
但使妻兒無疾病、 寒燈亦自足開顏、

氏は敬香大江孝之の感化を受け「風雅報」中鏘々

の聞えがあり、吏人中水野錬太郎氏と共に稱せられてゐる。

現住所　東京府下目白學習院長官舍

福本日南　フクモトニチナン（評）

名は誠、又利鎌舍の號がある。安政四年福岡に生れ、幼時より讀書作文を好み遂に文筆の人となり時文家として蘇峯、愛山羯南知泉等と雁行した。曾て「日本」「二六新報」等に社說を草した事がある。又衆議院議員となつて議政壇上の一異彩となつた事もある。文章は熱烈にして華麗、しかも洒脫飄逸の趣がある。性豪放にして磊落頗る國士の風がある。著には「日南集」「英雄論」「清級徒神風連」「元祿快擧錄」等があるが最後のは最も有名である。その堂々として將師が兵をつかふが如き筆致は英雄を論ずるに最もふさはしく氏の英雄論は有名なカーライルのそれに比すべきものであると云はれてゐる。

藤井浩祐　フジイコウユウ（彫）

明治十五年十一月東京神田錦町に生れ、同四十年東京美術學校彫刻科を卒業し、太平洋畫會研究所に入つて彫刻を敎へてゐる。文展へは第一回に「狩」第二回に「まぼろし」第三回に「秀ちやん」第四回に「髮洗」を出して褒賞を得、第五回に「鏡の前」第六回に「潭」第七回に「坑內の女」第八回に「トロを待つ坑夫」を出して何れも三等賞を克ち得、第九回に「早朝の靈拜」を出したのち大正五年美術院同人となり、其第三回に「白眼」「若き女の顏」第四回に「踊る女レリーフ」鑄像の色つけ」大正十二年の秋季同展覽會には「靜かな水」「うちわの女」「湯を前に」「浴女」「化粧」等の諸作を出して好評を得た。太平洋畫會々員。大正七年三月日本美術院評議員となつた。氏は震災の後「生活と藝術」といふことについて「衣食住の爲に藝術を低下させたくない。我々は天の鐵槌に感謝し、人間の力弱さと同時に力强さを以て食ふことに努力すべきである。決して天を怨むどころか、天災を幸だとも思ひなさなくてはなるまい」と言つてゐた。又震災後の「日本美術展覽會」に於ける審査員に擧げられ斯道に盡すところが少く無い。

現住所　東京府下日暮里一〇九七

藤井紫影　フジイシエイ（國）

名は乙男兵庫縣士族藤井光太郎の弟で明治元年七月十四日淡路國に生れた。同二十七年帝國大學文科大學を卒業し同三十一年八月第四高等學校敎授に任じ四十一年七月第八高等學校敎授に轉じ四十四年九月京都帝國大學文科大學敎授に任じ四十五年六月文學博士の學位を授けられた。著書に「巢林子評釋」「俗諺論」「諺語大辭典」等ある。德川文學の大家であり。筑波會の一員としてよい俳句を作してゐる。筑波會といふのは帝大出身の俳社であつて一時は竹冷や紅葉の秋聲會及正岡子規の率ゐる日本派卽根岸派と對してゐたもので、大野洒竹、佐々醒雪、沼波瓊音等の文士も社中の重なる人々である。氏の作に

青柳の雨ともならで垂れにけり。
畑打や崖の下なる海の音。
水かへて藻を浮べけり金魚鉢。
白魚の子をうむ頃や朧月。
芍藥や伏籠にかけし靑き衣。

等の名句がある。

現住所　東京府愛宕郡田中村

藤井眞澄　フジイマスミ（劇）

明治二十二年二月五日岡山縣御津郡馬屋下村に生れ、關西中學校を經て早稻田大學に入り、法科に學んだ。「民本主義者」「窟」「春の宵」「窟を出でゝ」「科學食料會社」「吹雪の町」「妖怪時代」等の外、表現派風の長編「超人日蓮」を出したが、何れも相當の注目を受けた。氏は嘗て雜誌「黑煙」を編輯したことがある。氏は別號を濱川冷人とも

言つてゐる。近く書いた評論を見ても「舊藝術の種々相」「人間藝術の眞意義」「當代劇作家の一群」「威嚇の藝術」「新進プロ文學者」「民衆藝術論」「劇と社會相」「武者小路實篤論」等の力作を矢繼ぎ早やに出して、其の多作能と努力とを示してゐる。

現住所　東京府下北多摩郡狛江村和泉龜塚

藤岡勝一　フジオカカツジ（文）

東京府平民藤岡法雲の長男で明治五年八月十二日生れた。同三十年七月東京帝國大學文科大學を卒業し大學院に入り三十四年言語學研究のため獨逸に留學し歸朝後文科大學教授に任じ四十年清國へ差遣され四十三年同教授に進み文學博士の學位を授けられた。

現住所　東京市小石川區仲町二〇

故藤岡好古　フジオカコウコ（國）

埼玉縣の人で本姓は青山氏であるが出でゝ藤岡良左衞門の養子となつてその姓を冒した堀秀成の門に入つて國學を修め、言語學を研究すること頗る深かつた。明治六年肥前松浦郡姫島田神社權宮司となり、十七年伊勢權宮司に榮轉し三十年遂神宮教管長となつた。後之れを辭して東京日比谷に神宮奉齋會を組織して其の會長となつた。大正六年六月十七日日本大學宗教大學科開講式に臨んで講演中に腦溢血のため急に歿した。年七十二。

故藤岡東圃　フジオカトウホ（國）

明治三年加賀國金澤市に生れた。本名は作太郎、東圃は其の號である。京都第三高等學校を經て帝國大學文科大學國文科に入り二十七年卒業した。初第三高等學校教授となり後東京帝國大學文科大學助教授に轉じて國文學史を講じた。氏資性溫厚幼より宿痾の喘息に苦しみつゝも、學に篤く、國文學に精通し、兼ねて美術を愛好し、高い鑑識眼があつた。三十九年文學博士の學位を授けられ、四十年文部省公設繪畫展覽會審査委員を命ぜられ

四十三年二月三日宿痾の爲遂に逝いた。著す所「國文學全史平安朝篇」「近世繪畫史」「日本風俗史」（平出鏗次郎氏と合著）「國文學史講話」「東圃遺稿」「松雲公小傳」其他「國語教科書」「國文學史教科書」等數種ある。

氏は學識豐かに識見高く、夙に教授に擧げられるべきに未だその機なく、嘗て京都帝國大學文科大學の招聘を受けたが辭して應じなかつた。東京にあつて專ら近代文學の研究に努めたが、未だその蘊蓄を傾け盡すに及ばないで逝いたのは惜しむべきである。

富士崎放江　フジサキホウコウ（俳）

名は和一郎、明治八年一月二十七日越後國蒲原郡に生れ、少時より江湖に放浪し、福島に落ついて三十八年福島民友新聞に入り俳句欄を擔當してゐる。著書に「双岩集」「江湖放浪俳句抄」「冬扇抄」等の外友人の遺稿を數種編纂してゐる。尙氏は嗜好として石州流の茶を立て、小さい人形玩具を蒐集して數百の多きに達してゐる。

聽き惚るゝ人の扇や蝶の羽。
由良之助はまだか心太冷え切りて。
簾上れば扇づかひや一と切り。
塗扇骨も碎くる忠義かな。

現住所　福島市荒町

故藤澤南岳　フジサワナンガク（漢）

高松侯の儒者東暎の子で名は恒、字は成晩に號を以て通稱とした。讃岐國大川郡引田村に生れ、家學を受けて徂徠の學風を祖述し、又尊王の志が厚く、氣節を尙び明治維新伏見の役に高松藩が幕府に黨して藩老小夫兵庫、小河又右衞門等藩兵を率ゐて之に參加した時南岳は命ぜられてその參謀となつた。南岳は大義名分を論じて之を停めようと努めたが聽かなかつた。正月大いに勤王の義を唱へたが、藩佐幕に左袒して一人の耳を假すものがない。南岳は死を覺悟して之を爭ひ、城中に論議すること三晝夜の後漸く藩論を翻して勤王に歸せ

しめた。こゝに於て藩議一變し二老職を退けて之れに死を賜ひ、國老芦澤伊織を謝罪使とし、南岳を副使として二人の首を函にして、二十六日鎭撫使に姫路に追及し藩の罪を謝して漸く赦されることを得た。藩主大いに功を賞し、南岳の號を賜ひ又命じて京都に留つて各藩交渉の局に當らしめた。居ること二年の間東奔西走して善く其の任を盡し、後藩政に參與し、藩學講道館の督學となり四年廢藩の際には香川縣大屬に任ぜられたが辭して就かないで育英を以て任とした。又東畯が浪華の塾を繼承して講演に勉め、門下幾千人其の名を朝野に成せるもの數百人ある。嘗て書を文部大臣井上毅に献じて學制を改革し、精神教育を奬勵することを勸めた。著書に「自警蒙求」「新編林園月令」「七香齋類函」「文章九格」「仙詞九體」「制度考」「萬國通議其他數部ある。大正九年一月三十一日七十九歳の高齢で歿した。長男元造氏は嘗つて代議士となり、二男章次郎氏は大阪南區竹屋町二丁目泊園書院に在つて南岳翁の遺業を紹いで講筵を續けてゐる。門人甚だ多いうち奈良正氣書院長越智宣哲氏最も顯れてゐる。碑文の如き翁の親友士屋弘氏説もあつたが越智氏の撰によることになつた。大阪齡延寺に葬つた。

無題

陶老有二遺方一、　林園惟日涉、　眞耶將夢耶、
栩々一胡蝶、

藤澤衞彦　フジサワエヒコ（評）

氏は日本傳統の權威者と言はれる作者であつて、「趣味の日本史」「近代民謡史」等の著作がある。尙近時兒童の藝術教育に力を入れようとして「兒童藝術研究會」といふものを起して、笹川臨風を會長に推し氏はその主幹となり、先づ六ケ月終了の「兒童藝術講座」を開講した。主意とするところは從來のやうに無暗と非教育的な兒童藝術を拵へたり、あられもない扮裝をさせて兒童に童謡や童踊を實演させて一種の興行などを營んで惡影響を及ぼし易いやうな行き方を捨てゝ、主として兒童藝術の鑑賞力を養成普及する目的である。それには先づ學校に於ける兒童の教育者家庭の感化者をしてほんとうによき藝術教育を施させ、新たに堅實な藝術教育を築き上げるための指導者となるやうにするといふのである。尙この事業としては右發行の外、出版、講演、兒童劇、兒童音樂演奏繪畫其他の展覽會等順次多方面に實際運動の手を伸ばして、將來は「兒童會館」を東京市內に建設する意氣込みである。

現住所　東京市本郷區森川町一

藤島武二　フジシマタケジ（畫）

幼名は楢熊。慶應三年九月鹿兒島池の上町に生れ父は早く歿したので母に育てられた。明治十四五年頃、平山東岳について四條派を學び十七年に上京して十八年より三十三年まで川端玉章の門に在り、後洋畫の研究に志して中丸精十郎の門に移り次で松岡壽に學び、更に山本芳翠の門に入つたが同窓の湯淺一郎、白瀧幾之助、北連藏等があつた。二十六年、三重縣津中學教師となり、二十九年、東京美術學校助教授となつた。三十八年、文部省から佛伊兩國に留學を命ぜられ、初め巴里でグランド・ショーメルに入り、後國立美術學校に入り、コルモンに就いて油畫を學び、後歐洲諸國の都市を遍歷轉學し、カロリニス・デュランに就て指導を受け、四十三年一月歸朝し、五月美術學校教授に任命された。文展は第八回以來洋畫部審査員となり、作品は第五回に「幸ある朝」第六回に「公園の一隅」第七回に「うつゝ」第九回に「空」「匂ひ」第十回に「靜」を出した。東京美術學校及川端畫學校に西洋畫を教へてゐる。十二年大震災後大阪毎日新聞社開催の日本美術展覽會審査委員を托せられた。氏の長兄及び祖先に畫の名手があつたさうである。大正十三年遂に帝展の新會員に推薦され、同年「アマゾーヌ」を出した。

現住所　東京市本郷區曙町一五

藤代素人　フジシロソジン（文）

名は禎輔、千葉縣平民藤代龍造の長男で明治元年七月二十四日生れた。二十一年帝國文科大學を卒業し同二十九年第一高等學校教授に任ぜられ三十三年獨逸語研究のため留學を命ぜられ歸朝後京都帝國大學文科大學教授に任ぜられその學長となつた。尙大正五年三月京都市立繪畫專門學校長に任ぜられた。最も穩健な思想に立脚してゐる文學者で、文筆に長じて素人の名を以て藝術や人生について發表することが少くない。著書「藝術と人生」はかういふ作物の結集である。大正十三年神坂雪佳、伊東陶山、岩村貞藏、岩村正眞、石本曉海、丹波冬橋、河村蜻山、山田樂金、山鹿精華、江島長閑、宮永東山、清水六兵衞、其他十八名を正會員として京都美術工藝會を起し、博士その會長となり、第一回美術工藝展覽會を同年の秋京都市岡崎公園勸業館内に開催することになつた。文學博士。

現住所　京都府愛宕郡田中村

藤波千溪　フジナミセンケイ（詩）

名は鑿、向山黃村の門に入つて詩を善くし、山陽の各地に裁判官を奉職し旁ら詩作に精進した。現に廣島縣吳に在つて公證人役場を開き、閑職に携りながら搜韻を事としてゐる。他の詩人のやうに諸雜誌に投稿することを好まぬので、氏の詩人的位置を十分に知らぬ人が多いけれども、律詩に於ては殆んど其類を見ないほどの大家である。

旭光照波

天門開曙色、　杲々又瞳々、　碧海朱霞散、
銀河赤岸通、　光輝徹二鮫室一、　潋滟蕩二珠宮一、
勢溢二蠻夷外一、　晴分二島嶼中一、　泛槎觀國史、
曝網釣魚翁、　照曜心根朗、　蒼茫目力窮、
龍雛向二暘谷一、　鷁首駕二長風一、　萬里春鳥麗、
令二人仰二日東一、

久保天隨氏この詩を評して鉤心鬪角奇句層出眞是興到之筆と言ふて居る。書も善くして寸楮を得て人これを喜ぶのである。

金山樓席上設題初冬夜坐分字得天

金山對聳苦吟肩、　詩思新來寂似禪、
落木清霜僧舍雨、　寒沙皓月酒家烟、
初開一笑難逢口、　再繼三生未了緣、
身世悠々無二束縛一、　高飛野鶴向二何天一、
桃山月落梦魂驚、　邊塞角傳悲壯聲、
今已凱旋猶諒闇、　雲霞出レ海入二新正一、
吉旦來儀是鳳皇、　已看初日出二扶桑一、
御溝春水恩波動、　光被二華夷一及二四方一、
白額南山已駐蹕、　將軍意氣壓二乾坤一、
勸レ君愛惜腰間箭、　老兎如今在二北原一、

故藤雅三　フジマサゾウ（畫）

氏は幼より繪畫を好み、遂に工部省美術學校に入つて洋畫を學び、明治十七八年頃佛國に留學し、ラフアエル、コランの門に入つた。爾來一回も歸朝せず、大正六年米國で逝いた。年六十四。久米桂一郎は日本で一時彼に畫を學んだことがあり、巴里では目下我が國洋畫壇の大御所の稱がある。黑田清輝も氏の同窓であつた。

藤村千代　フジムラチヨ（小）

本姓は宇野、明治三十年十一月二十八日山口縣岩國町大字川西に生れ、同地の縣立岩國高等女學校を卒業後二年間小學校教員となつたが思ふところあつて辭職した。大正六年上京して二三の職業に就き同八年藤村忠氏と結婚し、爾來創作に從事してゐる。作物には「墓を發く」「巷の雜音」「指粉」等がある。ものを見る目はよいが渾然たるものを纏めるにはまだ大いに學ばねばならぬとの批評もあつたが閨秀作家に人のなき今日未來のある一人に數へたい。作の指導は專ら小川未明氏ださうである。近く百枚に近い長篇小說「お紺の出京」を發表したが、これは虛榮心强い一女性が都會の生活に憧れて上京し、よく田舍出の青年女子にありがちな危險に陷り、直ちに男の係蹄にかゝつて榮華の夢の次第に破れ行く社會相の一面を描いたもので、題材は近時よく取扱はれる月並のものだがこれをこなす點に於て氏の腕の漸次冴えて來たこ

とがわかる。藤村忠氏と結婚後北海道札幌に居つたが、大正十一年上京して後尾崎士郎氏と結婚した。

現住所　東京府下馬込村中井一五七八

藤森成吉　フジモリセイキチ（小）

明治二十五年八月二十八日長野縣上諏訪町に生れた。一高を經て大正五年度帝大獨文科を卒業し、第六岡山高等學校講師第七高等學校教授等を勤めたことがある。大島の地方色を描いた氏は嘗て長篇「波」を公にしてその手腕を認められ新進作家の一人としてその前途に望を囑された。「炬燵」「雲雀」「痛氣」「新らしい地」「若き日の惱み」「研究室で」「寂しき群」「煉獄」「其の夜の追憶」「妹の結婚」「煩惱」「藝術を生む心」「床甚」等の著があるが何れも質實なうちに潤ひのある筆で描かれたもので、氏の心理描寫は作者のそれに對する感情移入に生かされて讀者の胸にヒシ〳〵と迫るものがある。

氏が「舊先生」を書くために北海道北見國の山奥に踏み入つたのを見ても其の作の熊度の眞面目さがわかる。江口渙氏は氏と加藤武雄の兩氏を鄕土藝術家の双璧と激賞してゐる。又氏は長谷川二葉亭を評した語の中に日本の生んだ作家の中で二葉亭ほどのものは無いと言つてゐる處に氏の文藝に對する狙ひ所が略々察せられる。近來創作欲が旺盛になつたものと見えて小說「サンタの死」「その後の舊先生」「或體操教師の死」「少年の群」「若き修道者」「ぽんちの教授」隨筆「猶太の農場」「北海道の樹」「行啓」の外性慾と戀愛といふやうな評論など矢繼ぎ早に書いてゐる。「その後の舊先生」のごときは詩的情緒の豐かなものであり、「若き修道者」はトラピスト修道院に對する忠實な報告說明だけでなく、一種の氣分を釀成するところのよい作である。大正十三年勞働者の群に入つて妻と共に筋肉勞働の生活に入つた。

現住所　東京市小石川區雜司ヶ谷町一一五

藤森秀夫　フジモリヒデオ（詩）

明治二十七年三月一日長野縣北安曇郡池田町に生れ、第一高等學校を經て、大正七年東京帝國大學獨文科を卒業し、明治大學の豫科に教鞭を執り、後慶大豫科教授となつて今日に至つた。詩集「こけもも」「フリヂヤ」童謠集「おもちやの日本橋」對譯集「近代獨逸名詩選」等の著がある。

蚋の歌

「馬頭觀音、耳かせろ
柳の蔭の、觀世音。
去年の夏の、大水に
溺れて死んだ、倉公の
馬の供養の、觀世音」

春の小川の、散る波が
碎けて生れた、蚋の兒等、
餘澤淵の、柳の蔭に、
行列作つて、觀音參り、
羽根を疊んで摩り合せ、
「馬頭觀音、耳かせろ」
馬頭觀音、片目を開き、
片耳明けて、耳かせた。
「何をぶんぶん、ぶとの兒めらが
云ひ度い事が、あるものか？」

一羽の蟆子の云ふ事に
「馬頭觀音、よく、耳かせた。
ぶよにもぶよの、云ふ事がある。
去年溺れた、倉公の馬は
今頃、何になつたのか？」

倉公の家の運送車は
雪が溶けても、早苗が生えても
普請があらうが、仕事に出ない。
倉公の兒供が、八人寄つて
毎日押しても、動きはしない。」

母は床へ就いて、二年越、
青葉が映つて、物凄い。
馬に死なれた、倉公の家は
夏が來たとて、夏ぢやない。
馬頭觀音、馬かしてやれ」

馬頭觀音、兩耳明けた
「何をぶんぶん、ふよの兒めらよ、
一つの望みで、足らないか？
馬の生血が、吸ひたくなくば
何で、お前等に、願があらうぞ？」

現住所　東京府下雜司ケ谷四八二

故藤原忠朝　フジワラタヾトモ（歌）

岡山縣上道郡竹原村の人、父は岡田利平と言つて油を搾るを業とした。歳十三の時岡山市片上町の酒家小原某の家僕となり虎平と稱した。性質極めて眞率で虛飾が無く、精勤業を勵んで、常に酒樽を荷つて市中を奔走した。或日書店を過ぎて一小雜誌を購つて之を讀むに、中に「花になくうぐひす水にすむかはづの聲を聞けば生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける。」とあつた。

虎平は其の譯がよく分らなかつた。けれども何となく恍然として略々其の大意を得ることが出來た。これより一生を歌に捧げようとし、爾來精勵刻苦してその學を修めた。當時岡山に島岡眞心と言ふものが居たが、此人宗蝶と號して和歌をよくした。そして生徒の爲に百人一首を講じた。虎平早速主人の許可を得て其の門に入らうとした。然るに眞心其の幼くて且他家の僕傭であると言ふことを以て許さなかつた。そこで虎平はしようことなしに和歌一首を留めて此處を去つた。眞心は其歌を見て吃驚し自分の不明無鑑識を愧ぢ且つ悔いて、跡を追つて酒屋に行き虎平に罪を謝し精勵和歌の研究を爲るやうに勸めた。そこで虎平はその門人と爲つて拮据精進して寢食を忘れた。この頃出雲大社の祠官に中臣正蔭と言ふものがあつた。

この人千家尊孫の命を受けて岡山に來往し、虎平の敏慧で歌に巧なのを以て召見された。そこで虎平は直に

あはれ世の人に一度ますらをと言はれてこそは
死なまほしけれ

と詠じたので、正蔭は舌を卷いて驚いた。十八歳の時酒屋小原家を辭し西大寺に至り藥種商槌屋に傭はれた。西大寺に近い淺越村に矢定美童と言ふ歌人が居つた。虎平は業務の餘暇毎月こゝに行き時に或は一夜百首を詠じて曉を徹することさへあつた。

これより技益々進み終に志を決して紀州和歌山に至り加納諸平の門に遊び、留學三年の後歸つて藤原某に養はれ其の嗣となつた。乾魚を常に販賣しつゝ至る所吟詠を殘してゐる。曾て作州七曲の山路を行く時、後方に聲がするので荷物を卸して見ると正蔭であつた。兩人は奇遇を感じ夜は正蔭の旅宿に投じ、徹宵語り明したと言はれてゐる。明治二十六年四月十七日七十三歳で歿した。門人數百の多きに達した。

筆谷等觀　フデタニトウカン（畫）

名は儀三郎、別に白夢樓、太虛堂の號があり、明治八年一月二十一日北海道小樽區信香町二十三番地に生れた。天性畫を好み、夙に橋本雅邦に師事して專ら狩野派の畫法を研究し、更に進んで東京美術學校に入り、三十三年日本畫選科を卒業し、殊に人物、山水を能くする。爾來二葉會、東京勸業博覽會、文部省美術展覽會、美術研精會、其他諸種の畫會に出品して銅牌、褒賞狀等を受領すること數回に及んでゐる。帝國繪畫協會、紅綠會、美術研精會、東台畫會の會員であるが院展に「低徊」「霽る、朝霧、暮るゝ峠路」「たそがれ」「貧者の一燈」を出して同人に推され、その第四回展覽會には「徐福」を出した。

現住所　東京市牛込區余丁町

舟木重雄　フナキシゲオ（文）

明治十七年十二月二十五日東京市芝區巴町に生れた。麻布中學立教中學を經て大正二年早稲田大學哲學科を卒業し、大正二年より同九年まで東京の淺草女學校講師を勤めた。「小泉講師の懺悔」「作品と人々」等の作がある。早大文學部助教授。

現住所　東京市外駒澤村上馬引澤五八九

舟木重信　フナキシゲノブ（文）

明治二十六年七月廣島縣江田島に生れた。重雄氏の弟、芳江女史の兄。麻布中學、岡山第六高等學校を經て東京帝國大學文科を卒業し著作の傍ら早稲田大學講師をしてゐる。短篇集「樂園の外」翻譯「タウリスのイフヰゲーニエ」其の他を出してゐる。「イフヰゲーニエ」は完成に近い神の如きゲーテの第一の著作であつてこれこそ彼の藝術の眞髓であり同時に古典藝術の頂點であると言はれてゐるものである。大正十一年島田清次郎氏の事件落着後歐洲大陸文學研究の爲め渡歐し、長く獨逸に滯留してその國の文學について內的考察をなしたが夫人危篤の報に接して大正十三年五月六日歸朝した。

現住所　東京市外上大崎長者丸二七〇

普門曉　フモンサトル（畫）

明治二十六年東京に生れ、川端洋畫研究所其他で學び、二科會第五回に「フューモレスク」を出し大正八年奈良市に於て足立源一郎等と作品を展覽した。未來派風の作家の一人として特異の地位を占めてゐる。

現住所　東京市下谷區池の端七軒町三八、三笠ハウス方

古手川忠助　フルテガワチユウスケ（小）

創作「水平」は特殊部落の一青年が深刻な社會苦時代苦に惱み平等愛への熾烈極まる憧憬をあらはしたる力作であつて、島崎藤村氏の破戒などのやうに現代社會の悲慘な實相を思ひ切つて力强く描寫してゐる。

現住所

古屋芳雄　フルヤヨシオ（文）

明治二十三年八月二十七日大分縣速見郡山番町に生れ大正五年東京帝國大學醫科大學を卒業して、東京醫學專門學校に奉職して細菌學の教授をしてゐる。そしてその生物學の一分科たる血精學の研究と教授をやつてゐる間に於て、この見通しのつかぬ廣大な宇宙を藏してゐる血精の神秘によつて多くの藝術的直觀と宗教的敬虔とをめぐまれてゐる。自然科學者として畑違ひのペンを執る文學者は何時の時代でもあるものだが殊に醫師と學者とは附き者と見えて本居宣長、森林太郎の兩大家を始として古今東西其の例が甚多い。大野洒竹の俳句、井上通泰、齋藤茂吉の和歌、坂田九峯、永坂石埭の詩書と數へあげればきりさいげんがない。處がその中の一人なる氏がその他の人々と違ふ處は、多くの人が道樂であり趣味であるのに引換へて、氏に取つては全人格的活動であつて氣休めのための藝術道樂とは違ふ點である。「地を嗣ぐ者」「樹間の光」「暗夜」「見果てぬ夢」「ダビデ王」の外に評論「或る寂しき夜の幻想」隨筆「うたかたの記」感想「救はるゝといふことの意味について」「生命を抱きかゝへて」「幽靈の演出を見て」「逆行藝術を排す」等の作を公にしてゐる。氏は基督教を通じて人類愛を高唱してゐるので倉田百三氏は「古屋氏に於て心の貧しき人を見出し得たることを心より悅ぶ」と序してゐる。

現住所　東京府下下落合村二一一三

へ の 部

碧流舍川柳　ヘキリユウシヤセンリユウ（川）

明治八年八月二十三日東京日本橋區元柳町に生れた。姓を小森名を元吉といふ。明治三十二年年齡僅かに二十三歳で某炭礦會社に入つて營業部次長

として會計監督をも兼ねたが大正六年七月病氣の爲に職を辭し閑散裡に風月を友として現在に至つた。性來文藝を嗜み殊に創と音曲に趣味を有し長唄を四世杵屋勝五郎に習得した。明治二十五年四月碧竹堂花月の門に入つて蕉風俳諧を學び碧流金花鷗と稱し別に柳霞樓和洲の號がある。狂歌を蟹廻舍左文秋農屋望成に就いて學び、柳風狂句は綠亭、狂句堂、深翠亭の九、十、十一の三世に亘つて其道に遊び、大正十二年六月二十二日東京柳風會の推薦によつて川柳宗家十二世を繼承して其京柳風會を率ゐるに至つた。氏の川柳中有名なものに

世界の相場動かしてゐる米屋
酒井家は太鼓と雅樂で鳴り響き
涙香の筆に泣かせる噫無情

といふのがある。取材といひ着想といひ從來の川柳とは著しく現代的になつてゐるのが誰にも氣が附くのである。

現住所 東京日本橋區吉川町二

別所梅之助 ベッショウメノスケ（文）

氏は登山家として思想家として知られてゐる。「山の會」の主腦者であり、登山趣味宣傳の講演をもして斯道の爲に努力してゐる。其間隨筆や短歌などを公にしてゐる。警醒社より發行した「ひとりの歌」は氏の第一歌集であるが、何れも大自然と對座して涌き出た眞の聲で無いものは無い。

現住所 東京市青山高樹町二〇

ホの部

故帆足杏雨 ホアシキヨウウ（畫）

豐後國戸次の人で名は遠、號は致大。畫を南宗畫の大家田能村竹田及浦上春琴に學び、詩史を帆足萬里、廣瀨淡窗、賴山陽に修め弘化中大畫を作つて禁中に納めた。畫は山水に最も長じ、筆致豐潤

師の正脈を傳へて地方に覊を稱した。明治五年澳利博覽會に出品したる外各種の展覽會に出して屢々受賞した。明治十六年五月十六日七十五歳で病歿した。「聽秋閣模古式」の著がある。

故星野恒 ホシノヒサシ（漢）

號は豐城、越後國白根町に生れ、二十一歳の時僅かな資金を懷いて江戸に出で、鹽谷宕蔭の下僕となつて苦學した。かくすること數年の後鄕里に歸り明治元年鄕里に於て私塾を開いて子弟を教育したが同八年再び上京して修史館三等協修となり、二十一年文科大學教授に任じ文學博士を授けられた。四十五年忝くも明治照憲兩陛下に進講の光榮を荷ひ歡喜措くところを知らなかつた。氏は頗る篤學の人であつて病中であつても一日も書見を廢しなかつた。大正六年九月十日七十九の高齡で豪去した。

星野更園 ホシノコウエン（畫）

前姓岡本。名は延子。明治二十八年三月大阪に生れた。岡本大更の妹で、兄に就て學び、美人畫を得意とし、文展へは第八回に「秋のうた」第十回に「仕舞の部屋」を出した。大阪にあつて多くの門人を指導してゐる。

現住所 東京市本鄕區曙町五、安藤方

星野潤一 ホシノジュンイチ（小）

明治二十九年十二月東京京橋區木挽町に生れ、文海小學校卒業以後獨學によつて大に文學を研究し現に會社員として勤務しつゝ創作に從つてゐる。小說「泥」「破綻」「異國人」戲曲「暗き人々」「サシュカ」其の他童話等の作がある。文藝雜誌「藝術運動」の主幹をしてゐる。

震災前の住所 東京京橋區月島西仲通三ノ四

星野麥人 ホシノバクジン（俳）

名は仙吉、明治十年四月十三日東京牛込に生れた。野崎柴今、酒葉月人等と俳句を始め、角田竹

冷氏の慫慂によつて秋聲會に接近し、自然「木太刀」へ投出するやうになつた。後翠華氏と晩鐘會を起して、俳諧の小雜誌「俳籔」を發行したが、これより當時の小說家で俳諧の宗匠である尾崎紅葉の後援を得ることになり、又其の十千萬堂社中に入つて大に研究し多く作つた。「俳籔」は後に「文籔」と改めて紅葉の主宰に移り、後再び「俳籔」を再興して「卯杖」に合し、更に「木太刀」と改めて氏の主宰するところとなつた。氏はさきに軟文學の珍書房に十年あつて西鶴以來の軟文學を讀み、俳書をも學んで紅葉、洒竹、知十、竹冷の諸大家と相知つた。後「日本大學」「國民英學會」に通ひ、石橋思案の教をも受けたが、小說家としては成功しなかつた。氏の句は夙に「毎日」「日本」等に出したが、紅葉の輯めた「新潮」や「木太刀俳句鈔」等にも收められてゐる。著書には「俳句大觀」「百家俳句全集」「紅葉書翰抄」等がある。

雷の鳴りさうな日を頭痛かな。

門を出て海嬉しさよ夏の月。
蘭の葉の纔に風に薫りかな。
兩側に町の柳や青あらし。
頂の湖に遊ぶや夏の山。
つとめての夏野を急ぐ旅人かな。

現住所　東京市牛込區築地町一二

故細川潤次郎　ホソカワジユンジロウ（書）

舊高知藩士、十洲と號して文章を作り文字を書く初め藩黌に入つて學んだが、その頃間木哲馬、岩崎馬之助、同彌太郎の諸氏も來遊して高知の四神童と稱せられた。數年の後蘭學を長崎で修め、安政五年藩命をもつて江戸に到り、幕府操練場にはいつて航海道を學び傍ら同藩の師弟を教導し、已にして成業の後汽船上海を購入し、其養成した子弟を乘せて土佐に歸つた。當時彌太郎氏は土佐に在つて未だ汽船の何物たるを知らなかつたが、之を見て始めて志を海運業に決したといふことである。明治四年氏官選によつて歐米に留學し、歸朝

後元老院の設立に際して其の議官に任ぜられ、二十三年同院廢止せられるので貴族院議員に勅選され、第二期以來屢副議長となつた。後女子高等師範學校長を兼ね、二十六年五月樞密顧問官に任ぜられて貴族院議員を辭した。尋いで文事秘書官長に兼任し、華族女學校々長、學習院々長等を命ぜられ、次いで議定官、宗秩寮審議官等の諸官に就いた。さきに文學博士の學位を授けられ、功績によつて男爵を賜はつて華族に列せられた。又選ばれて學士會々員となつて最高學者の一員となつた。著書に「名なし草」「梧園畫話」「近世畫史」「養蘭須知」「隱逸全傳」「近遊日錄」「峽程記」「毛遊記程」「新國紀行」等ある。二人の指物師といふ名文を載せた「名なし草」は上下二卷より成つて、氏が多年見聞した事實を記した隨筆で、奇人、義士、の傳記や種々の諷刺があつて世教に關することが多い。氏は亦書を巧にして出張した處の諸學校には大抵その額面を見る。大正十三年九十歳の高齡を以て病氣のため薨去した。

宮城始成恭賦

壯麗彈レ財不レ忍レ爲、　造宮　只欲レ行二朝儀一、
聖皇　儉德　高二千古一、　三尺堯階豈道レ卑、
過二桶氏墓一

一代經　綸極二苦辛一、　孰　知天　意出二斯人一、
南枝　重入　君王　夢、　本是　當年　金甲　神、
謝二春松園主人惠墨一

解レ絛開二漆匣一、一笏出レ模　新、　豈入　豹囊　匿、
欲　兼龍　尾親、　不レ同貪　墨吏、　每伴　草玄　人、
餘瀋　猶堪レ染、　吾頭　白似レ銀、

生前住所　東京市神田區駿河臺北甲賀町一

故細川風谷　ホソカワフウコク（小）

講談師、通稱は源太郎といつて土佐の人であつて學に志し上京して始め天台居士杉浦重剛氏の稱好塾に學び、明治十七八年頃米國に航して大に苦學し、歸朝の後尾崎紅葉一派の硯友社に入つて數種の小說を著した。後日本郵船會社に入つて外國航船の事務長となつたが性質頗る講談を好み終に職

を辭して新講談を以て世に處するやうになつた。爾來諸方に聘せられて得意の長講をやつても而も未だ寄席には出演しない。嘗て皇太子殿下の御前講演を辱うした事がある。大正八年十月十八日年五十二で病死した。

細田源吉　ホソダゲンキチ（小）

明治二十四年六月一日、東京麻布の池田家に生れ後埼玉縣川越町細田丑太郎氏の養子となつた。從つて小學教育は川越町に於て受け、後文學に志して早稲田大學に入り、大正四年英文科を卒業した。長篇小說「罪に立つ」「存在」短篇集「死を恃む女」等を著した外に小說「空虛」「少年の頃」「二事件」「夜道」等多くの作を示してゐる。

現住所　東京市牛込區下戸塚町一三

細田劍堂　ホソダケンドウ（漢）

名は謙藏、伯耆の人、幼少より二松學舍に學び、後東京帝國大學漢文別科を卒業の後、長く奈良女子高等師範學校教授の職に在つたが、大正七年東京女子高等師範學校教授に轉じ、三島翁の二松舍にも教鞭を執り、傍「雅文會」の中心となり編纂に從ひ、作詩は「大正詩文」又は「斯文」等に寄稿してゐる。

題蘭

綏綏鳳鳳尾、　幾莖抽紫芽、　幽香風外敬、
輕蘂露邊斜、　當入明王室、　仍隨處士家、
縱然伍凡卉、　馨德孰能遮、

春石は用筆高超にして一の凡響無しと評してゐるが、その通りである。

詩文會席上作

雲上騎箕既一霜、　每思遺範輙回腸、
多才同善文詩字、　博學兼通和漢洋、
藝苑夙憂絕嘉木、　儒杯偏翼發群芳、
九泉有識定莞爾、　緒業追年益擴張、

不二山頂卽興

我登不二山、　絕頂一回首、　雄濶壓三州、
孤高空萬有、　冷然躬御風、　惚爾掌摩斗、
泰岳將衡山、　視此唯培塿、

內田遠湖この詩を評して三四壯快、五六飄逸と蓋し自由の筆想見すべしである。

細田民樹　ホソダタミジユ（小）

明治二十五年九月一日東京府南葛飾郡瑞穗村に生れ、七歳の時父の鄕里廣島縣壬生町に歸り、中學校を卒業するまで同地に在つた。明治四十四年廣島縣立第一中學校を卒業後早稲田大學に入り、大正四年その英文科を卒業した。同年十二月騎兵第五聯隊へ入營し大正七年十一月まで服役して除隊した。八年十二月新小說に書いたある境涯は作者の長き軍隊生活の後の力作であり、文章世界に出した「女をめぐる父子」の如きも好評があつた。著書に「惱める破婚者」「極みなき破局」「妹の戀」「母の零落」「凱旋」等の外「日の下に」「或兵卒の記錄」「同胞」等の長篇がある。評論にも筆を執つて「ドストイエフスキーの人生觀」「プロレタリヤ文學宣傳者に與ふ」「ふたつの傾向」「無產階級の藝術に就いて平林初之輔君に」等があり「赤い鳥」其他の雜誌に多くの童話を寄稿してゐる。

現住所　東京市牛込區北町四一

堀內新泉　ホリウチシンセン（小）

名は文麿、明治六年九月京都に生れ、東京英語學校卒業後、元の第一高等中學に入學したが、事情あつて中途で退學した。「人間學」「現代執務法」「業才學」「現代女大學」「農村青年夜學讀本」「人の兄」等の外家庭小說を多く著してゐる。

現住所　東京市本鄕區駒込千駄木町二四五

堀江朔　ホリエサク（評）

明治二十四年二月千葉縣木更津に生れ、早稲田大學英文科を卒業し、多くの文藝評論を著してゐる。

現住所　東京市牛込區喜久井町五六

堀木克三　ホリキコクゾウ（評）

明治二十五年七月二十三日三重縣飯南郡射和村中萬に生れ、津中學を經て早稲田大學に入り、大正六年英文科を卒業した。私立攻玉中學校教師として教鞭を執つて居る傍ら多くの文藝評論を書いてゐる。

現住所　東京市牛込區赤城下町三七

堀口大學　ホリグチダイガク（詩）

明治二十五年一月東京本郷に生れた。慶應義塾大學に學びのち或は西班牙或はブラジルと歐米に七年間遊んだ。大正六年一月歸朝の後詩歌の創作や翻譯を盛に公にし又多情多恨の詩風は文壇の異彩と稱せられてゐる。日本詩人の群（Quelque Zeunes Poets Japanais）（仏譯）詩集「月光とピエロ」歌集「パンの笛」翻譯「昨日の花」「水色の瞳」等の著の外近くは「遠き薔薇」の詩集がある。「遠き薔薇」には秋のピエロ以下すべて數十篇いづれも作中の精粹を拔いたもので哀婉の情高華の詞人を魅せずんば止まないものである。尚最近に著したものにフイリツプ短篇集がある。

雨

ポプラの木の中にはやさしい空氣
地の上には雨しづく
肱ついた詩人が
地の上の雨のしづくと
ポプラの木の中の生溫い空氣とを夢みてゐる

木の葉、つぶやくものかげ
きらめく光、きらめくもの影
肱ついて詩人が
木の葉とつぶやくもの影と
踊つてゐる怠惰ともの憂さとを夢みてゐる

やはらかい木の葉。ゆつたりしたしづく
そよ風、しめり氣、かげ、光……
肱ついた詩人が
流動する木の葉と生溫かい風に
地の上のやはらかい雨のしづくとを夢みてゐる

現住所　在外

堀　進二　ホリシンジ（畫）

明治二十三年五月東京赤坂に生れ、初め新海竹太郎に就き、後、太平洋畫家研究所に入つて彫刻を學んだ。文展へは第三回に「のび」第五回に「哀愁」第八回に「光に浴せる女」第九回に「若き女の胸像」等を出して褒狀を得第十回に「H老人の肖像」第十一回に「肖像」等を出すに及んで遂に特選となつた。太平洋畫會會員であり、帝展で推薦となつた。

現住所　東京市下谷區谷中上三崎南町六一

故堀　秀成　ホリヒデナリ（國）

氏は和學者で琴舍と號し常陸國茨城の人である。制度の學を修め最も善く音韻の事を研究した。故に音韻のことについての著書が百餘種もある明治の初め東京に居り後伊勢神宮に聘せられて同所の生徒を薫陶した。其の辯は頗る流暢で講義に演說によく人を感動せしめたさうである。又文章に自在で特に諧戲の筆は六樹園（石川雅望）の文に超えたとも言はれる。「磯山千鳥」と題せるものの如きは寫本ながら世に流布してゐる。明治十七八年の頃讃岐琴平神社教會所の教師に聘せられ、同二十一年同所に歿した。年七十一。著書殆ど三百種に及ぶと云ふことである。國文學者落合直文及その養父落合直亮は實に氏の門に學んだのであつた。

（學系）

本居宣長―同春庭―富樫廣蔭―堀秀成―落合直亮―同　直文

本多綿吉郎　ホンダキンキチロウ（畫）

江泥、契山等の號がある。廣島の藩士で嘉永三年十二月江戸青山に生れ、文久年間廣島に歸り、後藩命によつて英人に就て英學を學び、明治五年、

東京に於て工部測量司傳習生となり、英人について英學と洋畫の端緒を受け、七年、國澤新九郎の彰技堂に入り、十年卒業し、神田今川小路に私立繪畫學校を開いたが師の歿後、彰技堂の後を繼いだ。此年、內國勸業博覽會に出品して受賞し、十三年、牛込新小川町に畫塾を開き、十四年、「畫法臨本」「鉛筆畫法」「人像畫法」等を著し、十七年、陸軍士官學校教授となり、三十七年之を辭した。氏は明治洋畫界の先進であるのみでなく、寫眞石版等の事業にも盡す所があり、又「圖解庭造法」「日本名園圖譜」等の著もある。門下に丸山晩霞小川芋錢、下村爲山、岡精一等の名家がある。

現住所 東京市牛込區新小川町二丁目八

故本田種竹 ホンダシユチク（詩）

阿波德島の藩士、東京の詩人である。通稱幸之介諱は秀、字は實卿、種竹は其號である。曾て萬朝報社及日本新聞社等の文苑欄を擔當した。其著に「梅花百花」「畫水百律」「懷古詩存等數種ある。

氏は早熟の天才であつて、二十歳の頃既に堂々たる一家となつて名を東西に走せたが明治四十一年病の爲に歿した。

大正十一年氏の十五年祭に當つて豐後の詩人阿井笛村の詠んだ詩に次のやうなのがある。

種竹十五年祭次鷺洲公韻

花前月下幾唐酬、　白社風流翰墨游、
昨夢驚回十五歳、　山陽一笛不勝秋、

生前住所 東京市下谷區上根岸町一一七

本間俊平 ホンマシユンペイ（小）

氏は一小木匠に身を起し、惡戰苦鬪十年の後宮內省技師となつて、赤坂御所の建造に快腕を揮ひ、再轉人間建築を志して長門秋吉山に退き、大理石を採堀彫琢しつゝ青年の教養に血涙を搾る。その熱血の辯、鐵槌と聖書による人間改造の報告書ともいふべき著書として「一石工の信仰」といふのを隆文館より發行してゐる。また「勞働と信仰」といふのもその姉妹篇として廣く讀まれてゐる。

現住所 未詳

本間久雄 ホンマヒサヲ（評）

明治十九年十月十一日米澤市越後番匠に生れた。明治四十二年早大英文科を卒業して現に同校の講師である。嘗てワイルドを研究したものを發表したが、近頃はエレンケイの研究より出發して、日本や外國の婦人問題を盛に取扱つたものを公にしてゐる。文章明快理路整然目下早稻田文學編輯主任並藝術座脚本部員である。ワイルドの「獄中記」「ドリアングレー」及童話集「柘榴の家」エレン、ケイの「婦人と道德」「來るべき時代の爲に」ヒルンの藝術の起原」等の飜譯の外「新文學概論」「近代文學の研究」「高臺より」「エレン、ケイ思想の眞髓へ「現代の婦人問題」等の外新著エレンケイ原著「戀愛と道德」の飜譯等の著がある。「戀愛と道德」はエレン戀愛道德の提唱者として結婚の革命家として當代第一人者の稱あるエレンケイ女史が自已の主張を最も直截に簡明に說いたもので、厨川白村氏の近代の戀愛觀と共にこの方面の研究者にいろ〳〵の暗示を與へるものである。更に氏は最近に戀愛の殉教者を著したがこれはデカメロンの哀切なる戀物語、沙翁の「ロミオとジユリエツト」並に日本の西鶴近松の心中物等の戀物語を文化史的に解說して文藝復興期文學に現はれたる戀愛の殉教者の面影を髣髴せしめ、更に最近に於ける最も深刻なる戀愛三角關係の悲劇を論じて、近代的戀愛の究竟境を說き戀愛の人生に於ける價値を高調し若き男女に戀愛の新目標を示したるものである。尙最近發表した評論としては「結婚の過去及現在」「文壇の近事を報ずる書」「國定教科書に現れたる軍國主義を評す」「婦人と世界平和」「婦人思想變遷史」等がある。

現住所 東京市小石川區雜司ヶ谷町一四四

マの部

前川素泉　マエカワソセン（俳）

名は和三郎、明治五年三月一日三重縣一志郡高岡村大字高野に生れ、三重縣立中學校を卒業して三井銀行に入り、四十四年に退職して郷里の銀行に勤めてゐる。氏は三十一年頃新俳句に志して神戸青葉會に入り、後二葉會を起して雜誌花葵を發行したが永續しなかつた。「寶船」其の他地方雜誌の選者となつたこともあるが今は一切を辭してゐる。氏の句は「日本」「日本及日本人」「國民新聞」「寶船」等に投稿し「春夏秋冬」「續春夏秋冬」「新春夏秋冬」等に採錄されてゐる。著書には自選句集「疊巖餘瀝」がある。

走り穗の麥に蝶飛ぶ四月哉
短夜や雨戸もさゝず溫泉の二階
繭を煮る庭の竈や花柑子
鳥渡る晴れや引板郷添水郷
蛙鳴く燈心艸に水滿てり

現住所　三重縣一志郡高岡村

前田晃　マエダアキラ（小）

明治十二年一月十五日山梨縣東山梨郡八幡村に生れ、苦學して早稻田大學哲學科並英文科を卒業した。自然主義勃興當時田山花袋を助けて七年の間文章世界の記者となり木城の號を以て鋭い批評の筆を揮つた。翻譯に「キイランド集」「モオパスサン集」「チエホフ集」「ゴンクウルの陷穽」「影繪」「兄の憂愁」等があり長篇小說に「二つの戀」隨筆感想を書いたものに「生きたる文章の道」「領主と旅藝人」がある。福岡日々に執筆中の小說「曉霧」は大に讀者を喜ばせた。

翻譯「生の誘惑」はモウパツサン全集の第二卷で「生の誘惑」「中流人の日曜日」「歸村」「墓」「頸飾」「盲人」「大佐の意見」「宿屋」等の短篇十五種を集めてゐるが、中にも「中流人の日曜日」は

全體に飄逸味があつて特に面白い。言行態度共に超然としてゐて周圍の人に不可解なるがため、反つて上長官から畏れられ、地位が高まつて行つたある屬官の話だ。モウパツサンの短篇には長篇と異つて面白い味を持つてゐる。輕妙な皮肉警句の間に、寸鐵人を刺すやうなあるものをもつてゐる。氏はもと讀賣新聞の婦人部長をしてゐたことがあるが今は翻譯と創作とに從つてゐる。

現住所　東京市外高田町狐塚

前田河廣一郎　マエダガワヒロイチロウ（小）

明治二十一年十一月十三日仙臺市空堀町一に生れ宮城縣立第一中學を五年級まで學んだが、事情あつて半途退學し、十九歲の時渡米し、皿洗、菓子屋職工、百姓、水夫、其他各種の職業を經て十三ケ年目に歸朝し、雜誌「中外」の編輯、「日本讀書界」等には入つたことがある。短篇集「三等船客」及び翻譯「ボルシエヴイキの理論と實際」等の著を出してゐる。評論には「ペンの鬪爭性」「提灯を持たざる辯」「階級鬪爭批判」「熱砂に書ける」「ジヤク・ロンドンと私」「クオ・ヴヂス？」「危險なる夢想主義者」等多くは社會問題を取扱つたものである。氏はブルジョア階級に對して挑戰的態度を取つてゐる急進派過激派の作家と言はれてゐるが、實際自己の生活がいかに行きつまつても、露國飢饉民には率先して金を送つたのを見てもその眞劍さがわかる。氏の創作を見るにコセ〳〵しないで、極めて堂々としてゐる。そして廣々とした主觀の中に社會現象を包括し融會して行く手際は、もう大家の面影がある。

現住所　東京市小石川區雜司ケ谷町一一九

故前田香雪　マエダコウセツ（彫）

東京の人。天保十二年正月生れた。名は夏繁、香雪と號した。通稱は健次郎。明治初年「繪入朝野新聞」を起し、又龍池會の組織に盡し、爾來美術界では日本美術協會委員副長、東京彫工會幹事兼講師、日本漆工會考査委員、日本金工協會、鑑定

會、好古會等の創立に何れも與つて力あり、專ら國粹美術の發揮に努力した。第四、五回の內國勸業博覽會に審査員となり、美術學校の講師及古社寺保存會委員となつたこともある。又夙に國學詩文に通じてあつた。大正五年十二月年七十五で病歿した。

前田春聲　マエダシユンセイ（詩）

名は鐵之助、明治二十九年四月一日東京市本郷區森川町に生れ、小石川小學校を卒業の後、正則英語學校に學び、メタクサ夫人に就いて佛獨語を學んだ。嘗て東京遞信局工務部に給仕となり、後横濱及び東京外國郵便課に勤めたことがある。「新潮」「日本詩人」「白孔雀」等の諸雜誌に「詩」「評傳」等を書いてゐる。著書に詩集「韻律と獨語」がある。

海にて

私達の愛は深くまじる。
愛するものよ、

愛する御身の心よ。
ひし〳〵と波はせまつてくる、
おゝ、私達の前に擴がる蒼い大海。

いざ、
いま一度び、
清められた砂濱の上に
夕暮の深いやすらひを吸はう。

愛するものよ、
繰返す接吻のいみじさ
すべてのものゝ深いよろこび、
ともなるよろこび。

あゝ、海の上に光る
星の光の燦めきにさへ、
限りなき波の響に觸れ、
私達の心に沈み、
愛の心は現はれる。

愛するものよ
また、御身の心よ。
海のやうにせまり
深い、深い、感謝に、
私達の心が響いて居る。

現住所　東京市小石川區茗荷谷町五五

前田曙山　マエダショザン（文）

氏の家は代々德川氏の旗下であるが、明治になつて父君が新政府に奉仕し角田縣（陸前）の大屬をしてゐたので、其の出張所たる郡代の官舍で明治四年十一月生れた。代官屋敷は東京市日本橋區馬喰町にあつた。氏の大伯父に當る人が典醫香取員益と言つて漢學者であると共に蘭學者であつた。筆墨に親しむことを好む氏にはこの大伯父の血が流れてゐるのである。氏は花卉園藝が好きで、學生時代から趣味を以て研究したものである。從つて氏には文士には珍らしくも花卉園藝に關する著書少くない。園藝文庫全十四卷高山植物叢書、曙山園藝、趣味の栽培、野草の栽培、花幸裝飾法等がある。文學ものでは小說倶樂部、面白倶樂部、現代等に人情小說や歷史小說などを書いてゐる。「暮れ行く影」「燃ゆる渦卷」等は多くの讀者を得たものである。

現住所　東京市外日暮里元金杉一五一

前田青邨　マエダセイソン（畫）

明治十七年名古屋市に生れ、三十四年上京して直ちに梶田半古の門に入り、紅兒會會員となり、諸所の展覽會に出品し、文展へは第五回に「竹取」「法華經」第六回に「御輿振」を出して褒狀又は三等賞を得たが、大正三年日本美術院の再興第一回に「竹取」を出して同人となり、第二回に「朝鮮の春」第三回に「京名所八題」第四回に「切支丹と佛徒」を出し、大正七年日本美術院評議員となつた。大正十二年八月外遊より歸つた。

現住所　横濱市東神奈川渡邊山一七一七

前田普羅　マエダフラ（俳）

名は忠吉、明治十九年四月十八日東京に生れ、中學校卒業後京都に行き、東京に歸つて早稲田大學英文科に這入つたが二年半途で退學し、横濱に移つて官吏生活をなし、六年の後新聞記者となつた。氏は少年の頃より母の感化によつて俳句に興味を感じ、十六歳の時句作を試み、四十三年頃より高濱虛子氏の指導を受けて熱中したが、本職の多忙によつて作句を怠るやうになつた。作句は「ホトヽギス」に投稿したものが「ホトヽギス雜詠集」等に掲載されてゐる。餘技として南宗畫をよくする。

五月雨に蛙の渉る大河かな
五月雨れて又火鉢見る山家かな
一鍬に培ふ苗や五月雨
林中に打たるゝ花や五月雨
藪主の歩くや梅雨の一翻り

震災前の住所　横濱市北方町三六八

故前田默鳳　マエダモクホウ（書）

氏は播州龍野藩士で東京の書家である。名は圓、字は四方、默鳳は其號で、別に龍野人の號がある。前田忠作の二男で嘉永六年三月播磨に生れ幼より書を好んだ。年十六の時藩の佐華助役となり明治六年して倪文韻府、資治通鑑、康熙字典等の翻刻に從事し、十五年清國に渡り書法を研究し、歸朝後感ずるところあつて十餘年の久しい間閑居した。この間大に篆隸六朝の蘊奥を極め、本邦一流の篆隸家を以て稱せられるに至つた。後世の六朝風と言へば必ず一種異樣の風姿をもつてゐなければならぬものゝやうに思つてゐるものがあつていやに歪めた文字や不揃に不均齊に故意で書いたものが日に日に多くなつてゐるが、あれは一種の邪道であつて決して正しい傳統の六朝とは言へぬ。歪んだものが六朝だ肩の張つた文字が六朝だといふ既成觀念から來るところのものである。但し氏の六朝にあつては少しもいやみがなく、極めて上品なものである。「書海」「行草辭彙」五大字辨篆文精華等の著書がある。又鐘鼎彝器を好んで寫し、墨竹を畫くを樂しみとしてゐたが大正七年十一月十九日病歿した。年六十六。「書鑑」「書海」「眞行草大辭典」「五体辭書」「假字彙纂」「三体字鑑」「書訣」「東亞新字稿」「印文學」「書學捷徑」等の著がある。

前田夕暮　マエダユウグレ（歌）

本名は洋造通稱洋三、明治十六年七月二十六日相模國中郡大根村南矢名に生れた。小學校の外取立てゝ書くべき學歴はない。尾上柴舟の門に學び若山牧水等と共に車前草社を結んだが後牧水の純情派に對し氏は理知派とも言ふべき一派を樹て自然主義的傾向を短歌に現はした。三十九年白日社を起し四十年詩歌を中心とした雜誌「向日葵」を發行し、四十四年短歌雜誌「詩歌」を創刊して歌壇の一勢力となつたが大正七年廢刊した。歌集には「收獲」「生くる日に」「陰影」「黑曜集」「深林」「前田夕暮集」著書に「歌話と評釋」「短歌雜話」等がある。歌人として牧水と並び稱せられ所謂牧水夕暮時代をつくつたことがある。

大正七年の暮八年間繼續の雜誌「詩歌」を廢刊するの止むなきに至つた時の所感に「おのれより眞に生かす朝より寂しき道はえらびけるかも」の歌がある。

尙實業方面には關東木材合資會社を起し、又別に相模製材會社を經營し、山林業に從事して今日に至つた。

あかあかと沼の底ひに日輪のくだりておよぐ眞晝なりけり
日のあたる庭におりたちふとのぞく廊下の下の春の靑草

現住所　東京市外西大久保一二八

前田林外　マエダリンガイ（詩）

名は儀作、元治元年三月兵庫縣に生れ、大阪泰西學館を經て東京專門學校に入り文學科に學び、後

東京外國語學校に入つて露語を專修した。詩集「夏花少女」「花妻」等の著や露詩の翻譯などを示してゐる。

蛇いちご

堤の莓は紅らみぬ。
谷地田を越えて、いざきませ。
薯こそ蔓はつちを這へど、
青穗麥だに高からば
などうかるべき、東の間や
君がしのぶに、かくるゝに。

池に主すむ、雄の蛇、雌の蛇。
人は魔障とはやすなり。
されど、まことの戀の前には
長蟲、なにかさはるべき
君が御手にて摘みまさば、
莓もさぞや、うれしかろ。

戀ひしの人よ、夏まひる

野づらを横に、いざきませ。
待つは七時、見るは一目、
小松山にて、歡の
唄歌ひつゝ、眺めつゝ
我は莓をうちかざす。
よしと宣らむ神もしづかに暮れて行く秋の花野
の夕榮えを見て、
霧深し迷ふともなし草原におけらも啼きし寂し
ともなし
山々の木の葉黃ばめり君が住むロシアの荒野は
雪降るらんか
ふと逢ひし友と白鳥の橋のへに白き月かげ見つ
ゝ物語る
見れば蜜柑いまだ黃ならずしかすがに蜜柑畑の
匂ひ冷やか
咲けば散り散れば又咲き咲き咲きて命つなぐか
も朝顏の花

震災前住所　東京神田區三崎町三丁目一

牧野信一　マキノシンイチ（小）

明治二十九年十一月十二日神奈川縣小田原町に生れ、大正八年早稻田大學英文科を卒業して文筆に從ひ、「瓜」「凸面鏡」「白明」「公園へ行く道」「若い作家と蠅」「妄想患者」「池のまはり」「鞭韃」「眠い一日」其の他の短篇小說及び「海濱日誌」等がある。舊「十三人」「白磁」の同人である。

現住所　東京市外巢鴨宮下一七八九

牧野虎雄　マキノトラヲ（畫）

明治二十三年十二月新潟縣高田市に生れ、東京美術學校に入つて大正二年西洋畫科を卒業して後研究科に學んだ。文展へは第六回に「漁村」「朝の磯」第八回に「滿汐」「潮浴み」等を出し第九回に「紅葉の下湯」を出して三等賞に入り第十回に「溪流に水浴」を出して遂に特選に入り第十一回に「山間の初夏」を出した。此他國民美術協會に「浮雲」等の出品をした。大正八年帝展推薦となり、大正十二年帝展審査員候補者に擬せられた。

現住所　東京府下中澁谷三〇八

故卷菱潭　マキリヨウタン（書）

氏はもと深澤の家に生れたが、菱湖の養子となつて卷氏を冒した。幼時から入木道に熱中し、當時の大家卷菱湖の門に入つて其の技大に進み遂に其の嗣子となつた。書風甚だ菱湖に似て居るが幾分俗化して氣品の下つて居る處があるのは惜しい。村田海石の前に行はれた我が國の習字教科書中廣く採用されたものは氏の習字本であつた。明治十九年二月二十九日年四十一で病歿した。其師菱湖は歐陽詢の勁い字を習つたが後に近衞豫樂院公や龜田鵬齋の字に心醉した。

（系統）

- 川島蘭洲
- 大竹蔣塘—東條坦堂
- 萩原秋巖—手島霞湫
  - 村田海石—玉木愛石
    - 巖谷一六
    - 花房雲山
    - 中村春坡
    - 豐道春海
  - 中澤雪城—西川春洞
    - 金井金洞
    - 諸井春畦—妻諸井華畦
    - 武田霞洞
- 田鵬齋—卷菱湖
  - 卷　鵬州
  - 卷　菱潭
  - 莊田膽齋
    - 日下部鳴鶴
      - 比田井天來
      - 渡邊沙鷗
      - 丹波海鶴
      - 近藤雪竹
  - 岩瀨尙庵
  - 中根半嶺—中根半湖
  - 猪瀨尙賢
  - 森田梅磵
  - 高齋單山—高田竹山

夜自二寶珠津一歸、途上卽目

盆會華燈挂二半空一、　歌聲笑語月明中、
膝頭誰氏孤墳墓、　一點秋螢照二露叢一、

養父菱湖には之を見ないが、しかし彼をして、も少し長命ならしめたならば、かゝるものを多く殘して他界したかも知れぬ。

故正岡子規　マサヲカシキ（俳）

名は常規、伊豫松山藩の馬廻り加番隼太の子である。幼い時より同藩の學友で親戚にあたる三並良氏等と漢籍を學び、十九歳の時東京の大學豫備門に入つた。豫備門は後第一高等中學校と改稱せられたが、明治二十三年こゝを卒業の後東京帝國大學に入つた。同級中に語學の天才があつて子規は常に其の青年に及ばないのを嘆じた。併し少年より意地張りの氏はその青年に負けぬ氣になつて盛に英語を讀んだといふ話だ。その青年とは尾崎紅葉、幸田露伴等と相並んで明治の三大小說家と言はれた山田美妙齋のことである。氏は在學の頃より肺を冒されて健康上より在學を欲しないのと、又一は幼年の頃より手をつけた俳句に非常な興味を感じてこれに耽り、到底落付いて纏まつた學校の勉强をすることが出來ぬやうになつて、大學は二年で廢學した。氏はこの頃より俳句三昧に入り同鄕の先輩內藤鳴雪等と共に大に研究し、西洋の文學論理に當てゝ印象明瞭なる俳句が人を動かすこと最も著大なりといふ論を主張した。そしてこの標準に相當する最適の句は古人に於て與謝蕪村なりとて「俳人蕪村」の題目の下に蕪村の句を多樣に分解して世に示すところがあつた。これを日本新聞に揭載しようとして同紙主筆の陸羯南に相談したところが羯南は俳句などいふものは新聞に載せるほどの文學的價値なきものとして容易に應じなかつた。子規はいろ〳〵と自己の考を力說して始めて紙面の一部を與へられることになつたのである。かやうにして子規は二十五年日本新聞社に入つて俳話を連載したが其の門に集まるもの甚

だ多かつた。河東碧梧桐、高濱虚子、松瀬青々等を始め所謂多くの日本派俳人これである。當時俳壇に勢力のあつたものは舊派と秋聲會派等が其の主なるものであつたが日本派は全くこれらと別個の文學的境地に立つてあつた。二十七年「小日本」を發刊してその主筆となつたが幾くもなくしてこれを廢刊し、二十八年日清戰爭に從軍記者として金州旅順に行つた。當時の氏の生活は兼ねての病氣を重らせることになり咯血も亦甚だしかつた。歸來專ら病氣を癒さうとして非常な苦心をした。二十九年以降脊髓病を併發して脚が立たないが而も死に至るまで一日も筆を絶たなかつた。これは黑汁一滴や病床六尺等の文章を讀んだものゝ知つて居る處である。門人柳原極堂氏が雜誌ほとゝぎすを松山に起して子規一派の俳句を載せたが三十年の頃これを東京に移し子規自ら筆を執るやうになつた。今日高濱虚子のやつてゐるものがそれである。氏の句作は十八歳の時鄕里近くの三津濱の宗匠其戎翁に見て貰つた頃が初であつたやうであ

るが氏の祖父で儒者大原觀山の指導を幼少より受けてゐたので、漢詩文より得た讀書力と詩歌鑑賞力とは當時既に十分に養はれて居たに相違ない。一方中學校の村松校長は演說練習會を起して辯を練り頭を作つたので古い漢文の基礎と新しい幾多の思想とが氏の頭で統合され、後年月並の俳句を打破して寫生の大道を歩むやうになつたわけである。子規は又和歌が纖巧屈曲を事とする弊を除いて、金槐調を鼓吹し萬葉の古調に溯つて純眞な歌を詠まうとした。歌詠に與ふる書は實に其の當時に於ける一警鐘であつた。伊藤左千夫長塚節等を始めアラヽギ派の萬葉調歌人は多く氏によつて培はれた人々か其の流を汲んだ人々である。氏は八年の間苦惱と鬪つて三十五年九月十九日三十六歳を一期として溘焉白玉樓中の人となつた。歿する前日の句に

糸瓜咲いて痰のつまりし佛かな

痰一斗糸瓜の水も間にあはず

をとゝひのへちまの水も取らざりき

悲痛の狀察するに餘りがある。氏は獺祭書屋主人の號の外越智處之助、升、竹の里人等の隱號があり幼少の頃の詩には香雲の號を用ひてあつた。三並良氏は從兄であり加藤恒忠氏は叔父である。獺祭書屋俳話、子規言行錄、子規隨筆、續子規隨筆等によつて其作句詩論を見ることが出來るのみならず、大正十三年碧梧桐虚子等によつて　アルスから子規全集を發刊されたので、それによつて氏の業績は永久に傳へられるわけである。

俳句

夏雲や辰巳にあるを阿波太郎

夕風や崩れてしまう雲の峯

六月の蟻おびたゞし石の陰

糖味噌の茄子紫に明け易き

蝸牛や雨雲さそふ角の先

大雪や關所にかゝる五六人

日輝く諏訪の氷の人馬かな

年忘れ橙剝いて酒酌まん

大木を載せたる雪車の辷りかな

梟をなぶるや寺の畫孤

山茶花に犬の子眠る日向かな

短歌

永き日をたゞ一すぢにつばくらめ鎌倉までや往き返るらん

冴え返る舟の篝火小夜更けて大川尻に白魚取るらん

弘法をうづめし山に風吹けどとこしへに照らす法のともし火

里川の流れにかけし水車汲みてはこぼす山吹の花

我庭の小草も萠えぬ限り無き天地今や綠するらし

新體詩(從軍紀章)

あはれますらを。汝も亦

胸に掛けしよ紀念章。

功勳ありとも縱しさらば

いさを語るな。勳章は

われ等が望むことならず。

大和男兒が君のため
命捨てんと戰ひて
血をもて得たる紀念章。
分捕したる大砲を
溶かして鑄たる紀念章。
あはれたふとき紀念かな。
子孫に語り傳へまし。

―金州にたゝかひし人よ畠打つ

氏の新體詩は短歌の長歌に於ける反歌のやうに、後に俳句を一首づゝ附けてあるのも珍らしい。

漢詩（岐蘇雜詩）

群峰如レ劍刺二蒼空一、路入二岐蘇一形勝雄、
古寺鐘傳 層樹外、絶崖路斷 亂雲中、
百年豪傑 荒苔紫、萬里河山落日紅、
欲レ問虎拏龍鬪跡、蕭々驛馬獨嘶レ風、
一入二蘇溪一物盡奇、烟霞又養二半生痴一、
雨穿二絶壁一松根怒、水動二巉巖一佛座危、
杉檜 雲藏名將墓、莓苔 露濕美人碑、
荒涼 滿月向レ誰說、華表 嶺頭啼二子規一

尙子規の墓は東京市外田端の大龍寺といふ眞言律宗の寺内にあるから、東京での子規忌は大抵根岸庵かこの寺で行はれてゐる。

正木直彦（マサキナオヒコ）（美）

氏は大阪府平民正木林作の二男で文久二年十月二十六日に生れた。明治十四年大阪府中學校卒業後大阪府五等訓導となり、二十年大日本教育會員森有禮の提出した男女文體を一にする方案の論文を寄稿して一等賞を受けた。後高等中學を經て二十五年七月帝國大學法科大學を卒業し、翌年奈良縣尋常中學校長兼教諭に任じ、二十八年九月同縣尋常師範學校長事務取扱を兼ね、三十年二月文部大臣秘書官に任じ正七位に叙し十一月文部省視學官に任じ、翌年第一高等學校教諭を兼任し、三十二年四月歐米各國へ差遣され高等官五等に陞叙せられ大臣官房文書課長及美術課長、專門學務局勤務、高等教育會議幹事、第一高等學校教授を兼ね遂に東京美術學校長に任ぜられて今日に至つた。今日

我が國美術界の發展に盡すところの多いことはこゝに更めて云ふまでもない。

現住所 東京市牛込區矢來町四ノ二六

正木不如丘 マサキフニヨキユウ（文）

本名は俊二、明治二十年二月長野縣上田市に生れ東京帝國大學醫學部を出て慶應大學醫科大學の助教授となつた。氏は日本俳句鈔第一集時代既に日本派の俳句を喜び、澪筑子の號を以て盛に句作をした。しかし後に感ずるところがあつて俳句界と絶つた。其の時の句に

秋風や自ら捨てしホ句の才

といふのがある。

大正九年から二年間歐米各國に遊學して、歸來本職の餘暇をもつて東京朝日及新小說誌上等に隨筆診療簿餘白を發表した。醫師の文學者として木下杢三郎氏や齋藤茂吉氏等と共に廣く世に知られ且つ認められてゐる。

正富汪洋 マサトミオウヨウ（詩）

名は由太郎、明治十四年四月十五日、岡山縣邑久郡本庄村本庄に生れ、同縣の中學校を經て東洋大學の前身哲學館大學の教育部を卒業して、大正八年三月同大學講師となつた。詩人として夙に名を著し「豐麗な花」「汪洋新詩集」「戀愛小曲集」「小鼓」等の詩集を出し、また歌集「夏廂」茅野雅子若山喜志子の兩氏と共に三人にて編纂したる「婦人詩歌選集」（これには附錄として明治大正婦人詩歌史を添へてゐる。）譯詩集「バイロン、シエリ二詩人詩集」評傳「ゲエテとシルレル」「天才詩人バイロン」等の著がある。大正七年以來毎月雜誌「新進詩人」を發行してゐる。

海と少女

海から來る風で、瓶の百合が、くる〳〵廻り、
その百合の花の蔭に可愛らしい眼が動いて居る
高尙で、生々した顏よ、海水から上つたばかりで、房々とした髮がまだ濡れて居る。

卓の上にさしのべた手の一つには、
ミルクのコップがある。

窓の下の海で笑つてる小女達の聲がする。
窓から覗くと、青い浪に
搖れて居るやうに見える波女等は、
睡蓮の花かのやうに美しい。

そして、なほ少し離れた浪の上には、
白い鳥が飛び廻つて居る。

現住所　東京市外代々木富ケ谷一四五五

正宗得三郎　マサムネトクサブロウ（畫）

明治十八年八月岡山縣和氣郡伊里村に生れ、東京美術學校に入つて、四十年西洋畫選科を卒業し、大正三年佛國に留學し、五年歸朝した。文展へは第三回に「白壁」第四回に「夕日の反映」を出し大正四年佛國より作品を送つて二科會會員となり其第二回に「靜物」「リモージュ」「森林中の別莊」「牧場」第三回には歸朝して「室の一隅」「リモージュの田舍」「シュミューズの女」等三十六點を出陳して觀者を驚かし第四回には「犬若の濱」「曇の海」「犬若の岩」「巴里の市街」「梳る女」等十三點を出した。其著に「畫家と巴里」がある。自然派小說家正宗白鳥は實に氏の令兄である。

現住所　東京府下中野町字中野大塚一七四五

正宗白鳥　マサムネハクチヨウ（小）

名は忠夫、備前の人明治十二年三月三日岡山縣和氣郡伊里村に生れ、早稻田大學の前身なる東京專門學校文學科を出た。學生時代に於て既に高山樗牛（當時早大英語講師）より秀才として賞揚された卒業後七年間讀賣新聞の記者となり評論に筆を執つたが、自然主義文學の起るや創作家として立ち處女作「塵埃」出世作「何處へ」を公にして嶄然頭角を顯し眞山青果と相並んで新進作家の雄と稱せられた。「何處へ」は當時の青年間に彌漫してゐた虛無主義的思想を描けるものであつて明治文

藝史上將た文明史上最も注目すべき作である。皮肉な深刻な觀方と卒直な簡勁な書き方とを以つて氏は人間の味はふべきあらゆる幻滅のシインを描いた。氏は又德田秋聲と同じく女性描寫に特技を有し「微光」の一篇最も傑作の稱がある。先に短篇「紅塵」「まぼろし」「入江のほとり」長篇「二家族」「毒」「生靈」等の作があり近く「二階の窓」「五月幟」「深淵」等の著がある。態度は餘りに消極的で目下の新興文壇の步調に同じ難いものがあるけれども眞の自然主義小說は白鳥にのみ殘つてゐると言はれるほどの確かさを持つてゐる。文壇第一流の作家として花袋、秋聲と相並ぶほどの地位を占めて居つて群少の追隨を許さぬものがある。氏の作は態度は荷風氏のと同じやうに消極的ではあるが動いてゐる點は大に違ふ。又人間としてはまさしく「正義派」に屬すべき此の作者が藝術家としてはひねくれて出て來る場合が多いのは遺憾だと誰かゞ評したが、世間の常識生活常習生活は氏にとつてあまりに倦怠に値するのかも知れない。兎に角或一ケ年の作を見るに「父親と二人の娘」「或る戀物語」「開放」「團菊死後」「監禁」「梅檀木橋」「冬の月」「三疊の間」「青年の權利」「屛風」「ある銀行員」「迷妄」「復活」「湖水のほとり」「ある嫉妬」「馬鹿の淸吉」「さまざまな不安」等數多の作を公にしてゐる。しかも他の創作家のやうに世間の批評をあまり氣にせぬ方だから、創作の筆を措いて批評の批評をするやうなことなしに一意專心創作の一路を辿つてゐるのは感心である。これも氏の性質の一面であることがわかる。「迷妄」にしろ「馬鹿の淸吉」にしろ、氏の藝術は益々磨かれて今や全く圓熟境に入つて渾然たるものがある。洋畫家正宗得三郎氏は氏の實弟である。

現住所　神奈川縣大磯町

眞下醒客　マシタセイカク（小）

名は興雄、醒客の外、勢多東村と號す。明治二十二年七月十五日群馬縣佐波郡來女村伊與久に生れ、